

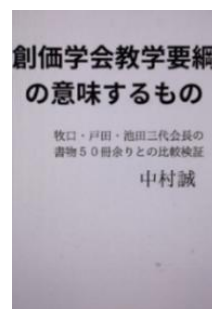
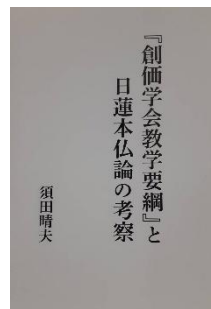
創立95周年の日に思うー「教学要綱」の不正 2025年11月18日

創価高校・大学4期 図斉修

(以下、赤青字等は図斉によります)

11月15日に池田大作先生の三回忌を、そして本日、創価学会創立95周年と牧口常三郎先生の殉教の日を迎え、私は三代会長に衷心より報恩感謝、追善回向申し上げました。

2年前の11月18日、「日蓮大聖人は、単に釈尊から託された『南無妙法蓮華經』を弘める菩薩である」(91頁)と大妄語の「教学要綱」が発刊。「教学要綱」の邪義は、その後、須田晴夫氏の「『創価学会教学要綱』と日蓮本仏論の考察」(2025年1月)と、親友中村誠氏の



「『創価学会教学要綱』の意味するもの」(2025年3月)により、さらに、真田大氏の体験談 <https://www.youtube.com/watch?v=546s8CqCrc> 秋波東吾氏の論考 https://note.com/pure_ruff1825/n/n6102a03f2087、Clear Sky 氏の <https://t.co/0pCNeSSStyC>、によりその邪義が明白になりました。しかし、今も「教学要綱」は絶版になっていません。今、会員はその邪義に不信を抱き、混乱が生じていることに大きな危惧を抱きます。私は95周年の現状をこの拙文で記し置きます。

「教学要綱」の邪義を糺した須田晴夫氏に対し、昨年11月1日一氏は学会本部や刊行委員会および宮田・菅野両氏の名譽を毀損！破和合僧！一と、国法と仏法の極論をいきなり持ち出し追求したリンクー

<https://www.sokayouth-media.jp/answer/2826047.html> または、

<https://x.com/nichiren8008/status/1983731450215293016> は、須田氏との対話を最優先にすべきでした！対話第一を掲げる創価学会本部また教室は、なぜ須田氏と直接対話し、正邪を学会内外に表明しないのか甚だ疑問であり、これでは学会は宗教団体として会員の教義への質疑応答、及び社会的責任を放棄、須田氏に敗北したと言えます。私は、池田先生が玉稿「法華經の智慧」の鼎談者とされた須田氏に対する暴言、非礼は、池田先生への背信なのだ！と断言します。

そのような状況下、中村誠氏が新たに以下二つ、完璧な破邪顕正の論考 <https://share.google/AAfgd2QmbF3TKUxqL> <https://share.google/ZQ4iq9jCp2TX7S484> を、公表。これで「教学要綱」の邪義はさらに明白となり、私は、「教学要綱」が学会員さんの不信、混乱を終息するために即刻、誤りを認め、自ら絶版にすべきと断言します。

上記、中村誠氏の二つの論考は、「**教学要綱**」を書いたと自認する宮田幸一氏がこれまでに記してきた論文、論考の誤りを明白にしました。先日、私は、中村氏から以下の論考を頂きました。氏の上記二つの論文は、この論考での「人法一箇」を更に具体的に論じられたと拝しています。ご参考下さい。――

「(戸田先生は)『大宇宙即御本尊ということであり、南無妙法蓮華經の生命は、久遠以来、大宇宙とともにあるということです』と言われていた。」(法華經の智慧4巻、p.74) 御本尊即大宇宙なのだから、総じては宇宙全体であり、我々の生命でもある。そして別しては日蓮大聖人の御生命が御本尊に存在していない理由はない。だから「別して本尊総体の日蓮聖人」(日順の誓文)ということだろう。人を大聖人、法を南無妙法蓮華經とする日順の思想も、戸田・池田先生と全く同様の思想である。池田先生の発言からそれは明白である。「大聖人は、私たち末法の凡夫が御本尊に妙法を唱えることで、「常住此説法の仏」と一体になれるようにしてくださったのです。**人法一箇の御本尊**です。”人”の側面は、久遠元初の自受用報身如来。”法”の側面は、事の一念三千です。だから、戸田先生は、久遠元初の仏のことを「一念三千様」とも言われていた。」(法華經の智慧4巻、p.74)

又、「総体所顕の十界を互具の仮体」とあり、「仮の体」という表現は、釈迦や多宝などの仏が実体として固定して「そこに本当にいる」わけではなく、あくまで十界の中の一つの現れ、つまり生命や存在の「仮の姿・働き」として捉えられている。即ち、釈迦や多宝の仏も、菩薩や声聞も、天や人などの世界も、すべては本質的には一つの生命・存在の働きが様々な形(仮の体)で現れているにすぎない。だから、「仏界に釈迦が物理的にそこに座っている」のではなく「仏界という生命の働きが釈迦や多宝の機能として現れている」ということである。これも戸田・池田先生の教えと全く同じである。「妙法は法であり、日蓮大聖人は人であり、**人法一箇**なのである。ゆえに、もったいなくも、大御本尊の中央には、「南無妙法蓮華經 日蓮」としたためられている。その左右には釈迦多宝、あるいは上行等の四菩薩、さらには、声聞、縁覚、ずっと地獄界の衆生までいることがわかる。これは、釈迦多宝といえども、大聖人の己心の釈迦多宝であり、大聖人の生命の働きであることを示すものである」(御義口伝講義上、p. 297)

一方で教学要綱は次のように主張する。『『寿量の仏(久遠釈尊)』そのものを本尊とするのではなく、『寿量の仏』が多宝仏、四菩薩などとともに脇士となる文字曼荼羅を本尊とする』(教学要綱 p. 79)題目が仏と切り離された単法本尊であり、右側にインドの釈迦が脇士なり、さらにそのインドの釈迦の脇士に大聖人になる。

そして、我々が文字曼荼羅に祈りを捧げることで、釈迦や大聖人が勧請されるという、戸田・池田先生はもちろんのこと、日順にも全く見られない奇怪な思想である。そして、宮田教授は第七十四回の宗教学会で「宝塔の右側が人間の最高のポスト」と発言していることから、その共通点がみてとれるのである。一と。まさに、正論です。

また、中村氏は『**創価学会教学要綱**』の意味するもの』で以下論じています。

今回の池田大作先生監修を謳う『教学要綱』で本尊の解釈がごっそり変わってしまっているのは今まで議論してきたところである。果たして先生がこのようなことを人生の最晩年にされたのだろうか。このようなことをして晩節を汚されたのだろうか。どのようにして本来の創価学会の日蓮本仏義を破壊しようとしているか、その手がかりは宮田教授の論文にヒントがある。宮田教授の「日有の教学思想の諸問題」という論文に次のような主張がみられる。



Koichi Miyata

たまたま5年前の投稿が「過去の思い出」で出てきた。その時に心配していた池田先生の逝去ということが現実になってしまった。来年からは「世界青年学会開幕の年」ということで、世界中で青年部による広宣流布の活動が展開されると思われる。多分その中で最も多くの成果を上げるのは、インドであろうと推測されている。人口動向や経済変動等の予測から見ても、少子高齢化の日本の創価学会がリーダーシップを取れる時代は終わったと思われる。そのための準備に『創価学会教学要綱』が出版されたが、これはあくまでも従来の日蓮正宗の影響下にあった教学を徹底的に検討し、学問的に日蓮の御書として認められる文献、特に『観心本尊抄』『本尊問答抄』を使用して、日蓮大聖人の思想を明示するという作業をしているだけである。「発刊にあたって」において、「この要綱は、創価学会の教義を広く社会に対して客観的に説明することに力点が置かれています」とある通りである。日蓮本仏論を主張するために従来使用されてきた『本因妙抄』『百六箇抄』は使用せず、人法一箇論を主張するための『御義口伝』を使用することもしないという禁欲的な叙述に徹している。従来の教学に慣れ親しんだ人々にとっては、物足りないと思われるだろうが、世界に日蓮大聖人の仏法を理解してもらうためには、一度は経なければならない過程であると納得していただくしかないと思われる。創価学会が日本の没落と運命を共にするのか、しないのか、今後の数年間で明らかになるかもしれない。

<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/paper4-1.html>

「1-1 曼陀羅本尊論より、この段階(日興～日道)では大石寺派に人本尊の思想や、ましてや人法一箇論の本尊思想は見られない」一と。同教授は、人本尊とは日蓮御影像、即ち大石寺の神話であるとするので人本尊を否定し、南無妙法蓮華経と日蓮を切り離そうとする。

なぜこの二つを切り離す必要があるかという、南無妙法蓮華経即大聖人であるならば、この大聖人を師匠とすることで釈尊は成仏できたということになってしまい、これまで通りの日蓮勝・釈尊劣の世界観になってしまうからである。池田先生が死去された時、彼は facebook で左のような投稿(現在は削除済み)をした。



返信する...



この教授の特徴としては、本当に口の軽い方だと思う。この方のおかげで、全てがバレバレになっているのだ。

なぜ『教学要綱』は池田先生や戸田先生の教えに叛いて、御義口伝、本因妙抄、百六箇抄を用いないのか。学術的な価値を高めるためなどでは決してない。池田先生は「邪宗身延派日蓮宗等が、自らの宗派の非をかくすため、三大秘法抄を偽書扱いにしたり、あるいは、御義口伝、本因妙抄、百六箇抄を偽書扱いにした」(『御義口伝講義』上 p. 800)と述べている。

仮に百六箇抄を用いると、「下種の法華經の教主の本迹 自受用身は本、上行日蓮は迹なり。我が内証の寿量品とは、脱益寿量の文底の本因妙の事なり。その教主は某なり」(百六箇抄)とあるので、観心本尊抄の「寿量の仏」=日蓮大聖人となってしまふからである。また、御義口伝にも「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六」とあり、同様の解釈になってしまう。

御義口伝には日蓮勝・釈尊劣の世界観が明確に説かれているので、日蓮中心の世界観では世界へ布教する宗教ビジネスの邪魔になると考えているからであろう。宮田氏は「最も成功を納めるのは、インド」としているが、釈迦中心の世界観にして池田先生の教えを歪め、インドの人々を欺けば日蓮仏法は拡大すると考えているようだ。これほどの池田先生や戸田先生に対する反逆行為はないだろうと。

私は、上記、中村氏の論考に全く同感です。そして思います。宮田氏は自身の facebook 上で、日蓮大聖人の最重要のご相伝「御義口伝」を否定していますが、それは、池田先生が「御義口伝講義」を記されたことへの完全なる否定、更に根本として、池田先生自体の否定なのだと！

さらに、中村誠氏から以下の論考を頂きました。

一宮田氏の論文に、池田名誉会長(『人間革命』第9巻, p.132)の言及を加えることで、宮田論文の引用処理の偏向性と史料評価のねじれがさらに明確になりました。以下です。

補足：「日興の教学思想の諸問題（１）」の諸問題

「日興の教学思想の諸問題（１）資料編」にも、筆者は見逃せない問題点を発見したので、日有論文の本人尊論からは脱線することになるが、これも追加として述べておく。<http://hw001.spaaqs.ne.jp/miya33x/nikkodoctrine2.html>

波木井殿御返事（与波木井実長書）に関する宮田教授の議論で次のようなものがある。

2－5－3 『与波木井実長書』

『与波木井実長書』（『宗全』2-169）については、『宗全』によれば、正本が大石寺にあるということであるが（同 2-170）、堀日亨の『身延離山史』では正本の存在を否定している（『身延離山史』 p.143）。『本尊論資料』には身延日朝の『立像等事』に全文引用がある（『本尊論資料』 p.114）。

堀日亨は『身延離山史』の中で、「偽文書にはあらざるが、但しこの状の骨子奈辺にあるや、愚推に能わず、必ず首尾の文または引文の間にも断章ありしものと思わるる、それらが整束して始めて本状の意義が判明するであろう」（『身延離山史』 p.144）と述べて、日興のものであっても、不完全な文書であるから、使用には注意すべきであるとしている。現在の日蓮正宗の立場では、高橋肅道の『日興聖人御述作拝考1』によれば、真偽未決とされている（高橋 p.52）。私は堀日亨の考察を妥当と考えているので第二段階の資料として使用可能であると思われる。

ところがこの文献に関しては、人間革命9巻（小樽問答, 1976, p. 132/ 2013, ワイド版, p. 156）で次のような池田先生の記述があるのである。

「（長内は）問いつめられて、やっと日興上人の例の「波木井殿御書」を持ちだした。「一閻浮提の内・・・波木井の郷は久遠実成釈迦如来の金剛宝座なり。天魔波旬も悩ず可からず。上行菩薩日蓮聖人の御霊窟なり・・・」

この手紙は日興上人が波木井実長に宛てたものとされているが、堀日亨以下はその著『富士日興上人評伝』のなかで、手紙の他の内容からも様々の疑点をあげている。そして、その真偽を問題にされている曰くつきの手紙である」両者とも堀日亨上人の文献（前者は『身延離山史』、後者は『富士日興上人評伝』）を用いながら、宮田教授は「第二段階の資料としては使用可能」、即ち信用できる文献としており、池田先生は「真偽を問題にされている曰くつきの手紙」として、信頼できない文献と評価しているのである。

『富士日興上人評伝』は創価学会から出版されており、その出版願主は池田大作先生なので、この著書の内容の趣旨を間違えることはありえないであろう。それではこの矛盾はなんであるのか不審に感じたので、原本の文献を調べてみた。以下に当確箇所を全文を引用する。

「一閣浮提之内日本国、日本国之内甲斐園、甲斐國中波木井郷」

これもまた、離山史にも、この詳伝にも掲げておいたから再録せぬが、最古写本は延山の日朝の相伝書のなかにあるも具文ではない。首中尾とも、切れ切れの要文で、その抄録の目的は、立像の釈迦仏の批判のためのようである。当時、日興上人の直筆かまたは時代写かが存在していたろうが、現存の写しでは明細に判読ができぬので、日辰の本には、中間二行程の白行があるのは注意が行届いておる。しかし、院主学頭の件を大々的に誤読し、精師もまた誤りを襲踏しておらるるのは遺憾である」（『富士日興上人評伝』，p. 421）

延山相伝巻物の中に在るもので興師の自筆は存在せず、又写本とても此州に前後整束の具文は未だ拝見した事がない、無論他山に於てもである。此状の前半は身延山と波木井入道との礼賛であり、後半には朝師抄録の目的たる立像關係もあるが離山に付いで必須の文献ではない、或る意味で考ふれば単に興師の延山及び波木井への賛辞あるを取柄にし或人が写し置きしものが其為に残留したとも思はれんでもない、此後半の四菩薩添加、安園論主義謗法嚴戒、院主、学頭万代法則の三箇条は決して延山にも波木井にも裨益する文意で無く、此三条興師の常説なればたとひ断片なりとしても偽文書にはあらざるが、但しこの状の骨子奈辺にあるや、愚推に能わず、必ず首尾の文または引文の中間にも断章ありしものと思わるる、それらが整束して始めて本状の意義が判明するであろう、其が祖師伝にも家中抄にも此「立像等事」の抄文のまた引用してあるばかりで無く遂には「院学地頭」を興師が交渉事項の一つと見てか見ずしてか、寧ろ波木井より院学地頭の教えを請待ありしが如く書かるるに至っては怪訝の限りである。しかしながら朝師が興師状等を抄録したるは全く立像佛排斥の文証にせんが料である故に、其已外の離山の諸点及び本状の精神ある分は除却したのであらう。（『身延離山史』，p. 143-144）

個人的な意見 宮田教授は、堀日亨上人の『身延離山史』における記述から、「怪訝の限り」「本状の精神ある分は除却した」といった否定的評価の語句を引用せず、「不完全な文書であるから、使用には注意すべき」と中立的な表現に言い換えている。しかし堀上人は、「偽文書にはあらざるが…」と留保しつつも、「怪訝の限り」「本状の精神ある分は除却した」と述べ、この文献が改ざん・編集を経た可能性を明確に示唆している。 6/124

池田大作先生も『人間革命』第九巻において、「真偽を問題にされている曰くつきの手紙」と評しており、この評価は堀上人の史料批判の文脈と一致する。これに対し、宮田教授の「第二段階の資料として使用可能である」という結論は、原典の懐疑的文脈を恣意的に省略・改変した結果生じたものであり、なぜ使用可能であるかという根拠は何も述べられず、史料批判上の適切性を欠くと言わざるを得ない。

さらに問題なのは、日興上人滅後ほぼ百年を経て、日興門流と対立していた身延派の側に現れたこの文献を、宮田教授が第二段階の資料として使用可能と擁護している点である。その背景として、同教授が「釈迦仏を本仏とする立場」を前提として史料を取捨している可能性を否定できない。事実、『人間革命』第九巻（小樽問答の章）には、身延側がこの『波木井殿御返事』（与波木井実長書）を、釈迦本佛論の論拠として用いたことが明記されている。

一方で、日蓮本仏論の立場にとって都合のよい似たような文献を、いずれも「信頼に値しない」と一括して退ける宮田教授の姿勢は、史料批判における一貫性を欠き、恣意的と評されてもやむを得ないであろう。そして、教学要綱を擁護する創価学会員（本当にそうなのか？）によって SNS 上でこの曰く付きの文献が肯定的に引用され、日興は釈迦本佛論者であったとする議論が展開されることも大いなる問題といえるだろう。—と。正論と拝します。

また、宮田氏は以下記しています。—「私は日蓮の主張は誤っていると思っているから、曼荼羅からはその記述(「有供養者福過十号」「若悩乱者頭破七分」の文)を除外すべきだと思っている」—と。

そして、この日蓮大聖人その人を否定する暴論を須田氏に批判されているのです。(『[創価学会教学要綱](#)』と日蓮本仏論の考察」p.158)。宮田氏の論述は—彼の論文「SGI 各国の HP の教義紹介の差異について」に掲載されています。

さらに、私は、宮田幸一氏が昨年3月に、自身のフェイスブック上で、「教学要綱」を作成したと明記した事実を知りました。次ページに掲載しました。



宮田氏は—2024 年 3 月 2 日 この 5 年間にいろいろありましたが、私にとって最大の事は、池田先生の生前に、『創価学会教学要綱』を完成することができたことです。

これで完全に教義的にも日蓮正宗から独立したことが明示できたと思われま
す。完成に一助出来たことを今生の誉れとし、余生を後進への手助けに捧げようと思っ
ています。(宮田幸一氏の Facebook より) ーと。

この宮田氏の言質は、昨年11月の男子部教室の配信— 氏（須田晴夫氏の事、図斉記す）は「『教学要綱』を作成した中心は創価大学名誉教授の宮田・菅野両氏であると聞いております」と記しているが、これは事実と異なるものであり、宮田・菅野両氏は刊行委員会には入っていない—に、全く齟齬する大嘘でした。

私は、大変、驚愕しました。

宮田氏は「御義口伝」を否定、御本尊様の相貌を否定なのです。そんな人が書いた「教学要綱」を、池田先生の監修として発刊したことが、どれだけ池田先生の名誉を傷つけたか！私達池田門下生は決して忘れてはならないと、ここに記し置きます。

そして私は、池田先生の3回忌を迎え、池田先生の名誉のため、また、創立95周年の本日、「教学要綱」は即刻、絶版にしなければならない！と断言します。

本日、私は、華果成就御書の「よき弟子をもつときんば師弟・仏果にいたり、あしき弟子をたくはひぬれば師弟・地獄にをつといへり、師弟相違せばなに事も成べからず」(新1211、全900頁)を拝し真意を心肝に染めました。

そして、以下、牧口先生の獄中尋問調書(自筆)も拝しました。一人の本尊と云ふのは、法報応の三身が互に融通する上での**自受用報身如来**であり、久遠の智徳を表面として、内面では法身仏と応身仏とも交渉する夫れが、末法には人格者としての日蓮大聖人を信じ奉って(中略)猶生きて居られる如く敬ひ奉るのであります。此の自受用身の人格に妙事の三千の法が具って居る処が**人即法の本尊**であり、三千の法に自受用身の具って居る処が**法即人の本尊**であり此の互具一体の処を**人法一箇**とも一体とも申して私達の帰依する仏様であります一と。(牧口常三郎全集第10巻197頁)。また、同頁(脚注)には一**自受用報身如来** 自ら広大なる法樂を受用する仏身。**久遠元初の自受用報身如来とは日蓮大聖人**のこと。一と遺稿です。



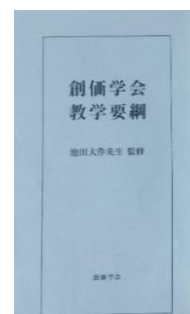
私は、創価大学時代からこうした教えを池田先生から長年学びました。世界中の池田門下生もそうであると思います。上記の御文は牧口・戸田先生に直結する教えです。この御文に対し「教学要綱」は全く矛盾する。しかも、本尊に関する最重要の教えであり永遠に普遍的でなければならない。また、上記の、牧口先生の御本尊様についてのご遺稿をも無視とは一体どういうことか。

人間革命第6巻ワイド版(推移の章, p. 178)に「日蓮大聖人の嫡流を名乗る僧侶が、その根本教義を勝手に歪曲することは許されることではない。この許されざることを、彼(笠原慈行)は早くから敢えて行っていた」と。これと同じことを、教学要綱はしている。これは一体どういうことか。牧口・戸田両先生は**人本尊**という宗門の神話、即ち間違った本尊を信じていたのか。

「諸宗は本尊にまどえり」(開目抄)とあるが、両先生は本尊にまどえる人々だったのか。それならば御観念文からこの二人を排除する必要がある。又、釈迦が永遠の仏なら、なぜ御観念文に根本仏の釈迦が昔から入っていないのか、首脳部は説明する必要があるであろう。そして、こうした教えに師弟はあるのか。華果成就御書に説かれているように、そこに師弟はあるのか！

また、人間革命の一巻に非常に重要なテーマがあります。「一人の人間における偉大な人間革命は、やがて一国の宿命の転換をも成し遂げ、さらに全人類の宿命の転換をも可能にする」と。この一人の人間の偉大な人間革命というのは、主人公の戸田先生の生き方を述べたものですが、現在の首脳部のように、日蓮大聖人が真ん中に座するという本尊観を否定し、単法本尊を説くのであれば、戸田先生は誤った宗門の神話（人本尊）を説いて人間革命をなしとげたのか、という思いです。 * * *

「教学要綱」が人法一箇の本義を無視し、釈尊の本来の境地（本地）は無限の過去から無限の未来まで常に存在する「永遠の仏」（28頁）また、日蓮大聖人は、単に釈尊から託された「南無妙法蓮華経」を弘める菩薩である（91頁）—と記すのは、日蓮本仏論を捨て去り、日蓮大聖人を幽閉する暴言であり、牧口先生の殉教に対し真っ向から弓を引く不知恩の放言、邪義である！



私は、5月に古希を、先月には入信70年となりました。小学生の頃より、池田先生のご指導を我が生命のど真ん中に染み込ませて参りました。池田先生のご指導を曲解、我見で改竄することは、我が生命をかけて絶対に許しません。これは、毎日、日蓮大聖人様、**人法一箇の御本尊様**からご下命頂いているからです！これが本拙文の主意です。

* * * *

一、三代会長への報恩感謝
創価学会初代会長牧口常三郎先生、第二代会長戸田城聖先生、第三代会長池田大作先生を
広宣流布の永遠の師匠と仰ぎ、その死身弘法の御徳に報恩感謝申し上げます。
と祈念の後、題目三唱します。

私たちは、朝晩の勤行・唱題で三代会長への報恩感謝を致します。牧口先生は殉教、死身弘法なのです。

「教学要綱」は牧口先生の遺稿に違背し、ご觀念文の「永遠の師匠」との整合性もないです。この度の拙文も日蓮仏法の本義と三代会長の正義を厳守するべく、私は、池田門下生の使命と責務から「教学要綱」の邪義を皆様にお伝えします。そして、「教学要綱」は絶版にすべき！と訴えます。

「教学要綱」が三代会長の「日蓮本仏論」に完全に違背する現状を、皆様にお伝えすべきと、年初より6回（1月2日、2月16日、4月2日、5月3日、8月24日、9月12日）拙文を記しました。

<https://drive.google.com/drive/folders/1wSKZjiOPLvyJVxUCWU8LL-LHJrg4ZNNi>

今回も同じ使命感です。本年、池田先生の会長就任65周年の意義に鑑みて、今、先生の会長就任の6日後、昭和35年5月9日の下記のご指導（女子部幹部会 十大部「会長講演集」第1巻）を心肝に染めています。

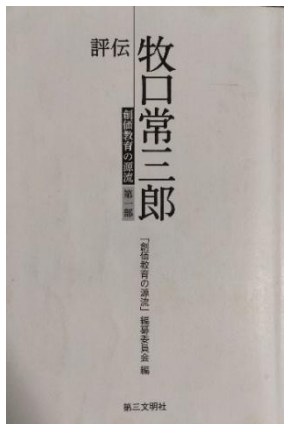
— 教学のほうに女子部の方々は力を入れていただきたいのです。（中略）教学部の助師の方は、御書、御書の中でも御消息文をぜんぶマスターしていただきたいのです。講師の方は**十大部御書**、文段もはありますが、十大部はとくにぜんぶマスターして、助教授の方は御書ぜんぶと六巻抄ぜんぶをマスターする。それがわからなければ助教授はやめてもらうというぐらいに教授の方々はぜんぶ。御書であろうが六巻抄であろうが、富士宗学要集であろうが、ぜんぶ日蓮大聖人様の教えはわかる。ですから、下の方々はどんどん、ひまさえあれば上の方々に聞いてもらいたいのです。一般部員の人は助師の人に、助師の人は講師の人に、また助教授の方に、教授の方に、そして、あまり上の方がわからなかったならば、教学部長か理事長のところへ『どうもあの助教授の人はなにもわかりません。どうもあの講師の人は知らないらしいです』と、こういうふうにしてもらいたいのです。今度は相談の結果『それではちょっと学会の講師として、助教授としてまずいからやめてもらおうではないか』と、このぐらいに教学陣営を強固にしていきたい。—と。

私は、池田先生の上記ご指導通り、今後も教学、特に「教学要綱」の邪義を幹部に問います。そして、この度の拙文を以下内容で記します。

1. 牧口先生の獄中の激闘、ご様子を「評伝牧口常三郎」よりご紹介。
2. 牧口先生の獄中尋問に対する破邪顕正の獅子吼と日蓮仏法の真義をご紹介。そして、それに反する「教学要綱」の実態を記す。
3. 池田先生の十大部講義（監修含む）に違背の近刊十大部講義を検証、男子部教室が一「教学要綱」は十大部を中心としている—との不正を糾す。
4. 新たに、近刊の教学本4冊が池田先生のご指導原本を無視、削除、改竄している現状を検証し、創立95周年に鑑み教学の危機的現状を記し置く。
5. 1月2日に記した池田先生の「方便品・寿量品講義」の削除、改竄の30カ所が現在までに計75数カ所になり、「御義口伝講義」他への近刊教学本の削除、改竄の指摘と、追加論考を含め一つにまとめて再掲載する。
6. 池田先生の海外での人法一箇と久遠元初の自受用身如来のご指導を紹介、これにより、上記二つのご指導を無視した「教学要綱」が世界へ発信されても無意味であることを記す。
7. 「教学要綱」の「五重の相對」と「本門の本尊」の不正について破折。
8. 終わりに

以下、1～8を論述します。

1. 牧口先生の獄中のご様子を、「評伝 牧口常三郎」より引用、ご紹介。



評伝の最後 444～458 頁に、牧口常三郎先生の獄中のご様子が書かれています。私は再読、感涙、自身の信心を猛省、襟を正しました。この本の最後には、牧口先生が獄死の直前に、三男の洋三氏が戦死との悲報とあります。牧口先生は子息 4 人全員を亡くされ、また、4 人の女子の一人も亡くされています。恥ずかしながら知りませんでした。

牧口先生の獄死、殉教の様子をあらためて拝する時、「教学要綱」は、牧口先生が獄中で日蓮仏法の真義、正義を師子吼、国家諷曉されたご遺稿の枢要一日蓮大聖人＝久遠元初の自受用身如来、御本尊の相貌「南無妙法蓮華經 日蓮」は人法一箇一を完全に無視することに対して、怒り心頭です。以下、牧口先生の獄中について引用させていただきます。

獄中の日々

牧口常三郎は、特高警察によって、一九四三(昭和十八)年七月六日に検挙され、一九四四(同十九)年十一月十八日に亡くなるまでの約一年四カ月間、獄舎に身を置くことになる。(中略)戦後、戸田城聖は、牧口に対して殴る蹴るの暴行を働き、さんざんに虐めぬいた警官がいた、と話している。(中略)

警視庁での訊問が終わった牧口は、九月二十五日に豊島区西巢鴨(現在の同区東池袋)の東京拘置所へ移される。その直前に、戸田は牧口に言葉をかけることが許された。戸田が牧口に会ったのはこれが最後になった。「思い出しますれば、昭和十八年九月、あなたが警視庁から拘置所へ行かれるときに、最後のお別れでございました。『先生、お丈夫で』と申しあげるのが、わたくしのせいいっぱいでした。あなたはご返事もないうなずかれた、あのお姿あのお目には、無限の慈愛と勇気を感じました」(「牧口先生三回忌に」)(中略)

牧口は、十日に一回ほど家族にはがきを出すことが許された(中略)はがきの最後に「御書二冊(日蓮聖人御遺文)書き入レシナイモノ」と差し入れを希望したが、貞子によれば、御書の差し入れは許可されなかったとのことである。

「災難と云ふても、大聖人様の九牛の一毛です、とあきらめて益々信仰を強める事です。広大無辺の大利益に暮す吾々に、斯くの如き事は決してうらめません。経文や御書にある通り、必ず『毒變じて薬となる』ことは今までの経験からも後で解ります。」(中略)

「戦地をおもうと、がまんができます。大聖人様の佐渡の御苦しみをしのぶと何でもあります」「今が寒さのぜっちょう〔絶頂〕です」「布団を今一枚(上下共)大急ぎで差入れて下さい」しかし、「布団を今一枚(上下共)」の部分
は、非情にも墨で塗り潰されていた。(中略)

一月二十六日付はがきでは、二カ所が墨で塗り潰されている。一つは「御守り御本尊を口口口たのんで差入れてもらひたい」(傍線は牧口)で、もう一つは「心一つで地獄にも楽しみがあります」である。独房で御本尊を拝むことも、独房生活を「地獄」と表現することも許されなかったのである。(中略)

獄中から届いた最後のはがきは、一九四四(同十九)年十月十三日付である。「十月五日付、洋三戦死ノ御文(中略)拝見。ピッキリシタヨ。ガツカリモシタヨ。ソレヨリモ、御前ダチ二人ハドンナニカト、案ンタガ、共ニ、立派ノ覚悟デ、アンドテ居ル」(中略)

一九四四(昭和十九)年十一月十七日夕刻、疎開先の茨城県古河からひとり目白の自宅に戻った貞子は、拘置所からの電報を受け取った。すぐに拘置所へ向かって牧口と対面する。(中略)この日、貞子は終電で目白の自宅に帰るが、翌十八日朝に訪れた時にはすでに牧口は亡くなっていた(享年七十三) 静かに息を引きとったのは、午前六時頃であった。十一月二十日、牧口の葬儀は、十人前後の家族・知人によって行われた。(中略)

牧口の遺骨は常在寺に預けられていたが、一九四五(同二十年)年 四月十三日深夜から翌日未明にかけての空襲で同寺は焼失し、遺骨も失われてしまった。

二カ月後に、牧口の死を獄中で知った戸田は、後年次のように語っている。「私は牧口会長の死を知らなかった。昭和十八年の秋、警視庁で別れを告げたきり、たがい三疊一間の独房に別れ別れの生活であったからである。(中略)昭和二十年一月八日、投獄以来一年有半に、『牧口は死んだよ』と、ただ一声を聞いたのであった。独房へ帰った私は、ただ涙に泣きぬれたのであった」(「創価学会の歴史と確信」)ーと。ございます。

戸田先生の「開目抄」講義 上、下には、牧口先生の獄死、殉教を引かれ、次のように記されています。

開目抄
上

細井日達 監修
戸田城聖 著
池田大作 補訂
日蓮大聖人御書十大部講義
第二卷

開目抄
下

細井日達 監修
戸田城聖 著
池田大作 補訂
日蓮大聖人御書十大部講義
第三卷

「開目抄」上 原版の序1頁には—

本書において**人の本尊**を開頭し給い、日蓮は末法の本仏なりとの御宣言があつてのち、観心本尊抄において**法本尊**を開頭あそばされたのである。—と。

そして、「開目抄」下313, 314頁には—
本章は開目抄上下全体を三段に分けた最後の結勸にあたる。上巻の最初に一切衆生の尊敬すべきものとして、主・師・親をあげ、いま、本章にいたって「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」と御本仏・**人本尊は日蓮なり**とご宣言になって当抄を終わられている。「愚人にほめられたるは第一のはぢなり」とのご聖言は、真の仏法を広布せんことを念願とする創価学会初代会長牧口常三郎先生が、つねに座右の金言となされていたご信条であった。（中略）

牧口先生は御文のとおり、法華経のためならば、いかなる非難迫害も恥ではないとの信念にもとづいて、法華経の肝心を広布のゆえに**牢獄の露と消えられたのである**。日蓮大聖人の仏法を信ずるものはこれこそ第一の亀鑑であると信ずるのである。—と。

* 亀鑑の意味は手本。模範。

（私見）上記、牧口先生は獄中において、御書もお守り御本尊様も拝せない中で、日蓮大聖人を思われ、「大聖人様の佐渡の御苦しみをしのぶと何でもありません」とのお手紙、遺文でございます。その歴史を顧みる時、私たちが、今、学会員であることにつき、牧口先生、そして戸田・池田両先生への衷心からの感謝は尽きません。と同時に、三代会長を永遠の師匠と拝する私たちは、牧口先生、戸田先生の獄中の御精神、信心に一分なりとも相違してはならない！との思いでいっぱいです。それなのに「教学要綱」は、牧口先生の獄中の信心に全く違背しています。こんなことは、絶対に許してはならず、よって「教学要綱」は、今すぐに、絶版にすべきなのです！

2. 牧口先生の獄中尋問に拝する破邪顕正の獅子吼と日蓮仏法の真義を引用、ご紹介。そして、それに反する「教学要綱」の実態。

牧口常三郎全集第10巻184～213頁には以下、記述されています。
編集部注 この「創価教育学会々長牧口常三郎に対する訊問調書抜粋」は、内務省警保局保安課「特高月報」昭和十八年（一九四三年）八月分(昭和十八年九月二十日発行)の末尾に宗教運動の研究資料として摘録されたものである。当時、特別高等警察(特高)第二課の刑事によって検挙され、訊問を受けた創価教育学会幹部など種々の証言によると、この訊問調書の供述は**牧口自身の筆答**が大半であることが判明している。一と。

そして、尋問調書抜粋の検事からの主要な尋問は以下です。一

- 問 創価教育学会の指導理念及目的は 一から始まり、
問 創価教育学会の信仰理念の依拠する処は日蓮正宗に相違なきや
問 日蓮正宗は如何なる教義信条を持つ宗教団体なりや
問 然らば其法華経とは如何なる教へなりや
問 法華経と日蓮聖人の関係は
問 広宣流布とは如何なる意味なり
問 法華経の真理から見れば日本国家も濁悪末法の社会なりや
問 主仏冥合一天四海帰妙法と云ふ事は、上は陛下より下国民に至る迄で日蓮宗の本尊に帰依することなりや
問 大日本帝国憲法と法華経の大法とは如何なる関係に立つや
問 御本尊と所謂日本の神々との関係は如何
問 折伏謗法とは如何なる事か
問 謗法払とは如何なる事か
問 然らば被疑者が皇太神宮の大麻や其他の神札等を撤去、焼却したものは何程位あるか 一です。

私は、本日、学会創立95周年の深義に鑑み、上記尋問に対して牧口先生が答えられた中で、特に以下の二つの問いと、それに対する牧口先生のお答えに感動致しました。そして、この二つを今こそ本拙文に記し置きすべきと思いました。それは次の二つです。

一番目の尋問の一

問 創価教育学会の指導理念及目的は一 に対して、牧口先生は以下自筆されています。

答 創価教育学会の目的は規約要項第二条に 本会は日蓮正宗に伝はる無上最大の生活法たる三大秘法に基き、教育宗教生活法の革新を計り、忠孝の大道を明らかにし、以て国家及び国民の幸福を進めるを目的とすと書示して置きました。日蓮正宗の三大秘法とは本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目の事でありまして、それは**法華經の寿量品の文底秘法の大法**と日蓮聖人は申されて居ります。此の三大秘法は本門の本尊である曼荼羅に総べての人が帰依する事に依って具現する事になります。一と、答えられています。

そして、上記一**法華經の寿量品の文底秘法の大法**—について、全集の216頁、補注には一この大法とは三大秘法の南無妙法蓮華經のことである。日蓮大聖人は「開目抄」のなかで「**一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知ってしかも・いまだ・ひろいだけだず但我が天台智者のみこれをいだけり**」(『御書』一八九ページ)と仰せである。この一念三千の法門とは寿量品文底の南無妙法蓮華經にほかならない。では、三大秘法の南無妙法蓮華經は法華經寿量品のいかなる文の底に秘し沈められているのであろうか。日寛上人は三重秘伝抄に「**師の日く『本因初住の文底に久遠名字の妙法・事の一念三千を秘沈し給えり』云云**」(六卷抄』五五ページ)と教示されている。

その文とは、法華經如来寿量品第十六の「**我本行菩薩道**」である。この菩薩道(因行)に五十二位の段階があり、成仏の因は十住の第一・初住位(発心住)において中道実相の一分を証得するにある。この初住位にのぼった本因(**釈尊が久遠に成仏した根本因**)の修行の対象が南無妙法蓮華經の大法なのである。天台大師の「法華文句」卷九下に「我本行菩薩道」を釈して「仏は円因を修し初住に受る時已に常寿を得たへり」として、初住位にのぼったとき、すでに常住の仏身を得たとある。すなわち「我本行菩薩道」の文底に修行の対象としての三大秘法の南無妙法蓮華經が秘沈されていることになる。一と。

(私見) この牧口先生のお答えを拝して、私は「教学要綱」27頁の次の記述が、どれほど酷い詭弁であるかを、皆様に訴えない訳にいきません。 — 永遠の仏 久遠実成の釈尊 『法華經』の前半(迹門)では、諸教説を一仏乗へ統合することが説かれ、万人成仏の思想が示されたが、『法華經』の後半(本門)では、如来寿量品第十六において、釈尊の「久遠実成(釈尊は遙か昔の過去世において成仏したこと)」が説かれている。そして、久遠(想像を絶するほどの長遠な過去)に成仏して以来、さまざまな姿をとりながら、この世界(娑婆世界)に常に存在し、衆生への説法・教化を続けてきたことが明かされるのである — と、だけです。

この文には、釈尊がどのように成仏出来たのかは全く無視され記していないのです。牧口先生は獄中の尋問で上記「**釈尊が久遠に成仏した根本因**」の修行の対象が南無妙法蓮華經と記され、さらに、「**我本行菩薩道**」の文底に修行の対象としての三大秘法の南無妙法蓮華經が秘沈されていると記されているのです！

それなのに、「教学要綱」は、法華經寿量品の枢要である発迹顕本の依文である「**我本行菩薩道**」も、開目抄の「**一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり**」(『御書』一八九ページ)も完全に無視して、いきなり、「**釈尊は遙か昔の過去世において成仏した**」とだけ。こんな、非理論的記述は成立しません。そして、その後の文で、釈尊は「**永遠の仏**」と、4回も記しています。

釈尊は法華經で「**我本行菩薩道**」と記しているのです。つまり、釈尊は修行をしていた菩薩だったのです。よって、「教学要綱」28頁の「**釈尊の本来の境地(本地)は無限の過去から無限の未来まで常に存在する「永遠の仏」(28頁)**」の文が、完全な邪義であることになります。こんな、詭弁は許せません。理論的破綻なのです。池田先生は次のようにご指導です。

如来寿量品 我本行菩薩道 「法華經の智慧」(池田大作全集第 29-31 卷)
未来の人々を救うメッセージ

池田 仏の生命の根源の姿を示してこそ、生死に苦しむ未来の人々を救えるからです。その一番の本源を示唆するのが、今の「**我本行菩薩道**(我もと菩薩の道を行じて)」(法華經四八二ページ)の文だね。

斉藤 久遠における釈尊の成仏には、「成仏した本因」があったということです。ここを深く究めると、大聖人の文底仏法に入ってきます。

須田 大聖人は「開目抄」で「**一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり**」と仰せられています。では、寿量品のどの文の底なのか—古来、いろいろと論議されてきました。日寛上人は、この「**我本行菩薩道**」の文の底に沈められていると明快に述べられています。

池田 そうだね。「永遠の大生命」を自覚した仏の不可思議な境地を天台は「一念三千」として表現した。その一念三千も寿量品を魂とします。ただ、寿量品では釈尊の成仏後(本果)の不可思議な姿をもって永遠の生命を示した。これが「本果妙」です。しかし問題は現実の人間がどうしたら永遠の大生命を自覚できるかです。それを説くのが**大聖人の「本因妙」の仏法**です。一と。

また、本稿 1 頁に引用済みですが、牧口常三郎全集 1 9 7 頁（脚注）には以下の記述があります。

一自受用報身如来 自ら広大なる法樂を受用する仏身。**久遠元初の自受用報身如来とは日蓮大聖人**のこと一と。

それなのに、「教学要綱」には、どこを探してもこの一久遠元初の自受用報身如来とは日蓮大聖人の一は記されていません。これほど、日蓮大聖人を無視し、牧口先生のご指導も捨て去った書は言語道断の作文なのです！

そして、最後の尋問一問 然らば被疑者が皇太神宮の大麻や他の神札等を撤去、焼却したものは何程位あるか一に対して、牧口先生は以下既述です。

答 創価教育学会の会員は全部で現在一千五百名位あります、之等の会員は全部私の指導に依って直接私からや或は学会員から又は会員各自が伊勢の皇太神宮の大麻其の他の神宮・神社の神札・御守・神棚等を撤去焼却したものです（中略）私の直接指導に依って皇太神宮の大麻や他の神宮・神社・仏閣等の神札・守札・神等を取段し焼却した者は現在迄で五百人以上あると思ひます。一と。

（私見）上記は、まさに、牧口先生の破邪顕正の極致と拝します。そして、私の「教学要綱」への破邪顕正の思いは、僭越ながら、この牧口先生の国家諫曉の獅子吼の思いと同じです。

聖教ワイド文庫人間革命 6 巻、推移の章、1 8 3 頁には以下記されています。一「釈尊が迹仏であることは、言うまでもない。だが、それは**久遠元初の自受用身（大聖人）**を本佛とするがゆえ」そして、この注解として同書 3 3 7 頁には一「久遠元初において無作常住の妙法を覚知し、その功德を成就した根源の仏身の事で日蓮大聖人の事をさす。大聖人は自受用身を『ほしいままに受け用いる身』と読んで、本有無作三身のことだと示されている」一と。

上記、池田先生のご指導を無視して、なぜ「教学要綱」は一日蓮大聖人は、単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩である。（91頁）とするのか！牧口先生と池田先生のご指導に完全に違背ではないか！私は年初より 6 回、地元の副会長、県幹部に拙文を送り「教学要綱」の邪義を訴え、ご指導下さいとお願いしてきましたが、これまで全く返信頂けません。よって私は「教学要綱」の邪義について、さらに幹部に問い糺していきます。

3. 池田先生の十大部講義（監修含む）に違背する近刊の十大部講義を検証、男子部教室が「教学要綱」は十大部を中心としている一との不正を糾す。

本年は池田先生の会長就任(1960年5月3日)65周年でございます。先生は、就任式の最後に以下話されました。――

――先哲が、また、先師が、宗教批判の原理として、五重の相対、四重の興廃、三重秘伝、または教機時国教法流布の先後、文証、理証、現証と、はっきりと宗教の浅深、勝劣の分け方を残されておりますが、絶対に法華經に帰趨する。八万法藏の極地は法華經である。その法華經とは、末法においては三大秘法の南無妙法蓮華經であり、それ以外の宗教は邪教であり、三大秘法の御本尊様のみが、末法万年尽未来際の衆生を、お救いくださるただ一つの宗教であるということを、声を大にして叫びきっていきたいと思うのでございます。

今、創価学会は、二祖日興上人様の、大聖人様のお教えを正しく奉持しゆく精神、お守り申し上げていく精神、そしてまた、老齡七十幾歳にして国家諫暁すること数十度、あくまでも、実践をあそばされた日目上人様の御精神、そしてまた、全邪宗教を打ち破っていく日蓮大聖人様の大生命哲学を、そのまま御解明くださった日寛上人様の絶対なる教学の深遠なる精神、その精神を精神として、広宣流布をめざして、そのまた一目標である七回忌をめざして進んでいきたいと思ひます。以上をもって講演といたします。――と。（「会長講演集」第1巻6頁）

そして、池田先生はそれ以降、日寛上人のご教示を依文として、十大部御書の講義（開目抄と観心本尊抄は、戸田先生の講義を補訂）されました。また、青年部の十大部の研究論文を監修され、十大部全てについて池田先生のご指導は後世のために厳然と残されています。その中で、私は、以下「開目抄講義」の論述は最も重要な御指導と拝しております。

一法華經本門で本因・本果が明かされて、仏界と九界がともに生命に本有であり常住であることが示されたので、名実ともに生命に十界が具足することになります。それゆえ、大聖人は「本門で本因本果が説かれて「真の十界互具・百界千如・一念三千」となった」と仰せなのです。しかし、これはあくまで文上に即しての説明です。深く洞察すれば、釈尊一人にとどまらず、すべての生命は本来的に「永遠の仏界」を現し「無限の菩薩行」を続けることを求める存在であると言えます。自他ともの幸福を本来、願ひ求めるのが生命なのです。本因本果についての大聖人の仰せには、あらゆる凡夫の本因本果を明かすという文底の意が拝せます。

日寛上人は「三重秘伝抄」で、**文底の義**として、「本因初住の文底」に「久遠名字の妙法、事の一念三千」が秘沈されていると示されています。「初住」とは、仏と成って万人の救済を実現しようと自身の生き方の根本目的が定まった境地であり、どのような困難があろうとも永遠に菩薩道を前進し続け、決して退かないと心が決まった境地です。釈尊が久遠において、永遠の菩薩道を実践し続けることを真に決意したときが、釈尊の久遠実成の「本因」です。しかし、その初住位に登った修行の原動力として、成仏の根源の法である「久遠名字の妙法、事の一念三千」があると言われているのです。「名字」とは「名字即」のことで、妙法を初めて聞いて信ずる凡夫の位です。「久遠名字の妙法」とは、凡夫が実践し成仏を実現する根源の法です。その**法とは南無妙法蓮華經であると、直ちに説き示されたのが大聖人**であられるのです—と。（池田大作全集第 34 巻 73，74 頁）

（私見）上記のように、池田先生は会長就任式で述べられた通り、**日寛上人の御教示を依文とされ、十大部講義の全てを文底から講義**されているのです。

十大部について、2024年10月18日聖教電子版 —〈男子部教学室論考〉「教学要綱」は創価ルネサンスの集大成 的外れな“批判本”を破す—

<https://www.seikyoonline.com/article/603E8EF7E9B96D20AF2920005F5C1C6B?sns>

token=8adf6d02-2583-4ed9-a80c-d125adbab292 — は、須田晴夫氏に対して、以下記しています。

一氏は、大聖人を根源仏とする論拠として、「百六箇抄」「本因妙抄」などの相伝書を引用するが、これらの相伝書が宗門の法主信仰の温床となってきたことは事実である。また、宗内でしか通用しない相伝書に依拠するのでは普遍的な説明にはならない。『教学要綱』では、論拠とする御書は、日蓮仏法の骨格というべき十大部を中心としている。—と。

そこで、私は、池田先生の十大部の講義原本（監修も含む、以後「原本」と略）と近刊教学書（以後「近刊」と略）とを全て読み比べました。その結果、「原本」は佐前、佐後に関らず全て文底からの講義ですが、「近刊」は、ただの文上解釈で、それは「教学要綱」と同じでした。ゆえに、私は、いったい、男子部教学室は池田先生の十大部のご指導を拝読したのかとの思いです。先生のご指導を心肝に染めることができれば、「教学要綱」と同じ文上解釈—日蓮大聖人は、単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩である。（91頁）—は、あり得ないのです。



私は、上記の思いの中、さらに、池田先生のご指導を拝すると同時に、男子部教学室論考が批判する須田晴夫氏の著作「新版 日蓮の思想と生涯」（２０１６年刊）も読みました。そして、文中、須田氏の十大部個々についての論考が、まさに、日蓮本仏論を明確にされていることに感銘、納得しました。

そこで、私は、以下、十大部についての「原本」と「近刊」の比較、検証につき、須田氏の論考も引用し論述します。

そして、その比較の中で、私が本年初頭より抱く「教学要綱」への下記疑念が、池田先生の「原本」により、悉く、先生のご本意に背く文上からの浅薄な我見、または、完全な邪義であると判明しました。その疑念は以下です。

- ① 釈尊の“成仏した本因”を明かさないこと。
- ② 「日蓮＝久遠元初自受用報身如来＝南無妙法蓮華經＝人法一箇の御本尊」を記さず、大聖人は単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩（９１頁）とすること。
- ③ 「人本尊」と「法本尊」、御本尊の相貌の根本義「人法一箇」を一切記さないこと。
- ④ 大聖人の竜の口法難での「発迹顕本」の真義を論述しないこと。
- ⑤ 三宝の内、法宝は「御本尊」を削除して「南無妙法蓮華經」に変更（１５６頁）、僧宝は日興上人を削除して「創価学会」に変更（１５６頁）、一大秘法も「本門の本尊」を突如「南無妙法蓮華經」に変更したこと（１５８頁）。また、それ等全てに理由がないこと。

上記について、以下、十大部を執筆順に比較、検証する中でさらに詳述し、明白にしていきます。まず、十大部とは日蓮大聖人の御書のうち最も重要な十編のことで、五老僧等が日蓮大聖人の御著作を軽視し紛失していることを憂えられた第二祖日興上人が選定されたもので、以下、年代順に示します。

(佐前)

唱法華題目抄 文応元年(1260年)5月、39歳、鎌倉の名越でご述作。
立正安国論 同7月16日、39歳、鎌倉でご述作。北条時頼に与えられた。

竜の口法難 日蓮大聖人は、文永八年(1271年)9月12日、竜の口で
発迹顕本され、久遠元初自受用身の本地を顕わされた。それゆえ、佐渡流罪以
前に説かれた法門と、流罪以後の法門を「**佐前・佐後**」と区別する。その後、
10月10日~同十一年(1274年)3月13日まで、佐渡流罪。

(佐後)

*佐渡でのご執筆は、

開目抄 文永九年(1272年)2月、51歳の時、門下一同に与えられた。
「人本尊」開顕の書

観心本尊抄 文永十年(1273年)4月25日、52歳の時、富木常忍に与
えられた。「法本尊」開顕の書

*流罪赦免後、身延でのご執筆は、

法華取要抄 文永十一年(1274年)、53歳、富木常忍に与えられた。

撰時抄 建治元年(1275年)54歳、西山の由井某に与えられた。

報恩抄 同二年(1276年)7月21日、55歳、身延でご述作。旧師道善
房追善のために浄顕房、義浄房のもとに送られた。

四信五品抄 同三年(1277年)4月10日、56歳、身延でご述作。富木
常忍に与えられた。

下山御消息 同年6月、56歳、因幡房日永に代わってご執筆、下山の兵庫五
郎光基に与えられた。

本尊問答抄 弘安元年(1278年)9月、57歳、身延でご述作。浄顕房に
送られた。

以下、**唱法華題目抄**より順次、十大部の「原本」と「近刊」を比較します。
そして、「近刊」がいかにかに文上解釈だけであり、日蓮仏法の真髓を示していな
いかを論証します。

「原本」 唱法華題目抄に学ぶ 池田大作監修 宮城県青年部編（大白蓮華 1993年5月～1994年11月、全15回）には、下記記されています。

唱法華題目抄 に学ぶ①

【監修】池田 大作
宮城県青年部編

— 序 論 —

（第1章）本抄の位置付け

唱法華題目抄こそ、立正安国論では示すことを控えられた正法の実体を示された書であるということができよう。いわば安国論が「破邪」の書であるのに対し、唱法華題目抄は「顕正」の書である。その意味で本抄は、立正安国論と表裏一体の関係にあるといえる。（1993年5月号41頁）

南無妙法蓮華經の題目は単なる經典の題名ではなく、下種の法体そのものである。その題目を唱えるということは、一切の諸仏を仏にならしめた根源の法体を直ちに自身の生命に刻んでいく実践に他ならない。もちろん「本門の題目」と言っても、**その体は「本門の本尊」**であり、本門の本尊を信受して唱える題目であって初めて本門の題目となりうるのであるが、それを前提にした上で、諸仏成道の本因である下種の法体を万人に対して開き、その法体を全ての人が直に行ずるという修行形態を大聖人は初めて明確に示されたのである。

（中略）**「本門の本尊」を否定して「本門の題目」は成り立たない**ことは言うまでもないが、唱題思想が立宗の当初から御入滅の時まで、大聖人の御化導を貫く根幹の法門であることは誰人も否定できない事実である。本抄は、この「本門の題目」の法理を初めて本格的に論じられた書であり、その意味で**文底下種法門の骨格を示された重書**と位置づけられる。（1993年6月号40頁）—と。

そして、須田氏の著作「新版 日蓮の思想と生涯」（以下「日蓮の思想」と略）には、唱法華題目抄につき、以下、日蓮仏法の奥義が記されています。

1. 日蓮が礼拝の対象である本尊として門下に授与したのは竜の口の法難の後に顕された文字曼荼羅のみである。竜の口の法難以前は、南無妙法蓮華經の唱題を示すにとどめ、本抄のこの段に見られるように、本尊については必ずしも明確な教示はなされなかった。ただし、ここで題目を書いて本尊とすべきであるとし、また釈迦・多宝の二仏を法華經の左右に配し、また十方の諸仏・菩薩を書き表すべきであるとしていることは、法華經を巻軸の法華經ではなく南無妙法蓮華經と捉えるならば、**後の文字曼荼羅をうかがわせる表現**となっている。釈迦・多宝の二仏は法華經の左右に配されるものであり、あくまでも法華經が根本で、釈迦・多宝が中心となることはない。この文からも**釈迦本仏が成り立たないことは明らか**である。（94頁） 23/124

2. 唱法華題目抄では明示されていないが、「妙法蓮華經」は經典の単なる題名ではなく、一切を収める宇宙根源の大法であることを示唆していると解せられる。すなわち、後に「観心本尊抄」「開目抄」などで明示される種脱相對が、本抄においても既に暗示的に示されているといえよう。(96頁)

3. 唱法華題目抄が、教判・宗旨・行法・得益を含んだ総合的・体系的著述であることを考えるならば、唱法華題目抄こそ、立正安国論では示すことを控えられた正法の実体を示された書であるということができよう。いわば **安国論が『破邪』の書**であるのに対し、**唱法華題目抄は『顕正』の書**である。その意味で**本抄は、立正安国論と表裏一体の関係**にあるといえる。(97頁) 一と。

*

上記に対して「近刊」大白蓮華の連載(2024年10月～2025年3月)は文上の現代語訳のみで、未だ、講義、解釈が全くないです。

(私見) 唱法華題目抄は竜の口の発迹顯本より11年も前の「佐前」の御書です。しかし、上記、池田先生のご指導、また、須田氏の「日蓮の思想」を読むと、この御書が持つ意義がいかに大きいか、つまり、この御書にはすでに釈迦本仏を否定する文、また、御本尊の相貌について記されています。

8か月前の大白蓮華2025年3月号で、唱法華題目抄の現代語訳が6回の連載を終えました。しかし、それは現代語訳だけで終わっており何の解説もありません。上記、32年前の大白蓮華と比べ、このような文上訳だけで法華經の解説を記すのみでは日蓮仏法に至る種脱相對まで至らず、正直、読者、学会員さんはなぜ今この御書なのか、そして、この御書の意義は何なのか？さっぱり分からないと思います。こんなことで良いのでしょうか！大白蓮華の本来の使命は、「原本」のように、読者に**文底下種法門**、即ち、日蓮仏法の真義を教示することではないですか。



唱法華題目抄の直接の考察とは離れますが、須田氏の「日蓮の思想」71頁には一「御本尊七箇相承」によれば**曼荼羅の相貌の感得は比叡山に遊学する前**、「取要抄文段」によれば遊学終了後、**立宗宣言当日の早朝**ということになる。時期の相違の問題は残るが、いずれにしてもそれらの伝承によれば日蓮は建長六年の時点では既に**曼荼羅本尊の相貌について感得**していたことになる。

また日興門流において、**曼荼羅本尊を日蓮と一体不二とする信仰**が成立していたことが分かる。「不動愛染感見記」が真書であるならば、そこに示された宗教体験は、後に図頭される曼荼羅本尊の相貌と密接な関連があるというべきであろう。—と、あります。

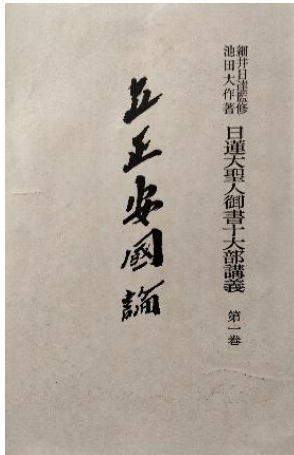
（私見）須田氏の「日蓮の思想」は、池田先生の大著「法華経の智慧」の鼎談者である須田氏が、鼎談後、日蓮仏法と学会教学の真髓を記された著作です。先生のご指導（日蓮本仏論、発迹顕本、人法一箇等の日寛教学の正義）を根本として、大聖人の生涯と主要な御書を明確に解説されています。それは、先生がご逝去された後も普遍の教学です。日蓮仏法についての各宗派における見解の相違に対しても、歴史と科学的根拠により見事な正論を提示しています。上記の論考もその代表的な論述と思います。

私は、これほどまでに深い日蓮仏法の考察は須田氏だけと思います。須田氏の論考によれば、日蓮大聖人は32歳の**立宗宣言当日の早朝**に、すでに**曼荼羅の相貌の感得**をされており、翌年の建長六年の時点では既に**曼荼羅本尊の相貌について感得**されていたのです。よって、その7年後、39歳でご執筆された唱法華題目抄と、その2か月後に執筆された立正安国論には、文上には記さずとも、大聖人様の内証においては永遠の御本仏との御自覚だったのです。

さらに、池田先生は「観心本尊抄」講義で、以下述べられています。—**恩師戸田城聖先生は「清澄寺大衆中」の御文を講義された際、大聖人は虚空蔵菩薩に、日本第一の智者となし給えと祈願された清澄寺在住の時、すでに御本仏と覚られたと拝せると言われておりました。**（池田大作全集24巻229－231頁）—と。

つまり、大聖人様は16歳の時、**すでに御本仏と覚られた**のです。よって、結論、池田先生は発迹顕本以前（佐前）の御書である唱法華題目抄、立正安国論についても、大聖人様の御本仏の内証を講義されたと言えるのです。

上記の深義を拝する時、男子部教室が—「教学要綱」は十大部を中心としている—と記していますが、それは、まさに、池田先生と「法華経の智慧」の鼎談者である須田氏が記す日蓮仏法の真義に対しては、全く比べることのできない不十分、否、不正の記述と断じます。よって「教学要綱」は即刻、絶版にすべきです。



次に「立正安国論」について「原本」と「近刊」の内容を以下、比較、検証しました。

「立正安国論」（１９６６年（昭和４１年）７月３日発刊）
８８８頁には以下、記述です。― 三宝とは、**仏＝久遠元初の自受用身、即、日蓮大聖人** 法＝事行の一念三千の南無妙法蓮華經 僧＝血脈付法の日興上人―と。

また、８８９頁には一三大秘法の大御本尊、すなわち、事行の一念三千をもって末法の法宝とする―と。さらには、１０００頁には一日蓮大聖人は法に即して人、人に即して法、**人法一箇の御本仏**であられる。われらは大聖人の教えどおり、**人法一箇の大御本尊**に題目を唱え、境智冥合することによって、同じく生命を浄化し、宿命転換し、力強い生命力を湧現して生活を楽しんでいくことができるのである―と。

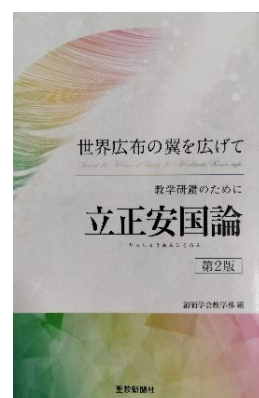
そして、須田晴夫氏の「日蓮の思想」１０５頁には、以下記されています。
― 日蓮が最後まで安国論を重んじたことは、入滅の直前に安国論の講義を行ったと伝えられるところにもうかがうことができる。すなわち、弘安五（一二八二）年九月二十五日、入滅の地となった武蔵国の池上兄弟の館に滞在中、鎌倉をはじめ上総・下総などから参集してきた門下を前に、日蓮は安国論を講義したと伝えられる。強いて否定すべき要素もないので、この伝承は受け入れてよいであろう。

この安国論講義が日蓮の一般門下に対する最後の教示となった。入滅十八日前のことであるから、恐らく衰弱した病体を押しての説法であったであろう。日蓮の最後の説法が安国論講義であったとされることから、「立正安国」すなわち正法の確立によって世界の平和を実現することこそが日蓮の終生の願望であったことが了解できる。

まさに「立正安国論」は、日蓮の思想と生涯を貫く一書であり、そこに示された立正安国の原理こそ日蓮の宗教全体を貫く脊梁といって過言ではない。社会の在り方について関心を示してこなかったそれまでの仏教と異なり、日蓮は社会の平和を希求し、その実現に寄与するところに仏教の使命があったとした。その民衆と社会への視座こそ日蓮仏法の根本的な特色の一つといえよう。―と。

それに対して、近刊の教学書「立正安国論」（２０２３年６月６日発刊）１９、２０頁の大意には、以下、記されています。―池田先生の指針から（『御書と青年』） 大事なのは民衆です。（中略）歴史の闇に埋もれていた「立正安国の大精神」を現代に生き生きと蘇らせたのが大聖人正統の創価学会なのです―と、だけです。何ですかこれは？こんな解説で済ませてよいのでしょうか？

（私見）池田先生の『立正安国論』講義の原本には、日蓮仏法の根本義である、**日蓮大聖人即久遠元初の自受用身、人法一箇の御本仏、人法一箇の大御本尊**について記されていますが、「近刊」は現代語訳がほとんどで、上記、日蓮仏法の根本義については一切記されていません。「近刊」が「立正安国の大精神」と記するのであれば、池田先生の原本、また、須田氏の論考を拝し、日蓮仏法の根本義を記すべきです。ゆえに、「近刊」は教学書とは到底言えず、画竜点睛を欠いた、ただの現代語訳の本です。



そして、池田先生は佐前の御書である「立正安国論」の講義においても、以下ご指導なのです。― 三宝とは、**仏＝久遠元初の自受用身、即、日蓮大聖人法＝事行の一念三千の南無妙法蓮華經** 僧＝**血脈付法の日興上人**―、また、―日蓮大聖人は法に即して人、人に即して法、**人法一箇の御本仏**であられる。われらは大聖人の教えどおり、**人法一箇の大御本尊**に題目を唱え―と。

池田先生の上記ご指導は、立正安国論の文上解説ではなく、日蓮仏法の文底からの真義をご教示なのです。そしてそれは、私が本拙文 12 頁で記した以下、「教学要綱」への疑問に対しての明確な反証です。

②日蓮＝久遠元初自受用報身如来＝南無妙法蓮華經＝人法一箇の御本尊」を記さず、大聖人は単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩（91 頁）とすること。③「人本尊」と「法本尊」、御本尊の相貌の根本義「人法一箇」を一切、記さないこと。⑤三宝の内、法宝は「御本尊」を削除して「南無妙法蓮華經」に変更（156 頁）、僧宝は日興上人を削除して「創価学会」に変更（156 頁）、一大秘法も「本門の本尊」を突如「南無妙法蓮華經」に変更したこと（158 頁）。また、それ等全てに理由がないこと。

その後、竜の口法難 日蓮大聖人は、文永八年（1271年）9月12日、竜の口で発迹顕本され、久遠元初自受用身の本地を顕わされた

（佐後）

次に、佐渡でご執筆の「開目抄」に付き、「原本」と「近刊」を比較します。

「**原本**」池田大作全集第34巻23頁には — 「日蓮といふし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて返年の二月・雪中にしるして有縁の弟子へ贈れば



畏 怕
をそろしくて・をそろしからず・見ん人いかに・をぢぬらむ」（新102、全223頁）まさに、「大聖人の魂魄に目を開け」と仰せの御文である。ここで大聖人は、「竜の口の頸の座において凡夫・日蓮は頸をはねられた。今、佐渡で『開目抄』を書いているのは、日蓮の魂魄そのものである」と言われている。この「魂魄」とは、発迹顕本された**御内証である「久遠元初自受用身」**にほかならない 一と。

「**原本**」137頁には一大聖人は、「御義口伝」において「**本尊とは法華經の行者の一身の当体なり**」（新1059、全760頁）と仰せです。成仏の修行の明鏡となり、指標となる本尊は、法華經の行者の一身に拝することができるのです。ここに諸天の守護と法華經の行者をめぐる問題が「此の書の肝心・一期の大事」（新74、全203頁）と言われるゆえんがあり、また**「開目抄」が「人本尊開顕の書」**と言われるゆえんがあるのです。一と。

須田氏の「日蓮の思想」248頁には一最後に、「日蓮は日本国の諸人にしうし（主師）父母なり」（二三七頁）と述べられている。これは本抄冒頭の、「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三つあり。いわゆる主師親これなり」（一八六頁）の文に対応していることはいうまでもない。すなわち末尾のこの文は、日蓮が主師親の三徳を具える末法の教主・本仏であることを宣言した文である。末法の教主としての振る舞いは竜の口の法難における発迹顕本以後、本尊図顕という形で既に開始されているが、「開目抄」において末法の教主としての本地を初めて明確に示したのである。**「開目抄」が「人本尊開顕の書」**とされる所以である。一と。

それに対し、「近刊」157頁では一大聖人は竜の口の法難を勝ち越えた時に、宿業や苦悩を抱えた凡夫と言う述（仮の姿）を開いて、凡夫の身に、生命にそなわる本源的な慈悲と智慧にあふれる仏（久遠元初の自受用報身如来）という本来の境地を顕わされたのである。（中略）これが**日蓮大聖人の「発迹顕本」**である。一と。 28/124

また、111 頁で一大聖人は、「此の疑いは此の書の肝心・一期の大事」とまで仰せなのである。すなわち、諸天の加護をめぐる疑問を晴らすことによって、大聖人が法華經の行者であることを明らかにできるので「此の書の肝心」と仰せになり、それは同時に人本尊開頭の意義を顕わすという意味で「一期の大事」と仰せになっているのである。一と。

(私見)「原本」の一発迹顕本された御内証である「久遠元初自受用身」を用いず、なぜ、「近刊」は、本源的な、慈悲と智慧にあふれる仏とし、さらに、(カッコ内)書きにして、補足説明のように(久遠元初の自受用報身如来)なののでしょうか。これでは二次的で、本義の軽視ではないでしょうか。また、「原本」では、何十回も記されているのに、「近刊」では、全編285頁を通じてこの1回だけです。「久遠元初自受用身」にそが「開目抄」の根本義です。これでは池田先生の御本意を軽視では？と思われても仕方ない。

池田先生が「原本」で引用された「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」を、「近刊」は、なぜ用いないのか。また、「原本」で宣言された「開目抄」が「人本尊開頭の書」を記さずに、一人本尊開頭の意義を顕わすという意味、一という何とも曖昧だ。



そして、「開目抄」講義においても本拙文12頁に記載した「教学要綱」の以下の邪義が明らかです。—②「日蓮＝久遠元初自受用報身如来＝南無妙法蓮華經＝人法一箇の御本尊」を記さず、大聖人は単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩（91頁）とすること。③「人本尊」と「法本尊」、御本尊の相貌の根本義「人法一箇」を一切記さないこと。④大聖人の竜の口法難での「発迹顕本」の真義を論述しないこと。



次に、「観心本尊抄」について「原本」と「近刊」を比較します。「原本」池田大作全集24巻232頁には一人即法の当体としての御本尊は、一往は法本尊ですが再応は人法一箇の御本尊であります。ゆえに「南無妙法蓮華經 日蓮」と中央にしたためられております。南無妙法蓮華經は”法”、日蓮在御判は”人”をあらわすのであります。このように顕された大聖人のお立場に約せば御本尊の根本的特質は「人法一箇」ということですが、では、御本尊を拝する私どもの立場で言えば、何が最も根幹となる特質でありましょうか。それを日蓮大聖人は御自ら「観心」とであると教えてくださっているのであります。法本尊開頭の書を「観心本尊抄」と題されたのは、このゆえであります一と。

また、234頁には「観心本尊抄」の題号をめぐって、第二十六世日寛上人は「観心の本尊」と読むべきことを強調され「“の”の字を形見と思え」と仰せられたことは、あまりにも有名であります。それは「心の本尊を観る抄」とか「心を観る本尊抄」とかの、大聖人の本意から外れた邪義を破して言われたものでありますが、それ以上に「教相の本尊」に対して「観心の本尊」であることを明示せんがためであられたのであります。

「教相の本尊」とは「文上脱益・迹門理の一念三千」であり、それに対し「文底下種・本門事の一念三千」を「観心の本尊」と言います。すなわち、釈尊の説いた脱益の文上の一念三千ではなく、**文底秘沈**の下種の一念三千こそ、大聖人の顕された御本尊の正体であるということが、ここでの論議の主題であることは言うまでもありません。一と。

さらに、237頁には一三大秘法に配して「観心の本尊」を拝するならば、御本尊それ自体が**本門の本尊**であり、御本尊を信受し唱える題目は**本門の題目**、御本尊所在の所が**本門の戒壇**であります。この三大秘法も、究極するところは「**観心の本尊**」の**一大秘法に収まる**ことを知らなければなりません。すなわち、**本門の本尊とは、久遠元初自受用報身としての生命それ自体**であり、本門の題目は、この無作三身の生命の宝号たる南無妙法蓮華經であります一と。

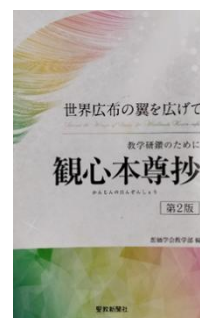
そして、須田氏の「日蓮の思想」258、259頁には一

日蓮が自ら付けた正式な題号は「如来滅後五五百歳始観心本尊抄」である。この題号をどのように読むか、古来、多くの説が出されたが、大石寺第二十六世日寛は、どのような時代に、仏がいかなる機根の衆生に応じて、どのような法を説くか、という「時・応・機・法」の四義の視点から「如来滅後五五百歳に始む観心の本尊抄」と読むべきであると教示している(『日寛上人文段集』四四五頁)。すなわち「如来滅後五五百歳」が「時」、「始む」が「応」、「観心」が「機」、「本尊」が「法」に当たる。ちなみに「観心」とは、天台宗で用いられてきた言葉で、文字通り「心を観ずる」こと、すなわち瞑想の実践によって悟りを目指していくことを指す。教理・理論の様相を意味する「教相」の対語である。この「教相」と「観心」という対比を教判論の文脈で用いる場合には、教相が法華經の**文上**、観心が**文底**の教を指す言葉として用いられる。ところで「如来滅後五五百歳」が末法の初めを表すことは明白であるから、「時」に当たる。「始む」と読むのは、ここに仏の能動性が表れていると解するからである。仏法は決して自然に始まるものではなく、教主である仏の能動的な意志によって展開されるという趣旨が示されている。「観心」が「機」である理由は、末法の衆生の機根が**文上・教相**の教えによって救われる機根ではなく、**文底・観心**の法によってのみ得道できる機根であるからである。「本尊」が「法」であるのは、日蓮が図顕した曼荼羅本尊は末法の衆生を救済する法を示したものであるからである。

すなわち、この題号は、「末法の初めに、文底の教えによってのみ救済される衆生のために仏が説き始めた本尊を論ずる抄」という意味になる。「観心の本尊抄」と「の」の文字を入れて読むのは、その本尊が文上・教相の本尊ではなく、あくまでも文底・観心の本尊であることを明確にするためである。一と。

また、259頁には一本抄には日蓮の奥底の法門が述べられているため、公開が禁じられていた。本尊抄の内容を人々が受けとめられる状況が当時はまだなかったからである。その意味で本尊抄は、当時の人々に対するものではなく、未来の人類のために残された書といえる。「観心本尊抄送状」で「日蓮身に当たるの大事」と言われていることが重要であろう。「観心本尊抄」は法本尊の意義を明かす目的で述べられているため、本文中に「日蓮」の名はまったく示されていない。しかし、本抄に示される本尊は日蓮の「身に当たるの大事」、すなわち日蓮と一体不二であることがここに示されていると解せられる一と。（私見）上記、須田氏の見解は卓越していると拝します。

それに対して、「近刊」10頁には—「開目抄」は文永9年(1272年)2月に四条金吾に託して、厳しい迫害に耐えて信仰を続けている門下一同に与え、励まされた。この翌年に執筆されたのが「観心本尊抄」である。両書は、佐渡で著された御書の中でも最重要の二書である。「開目抄」は、日蓮大聖人が法華經に予言されたとおりに実践された末法の「法華經の行者」であり、末法の衆生を救う主師親の三徳を具えられた末法の御本仏であることを明かしている。これに対して、「観心本尊抄」は、末法の衆生が成仏すべき南無妙法蓮華經の本尊について説き明かしている。一と文上だけの簡単な説明です。



（私見）「原本」232頁で「観心本尊抄」における御本尊の相貌を、上記のように詳細に説明されているのに、「近刊」は、池田先生がご教示の「人法一箇」を記さず、根本義である法本尊開頭の書を「観心本尊抄」と題されたとの大宣言も、全く記さないのは理解できず、はなはだ疑問です。そして、「近刊」には、上記池田先生が「原本」でご教示の日蓮仏法の根本義である三大秘法の記述が削除、どこにも記載がない。三大秘法は日蓮仏法の根本義であり、画竜点睛を欠いています。その上で一大秘法の「観心の本尊」が論述されるべきです。なぜ、「近刊」は、この根本義を削除するのか。

十大部で最重要の「観心本尊抄」講義でも、本拙文12頁に記載した「教学要綱」の邪義—⑤ 一大秘法も「本門の本尊」を突如「南無妙法蓮華經」に変更したこと（158頁）と同じ底意があると思えません。

続いて、佐渡流罪の赦免後、文永十一年（1274年）、53歳、身延にてご執筆の法華取要抄について、「原本」と「近刊」を比較しました。



「原本」—池田大作監修 法華取要抄に学ぶ—の47頁には一結要付嘱の文における四句の要法は、ことごとく「本門の本尊」の御当体としての日蓮大聖人の御事を示していると拝することができ。すなわち、「如来の一切の所有の法」とは大聖人の御当体に即する「妙法蓮華經の五字」即「本門の本尊」であり、「如来の一切の自在の神力」とは、本尊の当体としての大聖人の力用であり、「如来の一切の秘要の蔵」とは大聖人の御内証であり、「如来の一切の甚深の事」とは大聖人の御振る舞いである。大聖人は一身に具されたこの内証・力用・振る舞いを「三大秘法」として末法の一切衆生のために開顕されたのである。一と。

また、147頁には一本門の本尊とは、本地難思の境智冥合、本有無作・事の一念三千の南無妙法蓮華經である。また、この最も根源的な法体を証得された仏が久遠元初の自受用身であり、それが即ち日蓮大聖人の御内証の境地であられる。そして大聖人は、末法一切衆生のため、観心の所縁の境、すなわち信心の対境として、御自身の御内証である久遠元初自受用身即事の一念三千の当体を曼荼羅本尊として御開顕されたのである。一と。

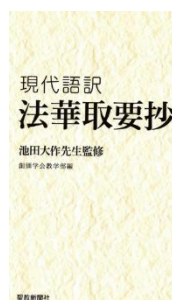
そして、須田氏の「日蓮の思想」306頁には、以下、記されています。—（趣意）日蓮は「法華取要抄」において、法華經が日蓮とその門下のために説かれた經典としている。日蓮とその門下のために法華經が説かれたと見ることは、法華經が日蓮の出現を予言し、日蓮とその門下による下種弘法の弘通を助けるために説かれた經典と位置づけることに他ならない。それは、日蓮が弘通する三大秘法の南無妙法蓮華經を正宗分とし、文上法華經を序分・流通分とする立場である。日蓮が弘通する法華經は文上二十八品の法華經ではなく、あくまでも南無妙法蓮華經(三大秘法)であり、文上の法華經二十八品は三大秘法を弘通するための手段と位置づけるのである一と。

また、307頁には一釈尊は病重い末法の衆生のために、南無妙法蓮華經の大良薬を法華經の文底に留めて末法に残したのであるとの理解である。釈尊は在世の衆生を救済するのみならず、上行菩薩に末法弘通を付嘱し、その弘通を助けることによって末法の衆生をも利益しようとした。一日蓮は、このように法華經における釈尊の心を受けとめたのである一と。 32/124

そして、308頁には一「法華取要抄」は三大秘法の内容を初めて整足した形で示した書で、その点で重要な意義を持つ。三大秘法についてはその後、「報恩抄」「御義口伝」「三大秘法抄」で展開されていくが、本抄はその出発点となるものである。つまり日蓮は、身延入山に際し、佐渡期での著述を踏まえ、さらに立ち入った思想の展開を開始したのである一と。

さらに、309頁には一上行が三大秘法建立の聖人であるとは、上行菩薩が末法弘通の教主(本仏)であることを意味する。本抄では、まだ「上行=日蓮」という線は明示されていないが、三大秘法の建立を実際に行ったのが日蓮であるという事実を踏まえるならば、本抄のこの末尾の文は、まさに「日蓮本仏」を裏づける文証と解することができよう一と。

「近刊」132, 133頁には一末法に流布すべき前代未弘の大法が、「本門の本尊と戒壇と題目の五字」という三大秘法の南無妙法蓮華經であることをまず示される。そして妙法五字という肝要だけを取る理由について、釈尊が末法の衆生のために肝要を取って地涌の菩薩に授けたことを挙げられる。続いて、末法にこの肝要の法が流布する瑞相を論じられる。(中略)そして、このような時に、上行菩薩らの聖人が三大秘法を打ち立て、全世界に広宣流布することは疑いないと宣言され、本抄を結ばれている。一と。



(私見)「近刊」では、「原本」の「妙法蓮華經の五字」即「本門の本尊」、また、大聖人が、自身の御内証である久遠元初自受用身即事の一念三千の当体を曼荼羅本尊として御図顕されたのである一との日蓮仏法の真義は、全く記されず、一上行菩薩らの聖人が三大秘法を打ち立て、全世界に広宣流布することは疑いないと宣言一との文上解説だけです。

これでは、「法華取要抄」の根本義、本門の本尊の真義が記されていません。この「近刊」も、本拙文12頁に記載した「教学要綱」の以下の邪義が明らかです。—②「日蓮=久遠元初自受用報身如来=南無妙法蓮華經=人法一箇の御本尊」を記さず、大聖人は単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩(91頁)とすること。

次に、撰時抄の「原本」と「近刊」を比較、検証しました。

撰時抄

細井日蓮監修
池田大作著
日蓮大聖人御書十大部講義
第六卷

(原本) 本抄の「南無日蓮聖人ととなえんとすとも南無計りにてやあらんずらんふびんふびん」とは、じつに絶対の御確信に立たれたおことばではないか。真実の末法の御本仏にあらずして、なぜこのように断言できようか。日蓮大聖人こそ、三大秘法を広宣流布なされる御本仏であらせられる。

御義口伝上(七〇八頁)にいわく「南無とは梵語なり此には帰命と云う、人法之れ有り、人とは釈尊に帰命し奉るなり、法とは法華經に帰命し奉るなり」と。このように「南無」とは**人本尊**、**法本尊**に帰依したてまつることをいうのである。ゆえに「南無釈尊」といわないで「南無日蓮聖人」と唱えるからには、**法本尊**もまた「釈迦の法華經」ではなくて、**南無妙法蓮華經の大御本尊**でなくてはならないのである。一と。

また、476頁には―「現に勝れたるを勝れたりという事は慢ににて大功德なりけるか」と。実に日蓮大聖人が第一の聖人、智人、大人であらせられることは、現にそのように勝れているのである。そのゆえは**日蓮大聖人は久遠元初の自受用身**であらせられ、事行の一念三千、**人法一箇の南無妙法蓮華經の大御本尊の当体**であらせられるからである―と。

そして、須田氏の「日蓮の思想」347, 348頁には―末法弘通の法体は釈尊の説いた文上の法華經ではなく、法華經の肝心(文底)である南無妙法蓮華經であることを明示している。弘通の法体が南無妙法蓮華經であるならば、その「教」を弘通した人こそが末法の「師」(教主)となる道理である。南無妙法蓮華經を初めて弘めた人は日蓮以外にないのであるから、日蓮を末法の教主(本仏)とすることが論理必然的に導きだされる(文上法華經の教主である釈尊は正像の教主であっても末法の教主にはならない)。

「撰時抄」では随所に日蓮自身が末法の「師」であることが明示されている。日蓮が主師親の三徳を具備する末法の教主(本仏)であることは「開目抄」などで既に示されているが、「撰時抄」ではさらに踏み込んだ言明が見られる。まさに「撰時抄」こそ「日蓮本仏」の宣言書といっても過言ではない―と。

また、361, 362頁には一三十一章―二八六頁一八行目「いまにしもみよ、大蒙古国」～二八七頁七行目「南無計りにてやあらんずらん。ふびん、ふびん」。蒙古による侵略が現実のものとなった時には日本国中が日蓮に帰依する事態になろうとの確信が示されている。ここでは「今日本国の高僧等も『南無日蓮聖人』ととなえんとすとも『南無』計りにてやあらんずらん」(二八七頁)と、日蓮自身を帰依(南無)の対象と位置づけていることが重要である。帰依する対象が本尊であるから、**曼荼羅本尊を法本尊、日蓮を人本尊**とし、両者は**一体不二(人法一箇)**であるとの教義がこの文によって裏づけられる一と。

それに対して、「近刊」320頁では―「三度のかうみょう」のうち、第二回の諫曉の時に、大聖人を用いず迫害して謗法の帰依を続けるなら二難が起こって国が滅びると予言されたことを特に取り上げられ、その根拠となる経文を再度掲げて、大聖人こそが経文どおりに末法で忍難弘通する**法華經の行者であることを再確認**されている。

また、322頁では―正法・像法にまだ広められなかった深法で末法の初めに一閻浮提に広宣流布すべき法とは、どのような名で、どのような内容であるかという問いについては、「観心本尊抄」では「事行の南無妙法蓮華經の五字並びに本門の本尊」(御書二五三鈔)、また「顕仏未来記」では「本門の本尊・妙法蓮華經の五字」(御書五〇七鈔)と示されていたが、**本抄では「寿量品の南無妙法蓮華經」(御書二八四鈔)と端的に示されるにとどまっている一と。**



(私見) 池田先生が、撰時抄の「原本」において日蓮仏法の本義、重要義をご指導にも拘わらず、「近刊」の解説の何と稚拙なことか。言葉がない。これでは、青年部、後世の学会員にとって撰時抄の真義が伝わらない。学会教学は減んだと言わざるを得ない。

この「近刊」も、本拙文12頁に記載した「教学要綱」の以下の邪義が明らかです。―②「日蓮＝久遠元初自受用報身如来＝南無妙法蓮華經＝人法一箇の御本尊」を記さず、大聖人は単に釈尊から託された「南無妙法蓮華經」を弘める菩薩(91頁)とすること。

次に、「報恩抄」について、「原本」と「近刊」を比較、検証します。

報 恩 抄

細井日蓮監修
池田大作著

日蓮大聖人御書十大部講義

第五卷

「原本」387頁には一寿量品に是好良薬、今留在此、汝可取服と。是好良薬は本尊、今留在此は戒壇、汝可取服は題目である。さらに三大秘法を聞いて六大秘法となす。本尊に人法、戒壇に義事、題目に信行である。本文に「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とある。これは人本尊を示されたものである。教主釈尊には多くの義があり、藏教、通教、別教、法華経の迹門、本門、文底のそれぞれに教主釈尊がある。いま、ここにおおせの教主釈尊とは、本門寿量品文底下種の教主釈尊である一と。

また、390頁には一すなわち久遠元初の自受用身であらせられ、末法に日蓮大聖人と御出現の教主であらせられるのである。色相莊嚴の在位の釈尊は法勝人劣であるが、久遠名字の教主釈尊は人法一箇であらせられる。ゆえに本尊となすところの教主釈尊とはまた、事行の一念三千の大曼荼羅であらせられるのである一と。

そして、須田氏の「日蓮の思想」368頁には一「報恩抄」も、「撰時抄」と同じく、「日蓮本仏」を明かすところにその帰結があるといえよう。

「報恩抄」の元意について、池田大作創価学会名誉会長は、「本抄は、一往は故師道善房に対する報恩を明かされてはいるが、その元意すなわち御内証は、日蓮大聖人が末法の御本仏として、三大秘法を建立し、広宣流布されることを明かされているのである」(『池田大作全集28 報恩抄講義』三二頁)と述べている一と。

また、378頁には一三大秘法の内容を明かしたのは「報恩抄」が最初である。この点に「報恩抄」の重大な意義がある一と。

さらに、378、379頁には一、「本門の本尊」については、「一つには日本乃至一閻浮提、一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし。いわゆるそのほか宝塔の内の釈迦・多宝、外の諸仏並びに上行等の四菩薩、脇士となるべし」(三二八頁)と説かれる。ここで「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とある教主釈尊とは法華経の文上本門で説かれる釈尊ではない。

文上本門で説かれる釈尊はこの文に言う「宝塔の内の釈迦」である(同じ仏が同時に本尊となり脇士になるということは論理的にあり得ない。人本尊としての仏と脇士となる仏は別の存在とならなければならない)。

それに対して「本門の教主釈尊」とは「宝塔の内の釈迦」を脇士とする根本仏の意味である。それは何を指すかといえば、日蓮図頭の文字曼荼羅本尊を見れば明らかとなる。宝塔の中に登場する釈迦牟尼仏と多宝如来を脇士として曼荼羅本尊の中央に大きくしたためられているのは「南無妙法蓮華経 日蓮」である。すなわち、「報恩抄」でいう本尊としての**教主釈尊とは、南無妙法蓮華経と一体の日蓮に他ならない**。すなわち、「報恩抄」のこの文は、日蓮を末法の**人本尊**とすることを意味しているのである一と。

上記に対して、「近刊」の312, 313頁には一三大秘法について、本抄の二年前に認められた「法華取要抄」では、「本門の本尊と戒壇と題目」(御書三三六鈔)と、その名称だけが示されていた。それが、本抄では本門の本尊と題目については、端的にその姿を示されている。なお、本門の本尊については、「観心本尊抄」では「事行の南無妙法蓮華経の五字並びに本門の本尊」(御書二五三鈔)、「撰時抄」では「寿量品の南無妙法蓮華経」(御書二八四鈔)と示されていたのに対し、本抄では「本門の教主釈尊を本尊とすべし」(御書三二人鈔)と述べられている。ここで「本門の教主釈尊」を本尊とするという意は、「観心本尊抄」「撰時抄」などに照らして、釈尊を久遠実成の仏ならしめた**根本の法である南無妙法蓮華経を本尊**とすべきであると示されたと解される。一と。



(私見) 池田先生の「報恩抄」御書講義原本では、三大秘法が明確に示され、結論として一ここにおおせの**教主釈尊とは、本門寿量品文底下種の教主釈尊である一**、また、一すなわち**久遠元初の自受用身であらせられ、末法に日蓮大聖人と御出現の教主**であらせられる一、さらに、一ゆえに本尊となすところの教主釈尊とはまた、事行の一念三千の**大曼荼羅**一とご指導であるにもかかわらず、「近刊」は一「本門の教主釈尊」を本尊とするという意は、「観心本尊抄」「撰時抄」などに照らして、釈尊を久遠実成の仏ならしめた**根本の法である南無妙法蓮華経を本尊**とすべきであると示されたと解される。一とまでしか記さないのです。この「近刊」も、本拙文12頁に記載した「教学要綱」の底意である釈迦本仏論と同調の邪義です。 37/124

教学要綱に一番矛盾するのは、実は報恩抄の「**本門の教主釈尊を本尊とすべし**」です。この本尊とすべき釈迦が題目と共に脇士として本尊となる、という言葉遊びのような解釈が教学要綱の本質です。あるときは本尊だけど、あるときは脇士。日蓮本佛論も同様で、釈迦の使いだけど御本仏、みたいな感じの言葉遊びです。そもそも脇士とは、本尊を補佐する役割をになうもので、本尊それ自体ではありません。

それを、脇士だけど本尊、本尊だけど脇士とする教学要綱はご都合主義の言葉遊びをしているだけであり、報恩抄に矛盾して崩壊しているということが言えます。観心本尊抄には「**本門の釈尊を脇士と為す一閻浮提第一の本尊此の国に立つ可し**」と。この一閻浮提第一の本尊＝報恩抄の「**本門の教主釈尊**」であり、この本尊となる釈尊とは、脇士の釈尊とは別の仏であると解釈する以外に、矛盾を解決する方法はどこにもないということです。それこそが人法一箇であり、牧口・戸田・池田先生へと受け継がれてきた、真の日蓮仏法ということがいえます。

次に、**四信五品抄** 同三年（1277年）4月10日、56歳、身延でご述作、について、「原本」と「近刊」（「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」の一冊で発刊）を比較しました。



（原本）戸田先生の**四信五品抄講義**（戸田城聖全集第7巻356，357頁）には、次のように記されています。
一 四信というのは、信心の段階を四つに分けたものである。五品というのは、修行の方法、位に五つあるというのです。いずれにしても、大聖人の仏法の場合、根本とすべき修行は、御本尊様に題目を唱えるのが、いちばん肝心要のことなんだよというのです。（中略）

寿量品というのはわれわれが朝晩あげておりますが、仏の長遠の生命を説いており、その**寿量品の文底に南無妙法蓮華経がある**。（中略）**文底になると「仏の寿命の長遠を聞いて」とは、御本尊様に会えてというように、末法今日では読まなければならないことになるのです。**（中略）御本尊様を拜んで、わけがわかってもらわなくても、とにかくそれを信ずる、それが最初の**信心の姿**だというのです。その功德というものは限りがないというのです。一と。

そして、池田先生の巻頭言・講義集第1巻（1962年）、**四信五品抄講義**（201～202頁）には、次のようにしるされています。

一われわれ学会員が、たとえ少しの理解もなく南無妙法蓮華經と題目を唱える、その位は、どういう位であるか。日蓮大聖人がはっきり明かしてくださっている。（中略） 仏法を究明してみれば、ぜんぶ**一大秘法の南無妙法蓮華經、すなわち、御本尊様に帰一すること**は、当然なことです。その御本尊様をたもった者の位はどうか。これを明かしていらっしゃるわけです。一と。

しかし、「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」（2025年刊）の85，86頁には次のように記されています。— 題目の南無妙法蓮華經に、森羅万象（万法）が収まっていることを示し、信心口唱によって法華經の本意を会得できることが明かされる。—と。



また、— 題目には全ての教えが含まれていることを章安大師(灘嘶)や妙楽大師の言葉を挙げて明かされ、理解はなくても信じて実践する人にはその功德がそなわること示される。—とだけです。

（私見）上記、戸田・池田先生の**四信五品抄講義**についての本当のご指導は、文底からであり、南無妙法蓮華經を唱えるとは、結論、**一大秘法の南無妙法蓮華經、すなわち、御本尊様に帰一すること**なのです！この、戸田・池田両先生のご指導に対し、「教学要綱」と「現代語訳 四信五品抄」の記述は完全に違背した文上だけの邪義なのです。***

次に、十大部の最後の**本尊問答抄** 弘安元年（1278年）9月、57歳、身延でご述作、について、「原本」と「近刊」（「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」の一冊で発刊）を比較しました。



（原本）上記、「教学要綱」と、「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」に対し、池田大作先生が監修された「本尊問答抄に学ぶ」（中）大阪・豊中総合本部青年部編（1990年）の173～174頁には、以下記されています。一本抄で示された「法華經の題目」とは、事の一念三千の南無妙法蓮華經であり、久遠元初の自受用身の当体がそのまま一念三千の南無妙法蓮華經であることを示されている(**人即法**)。 39/124

また報恩抄における「本門の教主釈尊」との仰せは、久遠元初自受用身の御事であり、事の一念三千が即自受用身であることを顕されたものである(法即人)。以上のことから、両抄における本尊の御教示は、その元意においてはいずれも大聖人御図顯の人法一箇の大曼荼羅本尊を明かされたものと拝されるのである一と。



さらに、「本尊問答抄に学ぶ」(下)大阪・豊中総合本部青年部編(1991年)の12-16頁にも、以下記されています。—「問うて云わく、末代悪世の凡夫は何物をもって本尊と定むべきや。答えて云わく、法華經の題目をもって本尊とすべし」(302頁)について、次のように記されています。

【講義】法華經の題目 本段は本抄の標文であり、全体の主題を示されているところである。以下、この主題をめぐって論を展開され、末代悪世の凡夫が「法華經の題目」を本尊とすべき所以を明らかにされていく。この標文においては、末法の本尊をまず法の辺から示されているが、その元意は人法一箇の本尊であり、人に即する法の本尊であることに注意しなければならない。また、「法華經の題目」は、単に二十八品の經題ではなく、元意の辺から拝さなくては本抄全体の主旨を誤ってしまうことになる。(中略) 31/46

「法華經の題目を以て本尊とすべし」との仰せから、日蓮宗諸派では“大聖人の仏法においては題目が根本であり、それを唱える信心の対象として本尊があるとしてきた。これは本尊と題目の関係を誤って捉えた本末転倒の考え方であり、本尊を軽視し、根本の本尊に迷つてきたのである。法華經の題目は法華經の題号とその名は同じであるとはいえ、義は全く別である事を知らねばならない。一と。

また、池田先生の「日蓮大聖人御書十大部講義第五卷 報恩抄」390頁には、以下、記されています。—「本門の教主釈尊を本尊とすべし」とある。これは人本尊を示されたものである。教主釈尊には多くの義があり、藏教、通教、別教、法華經の迹門、本門、文底のそれぞれに教主釈尊がある。いまここにおおせの教主釈尊とは、本門寿量品文底下種の教主釈尊である。すなわち、久遠元初の自受用身であらせられ、末法に日蓮大聖人と御出現の教主であらせられるのである。色相莊嚴の在位の釈尊は、法勝人劣であるが、久遠名字の教主釈尊は、人法一箇であらせられる。 40/124

報
恩
抄

細井日蓮監修
池田大作著
日蓮大聖人御書十大部講義
第五卷

ゆえに本尊となすところの教主釈尊とはまた、事行の一念三千の大曼荼羅であらせられるのである一と。

そして、須田氏の「日蓮の思想」387頁には一本抄では、日蓮の仏法における本尊が仏像ではなく、文字によって法を図顕した曼荼羅であることが明示されている。この点においては「観心本尊抄」「日女御前御返事」などと全く同一である。(中略)「法華經をもって本尊とするなり」と言われている「法華經」とは文上二十八品の法華經を指すのではなく、根源の妙法である南無妙法蓮華經を指すと解さなければならない。文上の法華經はあくまでも釈迦仏が説いた教説に過ぎず、釈迦仏を仏にさせた能生の法ではないからである。南無妙法蓮華經を本尊とするとは、南無妙法蓮華經を顕した曼荼羅を本尊とする意である。一と。

しかし、「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」177頁には次のように記されています。—「報恩抄」では「本門の教主釈尊を本尊とすべし」(新二六一頁・全三二八頁)と述べられている。(中略)浄願房は「報恩抄」を受け取ったのであるが、そこに記された本門の教主である釈尊を本尊とするという教えと、実際に頂いた法華經の題目を中心とする文字曼荼羅の御本尊とが、どのように結びつくのかという疑問を抱いても不思議ではない。本抄では、そのような疑問に答えるべく、問答が重ねられていくのである。

この疑問に対する答えとしては、「法華經の題目を本尊とするのがよい」「釈迦仏や大日如来、広く言えば十方世界の仏たちは、法華經からお生まれになったのである。それ故、今、仏を生み出す根源(能生)を本尊とするのである」と示される。一と。

(私見)「法華經の題目」とは人法一箇の日蓮大聖人のことなのです。この真義を無視しているのが「現代語訳 本尊問答抄」なのです。よって、「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」の底意は、まさに、単法本尊であり、その文は日蓮大聖人の御本尊に唱題をすとの根本義を欠き、どんな本尊だろうと南無妙法蓮華經と唱えても構わない、さらには、本尊は何でもいいとの拡大解釈の余地さえ残す暴論にもなっています。これこそが、「現代語訳 四信五品抄 本尊問答抄」が持つ底意一日蓮本仏論と人法一箇の否定一からの邪義なのです。

池田先生は次のようにご指導です。－「この人即法の当体としての御本尊は、一往は法本尊であります、再往は**人法一箇の御本尊**であります。ゆえに「南無妙法蓮華經 日蓮」と中央にしたためられております。南無妙法蓮華經は”法”、日蓮在御判は”人”をあらわすのであります」(『池田大作全集』第24巻 観心本尊抄講義 p. 232)、これが、日蓮仏法の結論なのです。

最後に、下山御消息について「原本」と「近刊」の比較をします。

池田大作監修「下山御消息に学ぶ①」(平成3年、1991年刊)の143, 144頁 第二章 本抄の教学的位置には一



御図顕された御本尊の相貌によって大聖人の御真意は明瞭であるといわねばならない。すなわち、本門の釈尊を脇士となす本尊こそ、地涌千界の上首・上行菩薩の再誕として 末法に出現された大聖人の顕される一閻浮提第一未曾有の御本尊にほかならない。しかしながら、上行菩薩の再誕としての御立場は迹で、その本地は**久遠元初自受用報身如来**であられる。

人に約して久遠元初自受用報身如来とは即法に約して南無妙法蓮華經であり御本尊中央の首題であられる。釈迦・多宝はその左右にあって脇士となっているのである。その意味で、下山抄における「**教主釈尊より大事なる行者**」とは、まさに**大聖人の御内証の御立場**を示されたものであり、教主釈尊とは久遠元初の御本仏に対して脇士となる本門の教主釈尊を指している。一と。

そして、須田氏の「日蓮の思想」383頁には、以下記されています。一本抄では日蓮自身の位置づけが示されている。それは次の文である。「**たとい鉄圀山を日本国に引き回し、須弥山を蓋として十方世界の四天王を集め波際に立て並べてふせがするとも、法華經の敵となり教主釈尊より大事なる行者を法華經の第五の巻をもって日蓮が頭を打ち、十卷共に引き散らして散々に踏みたりし大禍は、現当二世にのがれがたくこそ候わんずらめ**」(三六二頁)

ここで自身について「**教主釈尊より大事なる行者**」と規定していることが重要である。なぜ、日蓮が「釈尊より大事」なのか。それは釈尊は末法における教主ではなく、日蓮こそが末法に南無妙法蓮華經を弘通する教主であるからである。すなわちこの文は「**日蓮本仏**」を裏づけるものとして解せられる一と。

（私見）現在、大白蓮華2025年4月号から連載中の「下山御消息」は、10月号で6回目の連載ですが、その前の連載御書「唱法華題目抄」と同じく現代語訳のみだけです。今後、十大部という重要な「下山御消息」の解説を、是非とも出版して頂きたいです。その際には、きちんと、上記池田先生のご指導を拝して、文底からの解釈、講義をして、日蓮仏法の真義と「**日蓮本仏**」を明白にするべきです。それが、池田門下生の責務であると信じます。

以上、御書十大部に付き、「原本」と「近刊」の比較、検証を致しました。その結果、一男子部教学室が「教学要綱」は十大部を中心としている一と発信していることは、池田先生の十大部講義の内容とは、完全に齟齬、違背した誤りの言質であることが、明白となりました。

私は、そもそも、「教学要綱」についての疑問への対応を、なぜ、壮年の本部教学部から発信せずに、男子部教学室に任せたのか？との根本的な不信があります。

そして今回、私が検証した十大部御書での「近刊」の邪義、池田先生への背信の現状に対して、本部教学部は学会員さんにどのような説明をするのですか！その説明ができないのであれば、潔く、「教学要綱」を、今すぐ絶版にし、池田先生の本当のご指導に戻すべきです！

4. 新たに、近刊教学本4冊が池田先生のご指導原本を無視、削除、改竄している現状を検証し、創立95周年に鑑み教学の危機的現状を記し置く。

私は、8月24日、一池田先生の入信記念日に思う「教学要綱」の不正一と題する拙文を作成し、皆様にご案内しました。その中で、近刊教学書4冊（一つは上、中、下の3巻）が、池田先生の原本のご指導を削除、改竄されていることを記しました。また、大白蓮華、聖教新聞などで掲載の御書講義も、池田先生の御書講義「原本」とは齟齬、違背している現況を記しました。以下、年初からの拙文で、8月24日の拙文も掲載です。ご参考下さい。

<https://drive.google.com/drive/folders/1wSKZjIOPLvyJVxUCWU8LL-LHJrg4ZNNi>



そして今回、上記4冊以外の新たな近刊教学書4冊（以後「近刊」と略）も読みました。結果、前回と同様、池田先生の原本のご指導が削除、改竄されていることを発見し、私は、創立95周年の現状を後世に残すべきと決意、ここにその要旨を記します。新たな4冊は左記です。一読後、この4冊も先生の「原本」を無視した完全な文上からの解釈であり、先生の獅子吼、真心からの激励など全く感じられない作文でした。これでは、先生を「永遠の師匠と仰ぐ」とは言えない！以下、「近刊」各冊ごとに、代表的な御書二つ～三つの改竄された解説を掲示、それに対して先生の正しい「原本」のご指導を明示、私見を述べます。

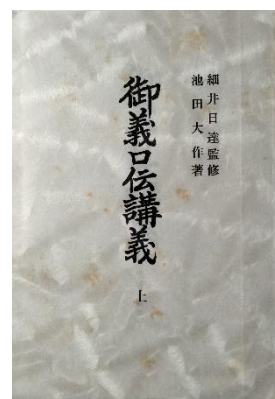
最初に、池田先生がご逝去の3日後、2023年11月18に発刊された「広布共戦の師弟旅」について検証しました。



「近刊」43頁では、御義口伝（新1014、全727頁）の以下、御文を掲載しています—今日蓮等の類いの心は無上とは南無妙法蓮華経・無上の中の極無上なり、此の妙法を指して無上宝聚と説き給うなり、宝聚とは三世の諸仏の万行万善の諸波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華経なり… 一と。

そして、46頁の解説で一この「無上宝聚」について、「御義口伝」では、「無上の宝の集まり」とは、三世十方の諸仏の功德を集めた南無妙法蓮華經であることが示されています。妙法こそが「無上の中の極無上」だからです—と。

それに比して、池田先生の「原本」「御義口伝講義上」433頁の語訳では以下の記述です。—いま、日蓮大聖人のお立ち場、お心からするならば、無上宝聚の無上とは、**三大秘法総在の南無妙法蓮華經**なのである—と。 また、435頁の講義では、以下の記述です。— **無上宝聚とは大御本尊のこと**である。すなわち、**大御本尊が無上の宝の聚り**なのである—と。



(私見) 池田先生の「原本」は、「**無上宝聚**」とは、**三大秘法の大御本尊**なのです。それを「近刊」では、南無妙法蓮華經だけにしているのです。これは、結論、「教学要綱」の新解釈である一大秘法は南無妙法蓮華經との邪義に同調した記述なのです。「原本」の**三大秘法総在の南無妙法蓮華經**とは、まさしく、御本尊を根底にされたご指導なのです。それを「近刊」は全くの文上解釈しかしていないのです。

私は、これまでに4冊の「近刊」を読み「原本」との比較、検証を行いました。多くの書で「御義口伝」が掲載されています。そしてそれらは池田先生の「原本」である「御義口伝講義」の根本的解釈方針である文底解釈をしていません。そして、これから記す残り3冊で掲載の「御義口伝」も文上解釈です。これでは、池田先生のご指導された日蓮仏法の本義は伝わらないです。

ここで、池田先生の「原本」である「御義口伝講義上」の序講の冒頭3、4頁に記された以下こそが先生の本意であり、それを逸脱した解釈はあってはならないとの考えから、その文をここに記し置きます。—

日蓮大聖人の御一代における各御抄はいずれも重要である。例えば立正安国論には、邪法を破し、正法正義を立てることによってのみ、国家社会の平和と繁栄が実現されることを論じている。開目抄には**五重の相対**を立てて、あらゆる諸教、諸宗を配列批判し、末法の御本仏たる日蓮大聖人こそが末法万年の民衆の苦悩を救われる**人本尊**であらせられることを明かしている。

また観心本尊抄には、**五重三段**を立てて、低劣な諸教、諸宗を破し、末法において即身成仏の大直道は、**文底下種**三段において立つところの**三大秘法の大御本尊**であることを明かしている。そのほか、数多くの法門を述べられた諸御抄から、御供養の御礼を述べられたわずか二、三行のお手紙にいたるまで、みなそれぞれ重要な地位を占めている。御義口伝はまた、これらの諸御抄とは比較にならない重要性がある。それは**日蓮大聖人の文底下種仏法**が、きわめて明確に説き尽くされているからである。この**文底下種仏法**を、開目抄上（一八九頁）「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の**文の底**にしづめたり」と説き、観心本尊抄(二四九頁)には「彼は脱此れは種なり彼は一品二半此れは但題目の五字なり」と判じられている。一と。

すなわち、池田先生の「御義口伝講義」は**五重の相對、人本尊、文底下種、三大秘法の大御本尊**、との日蓮仏法の本義を文底よりご指導であり、「近刊」が「御義口伝」を揭示し、勝手、浅はかな文上からの解釈、作文をしてはならないのです！このことは最も重要なことであり、敢えて最初に記し置きます。

2つ目に、「近刊」59頁には、開目抄の以下御文（新102、全223頁）が掲載されています。— **日蓮といいし者は、去年九月十二日子丑時に頸はねられぬ、これは魂魄、佐土の国にいたりて、返る年の二月、雪中にしるして有縁の弟子へおくれば、おそろしくておそろしからず。 みんないかにおじぬらむ…** 一と。

そして、その解釈として62～64頁には一先の「開目抄」の御文で、実際には斬首できなかったのに、「頸はねられぬ」と述べられているのは、なぜか。ここに発迹顕本の深義があります。（中略）不惜身命の如説修行によって、末法の凡夫の生命に、内なる本来の仏の境地を顕わして下さったのです。まさしく「開目抄」には**主師親を具備**した末法の御本仏としての民衆救済の大境涯が厳然と示されています。これが日蓮大聖人の発迹顕本です一と。そして、69頁には一大聖人の内面の境地は**元初の仏**の御境涯そのものですが、現実社会における外に現れた働きにおいては、**教主釈尊から末法弘通を付嘱された「地涌の菩薩」**の棟梁である「上行菩薩」の行動であり振る舞いです一と。

それに比して、「原本」の池田大作全集第34巻「開目抄」講義177頁で、先生は、上記の御文について以下ご指導です。—

ここでは、大聖人が竜の口で発迹顕本されたことを示されています。

「魂魄」とは、発迹顕本された大聖人の本地の御生命、すなわち久遠元初自受用報身如来の御生命を意味します一と。そして、289, 290頁で一「開目抄」全編の結論ともいふべき「末法下種の三徳」について語っていきます。大聖人は仰せです。「日蓮は日本国の諸人にしうし父母なり」(御書二三七) 日蓮大聖人こそが末法の主師親の三徳を具備されていると宣言されている一節であり、本抄が「人本尊開顕の書」と言われる根拠もここにありますが一と。



(私見)「開目抄」の根本義について、池田先生は「原本」で一「魂魄」とは、発迹顕本された大聖人の本地の御生命、すなわち久遠元初自受用報身如来の御生命を意味します一と、そして、本抄が「人本尊開顕の書」一とご指導なのです。これを「近刊」は一大聖人の内面の境地は元初の仏の御境涯、また、一大聖人は、教主釈尊から末法弘通を付嘱された「地涌の菩薩」の棟梁である「上行菩薩」一です。

池田先生がご逝去された3日後の2023年11月18日に発刊のこの書籍を池田先生の著作と銘打ち、日蓮仏法の根本義「人本尊」が説かれた「開目抄」を掲示し、結句、一日蓮大聖人が発迹顕本された後も、大聖人は「地涌の菩薩」の棟梁である「上行菩薩」とだけです。こんな作文で良いのでしょうか？これこそ、池田先生への背信、大聖人様を冒瀆していると断言します！

次に、「近刊」「世界の青年と共に 新たな広布の山を登れ！」(2024年

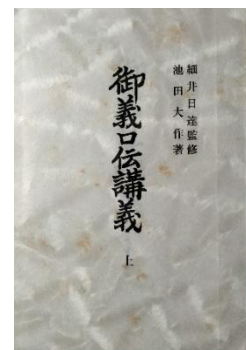


5月3日発刊)と、「原本」池田先生の「御義口伝講義」を比較しました。「近刊」の19頁には、下記の引用があります。一御義口伝に云く、「南無」とは梵語なり。ここには「帰命」と云う。人法之れ有り 人とは釈尊に帰命し奉るなり。法とは法華經に帰命し奉るなり。また云わく、「帰」と云うは述門不變真如の理に帰するなり。

「命」とは本門隨縁真如の智に命くなり。「帰命」とは南無妙法蓮華經これなり。釈に云わく「隨縁・不變は一念の寂・照なり」(新984・全708頁)一と。

そして、21頁には以下記述です。一最初に、南無とは、漢語で「帰命」と訳され、簡潔に言えば、“根本として随う”という意義になります。つまり、自分の全てをかけて信じるということです。さらに、何に帰命するかについて、「人」と「法」とがあると述べられます。言うまでもなく、私たちから拝すれば、末法の御本仏・日蓮大聖人、そして南無妙法蓮華經の御本尊への帰命にはほかなりません一と。

それに比して、「原本」池田先生の「御義口伝講義」52頁には一「南無」とは梵語であって、これを漢語に訳せば「帰命」という。その帰命する対境、対象に「人」と「法」とがある。「人」とは、**文底の釈尊即人本尊たる日蓮大聖人**である。「法」とは末法の法華經であり、**法本尊であるところの南無妙法蓮華經**である。すなわち**人法一箇の大御本尊**に帰命することが、真実の中の真実の帰命なのである一と。



また、53頁には一釈には「随縁不変・一念寂照」とある。随縁真如の智も、不変真如の理も、共に実在しているのが、生命の実体であり、本質なのである。これを妙法というのである。これすなわち、**三大秘法の南無妙法蓮華經**である。この**御本尊**に帰依することによって、絶対的幸福境涯たる成仏がかなうのである一と。

(私見)「新版」で引用した「御義口伝」の一節は、まさに、「御義口伝」の冒頭の最重要の文です。その文を、池田先生は「原本」において、一 **文底の釈尊即人本尊たる日蓮大聖人、法本尊であるところの南無妙法蓮華經、人法一箇の大御本尊、三大秘法の南無妙法蓮華經**であるこの**御本尊**、一と、日蓮仏法の最奥義を明確にされているのです。それなのに、「近刊」は、それを記さないのです。つまり、人と法を別々にしたまま、さらに、御本尊の本義が人である日蓮大聖人であり、また、法である南無妙法蓮華經が**人法一箇**であると明示していない！これは、池田先生への背信であり、これこそが詭弁なのです。

＊ ＊

また、「近刊」111頁には一諸法実相抄の下記御文が引用されています。一 **釈迦仏・多宝仏・十方の諸の仏菩薩・虚空にして二仏うなずき合い、定めさせ給いしは別の事にはあらず、ただひとへに末法の令法久住の故なり。既に多宝仏は半座を分けて釈迦如来に奉り給いし時、妙法蓮華經の旗をさし顕し、釈迦・多宝の二仏大将としてさだめ給いし事あに・いつはりなるべきや、併ら我等衆生を仏になさんとの御談合なり** 一と掲載されています。そしてその解釈として、113、114頁に以下記述です。 48/124

一 令法久住とは法華經見宝塔品第 11 の文で「法をして久しく住せしめん」（法華經 387 頁）と読みます。未来にわたって妙法を伝えていくことです。日蓮大聖人はこの御文で、法華經の虚空会の儀式が何のために行われたかを明らかにされています。まず、釈迦・多宝の二仏が宝塔の中で並座したのは、ひとえに「末法の令法久住」、すなわち「末法広宣流布」のためであったと明かされています。（中略）大聖人は法華經の肝心であり、万人成仏の根本法である「南無妙法蓮華經」を説き明かし生涯をかけてひろめられました。一と。

それに比して、「原本」の池田大作全集第 24 巻 88～90 頁には一「法華經に身をまかせる」とは我が人生の究極の依処を御本尊におくということです。一と。また、89 頁には一この一往の文上の流れでみれば、法師品のあとの宝塔品で多宝の塔があらわれ、釈迦、多宝二仏並座のもとに行われた法華經の儀式は、地涌の菩薩に末法の妙法弘通の使命を託すためであったといえます。これが「唯ひとへに末法の令法久住の故なり」と言われている一往の義です。これは、しかし、一往文上の辺であり、化儀の側面であります。再往文底からみれば、実はこの中に、末法の衆生を成仏せしめるべき末法流布の法体が明かされている。

すなわち、家の設計図と家そのものとの関係のごとく、この法華經の二仏が多宝塔中に並座し、虚空会において「妙法蓮華經の旗をさし顕し」「さだめ給」うた儀式が“そのまま”三大秘法の御本尊のお姿をあらわしているのがあります。この本文では「妙法蓮華經の旗」と言われているのがそれでありま

す。この御本尊こそ、末法に流布される法体であり、一切衆生を末法万年尽未来際にいたるまで即身成仏させる秘法であります。「末法の令法久住」の文の元意はここにあります。ゆえに「併ら我等衆生を仏になさんとの御談合なり」と仰せられているのであります。この御本尊こそ末法に流布される法体であり、一切衆生を末法万年尽未来際にいたるまで即身成仏させる秘法であります。「末法の令法久住」の文の元意はここにあります。ゆえに「併ら我等衆生を仏になさんとの御談合なり」と仰せられているのであります一と。



（私見）この諸法実相抄の御文は、結論、御本尊様の相貌について記されているのです。それを池田先生は「原本」でご指導なのです。それに違背して、「近刊」は文上解釈だけの一大聖人は法華經の肝心であり、万人成仏の根本法である「南無妙法蓮華經」を説き明かし一です。これでは諸法実相抄を記された大聖人様のご本意まで貶めています！ 49/124

次に「近刊」「改訂版 御書をひもとく 要文123選」（2024年9月8日発刊）と「原本」を比較します。



「近刊」の10頁には、御義口伝から下記（新1043、全748頁）が掲載されています。—「師」とは師匠授くる所の妙法、「子」とは弟子受くる所の妙法、「吼」とは師弟共に唱うる所の音声なり。「作」とは、「おこす」と読むなり。末法にして南無妙法蓮経を作すなり—と。そして通解として—「師子吼を作す」とは、末法において、南無妙法蓮華経を起こすことを言うのである。—と。また、解説では一大聖人の御立場からの法華経解釈が展開されている—とだけです。

それに比して、「原本」、池田先生の「御義口伝講義下」783頁には—「師とは・・・」以下の文は、師弟不二を示されたものである。「授くる所の妙法」とは、大御本尊のことである。人法一箇を示す。「子とは弟子」とは大御本尊を信ずる者あり、「受くる所の妙法」とは、信心で受けとるところの妙法、すなわち、大御本尊を信じて、我が己身の法華経を湧現することである。「吼とは師弟共に唱うる所の音声なり」とは、師弟不二である。また「南無妙法蓮華経を作す」とは、信心は受動ではなく、能動であるということ—と。



（私見）「近刊」は上記のように、池田先生の日蓮仏法の真義についてのご指導など全く記してません。それは、全編にわたります。これでは、表題の「御書をひもとく」にはなりません！

「近刊」162頁には、生死一大事血脈抄の下記掲載（新1775、全1337頁）があります。— 総じて、日蓮が弟子檀那等、自他彼此の心なく水魚の思いを成して、異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉るところを、生死一大事の血脈とは云うなり。しかも、今、日蓮が弘通する処の所詮是なり。もししからば、広宣流布の大願も叶うべきものか—と。そして、上記御文についての文上口語訳があり、解説には池田先生の御文についての講義は全くないです。

それに比して、「原本」の池田大作全集第24巻173頁には、以下のご指導です。—「総じて」と述べられていますが、これは、ご存じのように「別して」に対する言葉です。別して生死一大事の血脈が流れ通うところを尋ねれば、本抄のはじめに「釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて此の妙法蓮華經の五字過去遠遠劫より已来寸時も離れざる血脈なり」とありますように、**文上**においては、釈迦、多宝の二仏から付嘱を受けた上首上行菩薩の生命にその血脈はある。したがって**再往、文底**の立場から拝するならば、法華經文上に**垂迹上行菩薩**と現れた**久遠元初自受用身如来の再誕たる日蓮大聖人の御生命こそが**、別しての**生死一大事の血脈の当体**なのであります。したがって、この御文は、日蓮大聖人の御生命に流れる血脈が、総じては大聖人門下の異体同心の団結の姿の中にあらわれると結論づけられた箇所なのであります—と。

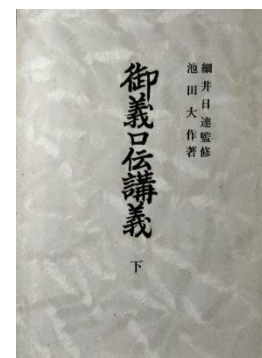


(私見)「近刊」は池田大作全集に掲載された先生の日蓮仏法の真義をなぜ、削除するのか？池田大作全集は先生の日蓮仏法の文底からの講義が全てです。それを後世に正しく伝えるのが私たちの使命、責務ではないですか。「近刊」のような作文では、先生の真意が私たちの生命に伝わらないです。

また、「近刊」の最終266頁には、御義口伝から下記（新1085、全780頁）が掲載されています。—**この法華經を閻浮提に行ずることは、普賢菩薩の威神の力に依るなり**—と。そして、通解として—この法華經を全世界に行ずるということは、普賢菩薩の威神の力によるのである—と。更に解釈では—この「普く賢い」英知を体現して、実際に人々を護りゆく慈悲の行動を貫く菩薩が普賢菩薩なのである—と。

それに比して、「原本」の「御義口伝講義下」659頁には—「此の法華經」とは三重秘伝、四重興廢の原理に照らして**三大秘法の御本尊**にほかならない。「閻浮提に行ずる」とは、全世界に弘める、世界中の人々が、この**御本尊を信じ、実践すること**である—と。

(私見)池田先生は—「此の法華經」とは三重秘伝、四重興廢の原理に照らして**三大秘法の御本尊**—と結論です。これこそが池田先生の「御義口伝講義」なのです！男子部教室編「近刊」の解釈は画竜点睛を欠き、男子部等に池田先生の獅子吼、正義が届けられない！ 51/124



最後に、「近刊」の「世界一の生命哲学を学ぶ 池田華陽会御書30編要文100選」(2023年6月4日発刊)と、「原本」を比較、検証します。

「近刊」では、「開目抄」の7つの重要な御文を掲載ですが、その記述の中には、池田先生が「原本」である池田大作全集34巻、開目抄講義でご指導の—「開目抄は**人本尊**開頭の書」—が全くありません。



また、「観心本尊抄」の4つの重要な御文が掲載されていますが、その記述の中には、池田先生が「原本」である池田大作全集24巻、観心本尊抄講義でご指導の—「観心本尊抄は**法本尊**開頭の書」—、また—「御本尊が**人法一箇**のご当体」—が全くありません。

そして、「近刊」52頁には「観心本尊抄」の下記掲載(新134・全246頁)があります。—**釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華經の五字に具足す、我らこの五字を受持すれば、自然に彼の因果の功徳を譲り与え給う**—と。そして、解説として—末法において“この五字を受持する”とは、大聖人が顕わされた御本尊を受持すること—にほかなりません—と。

それに比して、「原本」の池田大作全集第24巻226頁には、以下ご指導です。—「釈尊」とは、文底独一本門の教主としての釈尊であり、**久遠元初自受用報身、末法御本仏日蓮大聖人御自身**であられます—と、また、274頁には—「**我等此の五字を受持すれば・・・**」とは、この御本尊に帰依する受持の一念の中に、もったいなくも日蓮大聖人の御命、そして**久遠元初の自受用身如来の命**が通ってくるのであります—と。

私見)「近刊」は、一応、—“この五字を受持する”とは、大聖人が顕わされた御本尊を受持すること—とは記していますが、これは、当然、且つ、必要最低限の記述です。しかし、これでは文上の解釈の域を出ず、日蓮仏法の本義である大聖人は久遠元初の自受用身如来、御本尊は人法一箇のご当体との奥義には程遠いです。池田先生のご指導こそが真義であり、私たちの信心そのものを確立して下さいなのです。それこそが、感応妙なのです。「近刊」からは、何の感動もありません。それは、結論、「近刊」の作文者には池田先生への尊敬が無く、日蓮仏法を我見で記せばいいとの詐心があるからです！

また、「近刊」230頁には「諸法実相抄」の下記掲載（新1791、全1360頁）があります。—**いかにも今度・信心をいたして法華經の行者にてとをり、日蓮が一門となりとをし給うべし、日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや**—と。その解説として—「日蓮と同意」つまり“大聖人と同じ心”に立つ者は「地涌の菩薩」であり「釈尊久遠の弟子」であることは疑う余地がないと仰せです—と。

それに比して、「原本」池田大作全集第24巻73頁「諸法実相抄」講義には—「法華經の行者にてとをり」とは、“法”を中心にした立場であり、「日蓮が一門となりとをし給うべし」は、“人”を中心にした立場で仰せられております。別して「法華經の行者」とは日蓮大聖人お一人であり、大聖人の御一身のために、法華經は説かれたと云うて過言ではないのです。そして大聖人お一人が法華經の一切を身に読みきられて、正像二千年の釈尊の仏法に区切りをつけ、末法万年の闇を晴らす御本仏として御出現になったのであります。—と。

さらに、77頁には—「釈尊久遠の弟子」の「釈尊」とは、一往は法華經本門の教主釈尊でありますが、**再往の辺を拝すれば、久遠元初の自受用報身如来**であり、末法**御本仏日蓮大聖人**であります。日蓮大聖人は、久遠よりこのかた、地涌の菩薩を教化してこられたという意味です。以上のことを結論づければ、日蓮大聖人と同意ならば、地涌の菩薩であることは決定的であり、それはそのまま日蓮大聖人の本眷属なのであります。（中略）この「**釈尊久遠の弟子**」ということを生



命論のうえから言えば、「釈尊」とは我が生命の内なる釈尊であり、南無妙法蓮華經如来であります。地涌の菩薩が、釈尊の久遠の弟子であるということは、上行、無辺行、浄行、安立行等の地涌の生命が、奥底の南無妙法蓮華經如来という本源に根ざした働きであることをあらわしているのであります—と。

（私見）「近刊」は、“大聖人と同じ心”に立つ者は「地涌の菩薩」であり、「釈尊久遠の弟子」であることは疑う余地がないと仰せです—と。しかし、池田先生は「原本」で一文上ではなく生命論から、**再往の辺を拝すれば、久遠元初の自受用報身如来であり末法御本仏日蓮大聖人**—とご指導なのです。この日蓮仏法の奥義を無視、弁えない「近刊」は、浅い文上の釈迦仏法なのです！

近刊4冊の最後に取り上げた、上記、「諸法実相抄」がどれほどの重書であるか。池田大作全集24巻「諸法実相抄」講義には以下、記述です。 53/124

14頁には一人法両面から、末法一切衆生の尊敬すべき根本を明かされたことは、**人本尊開頭の書たる「開目抄」、法本尊開頭の書たる「観心本尊抄」の結論が、ともに、この一書の中に包含されている**と、私には拝せられるのであります。(中略)初代会長牧口常三郎先生も、常に本抄をとおして指導されたとうかがっております。第二代会長戸田城聖先生が、法華経は別にして、まず、私達数人に講義された御書は「諸法実相抄」でありました。

20頁には一諸法実相とは、一往は、諸法はそのまま妙法蓮華経という真実の姿であるという観照の哲学のようであります。再往、文底観心のうえから言えば、御本尊こそ諸法実相という大宇宙の縮図であり、大聖人の仏法においては、**諸法実相とは即御本尊の異名**なのであります

39頁には一「地涌の菩薩の中の上首唱導・上行・無辺行等の菩薩」とは、日蓮大聖人御自身のことであり、**人本尊**をあらわします。また「本門寿量品の事の一念三千」とは、**法本尊**のことであり、**人法一箇**をあらわしております。

42頁には一地涌の菩薩が、本地・久遠元初の自受用報身如来であるということとは、久遠元初の仏が法華経の儀式というスクリーンのうえに映した一つの影ということになるのであります。地涌の菩薩ばかりでなく、釈迦、多宝の二仏も、**久遠元初の自受用報身即南無妙法蓮華経**という本地の仏が、虚空会の儀式のうえに映しあらわした影である、との仰せであります

60頁には一釈迦、多宝、更に、久遠元初の無作三身如来である南無妙法蓮華経という“仏”の生命をあらわすためには、御自身の内に、その“仏”の生命がなくてはならない。事実、日蓮大聖人御自身「**日蓮がたましひをすみにそめながして・かきて候ぞ信じさせ給へ**」(御書一一二四頁)と仰せられているのであります。**人法一箇の御本仏**であるがゆえに、**人法体一の御本尊**を御図顕されたのであります—と。 * * * * *

池田先生は、**日蓮大聖人＝久遠元初の自受用報身如来＝人法一箇の御本尊**—とご指導なのです。「近刊」は、池田先生の本意を、未来ある池田華陽会の方々
に示さずにどうするのか！池田先生のご指導を削除、隠蔽してはならない！

以上で、近刊教学書4冊と池田先生の「原本」との比較、検証を終えます。結論、「近刊」は「原本」で池田先生がされた日蓮仏法の文底講義に違背した文上だけの作文です。これは「教学要綱」と同じ偏向、邪義です。

(追記)

大白蓮華 11 月号が届きました。また、先日の聖教新聞も同じ御書の御文で驚きです！ 池田先生の「御義口伝講義」と比較、またまた、日蓮大聖人様の御文の一番大事なご文を無視、池田先生の文底からのご指導も改竄、御本尊の一言もなし、これが創立 95 周年の大白蓮華のすることか！池田先生の三回忌にすることか！

女性部
輝きのグループ学習

御義口伝

「師」とは師匠授くところの妙法、「子」とは弟子受くところの妙法、「吼」とは師弟共に唱うところの音声なり。

(新1043・全748)

池田華陽会委員長
田久保 華菜

日蓮大聖人は、ありのままの凡夫の身に、万人成仏の大法である南無妙法蓮華経を覺り、受持し、体現された末法の御本仏です。「御義口伝」は、大聖人がその立場から、法華経の要文を自在に解釈、講義され、それを日興上人が筆録し、大聖人の許可を得て完成したものと伝えられている。師弟の重書です。

今回学ぶ御文は、「御義口伝」の「勸持品十三箇の大事」の一節です。師匠と弟子が不二の心で妙法を弘めていくという、広宣流布の根本原理が示されています。

「師子吼」とは、百獸の王・獅子が吼える声です。多くの経典では、恐れなく真実を語る仏の説法を師子吼に譬えてを唱え、弘めていく広宣流布の大音声であると仰せです。

「師匠」の声に應えて、「弟子」も声を上げていく。師弟不二の叫びこそが「師子吼」なのです。師と共に弟子が決

います、勸持品では、弟子が仏滅後に法華経を弘通するべく誓いを述べることに「師子吼」とされます。それ

は弟子が師匠である仏と同じ誓願を共有しているからです。大聖人は、「師子吼」について、師匠と弟子が共に妙法

P65

2025-11 大白蓮華 64



2025年10月26日付聖教新聞

上記、大白蓮華と聖教新聞の御文は「御義口伝」の御文の切り文です。以下、池田先生の「御義口伝講義」を掲示します。池田先生の講義ではこの御文の始まりと終わりも含めての講義なのです。それなのに、大白蓮華は最初と最後を、聖教新聞の解釈は、一番大事な最後を削除しての解釈なのです。

これでは、池田先生の本意、師子吼が私たちに伝わるはずがないのです！妙法は感応妙なのです。池田先生のご指導に違背した作文では師弟不二ではなく、師弟の断絶なのです。以下、その不完全さを論証します。

第五 作師子吼の事

本文

第五作師子吼の事

御義口伝に云く師子吼とは仏の説なり説法とは法華別しては南無妙法蓮華經なり、師とは師匠授くる所の妙法子とは弟子受くる所の妙法・吼とは師弟共に唱うる所の音声なり作とはおこすと読むなり、末法にして南無妙法蓮華經を作すなり。

これでは御義口伝の本意は伝わらない。

大白蓮華

2025年11月号

では赤字がはい。

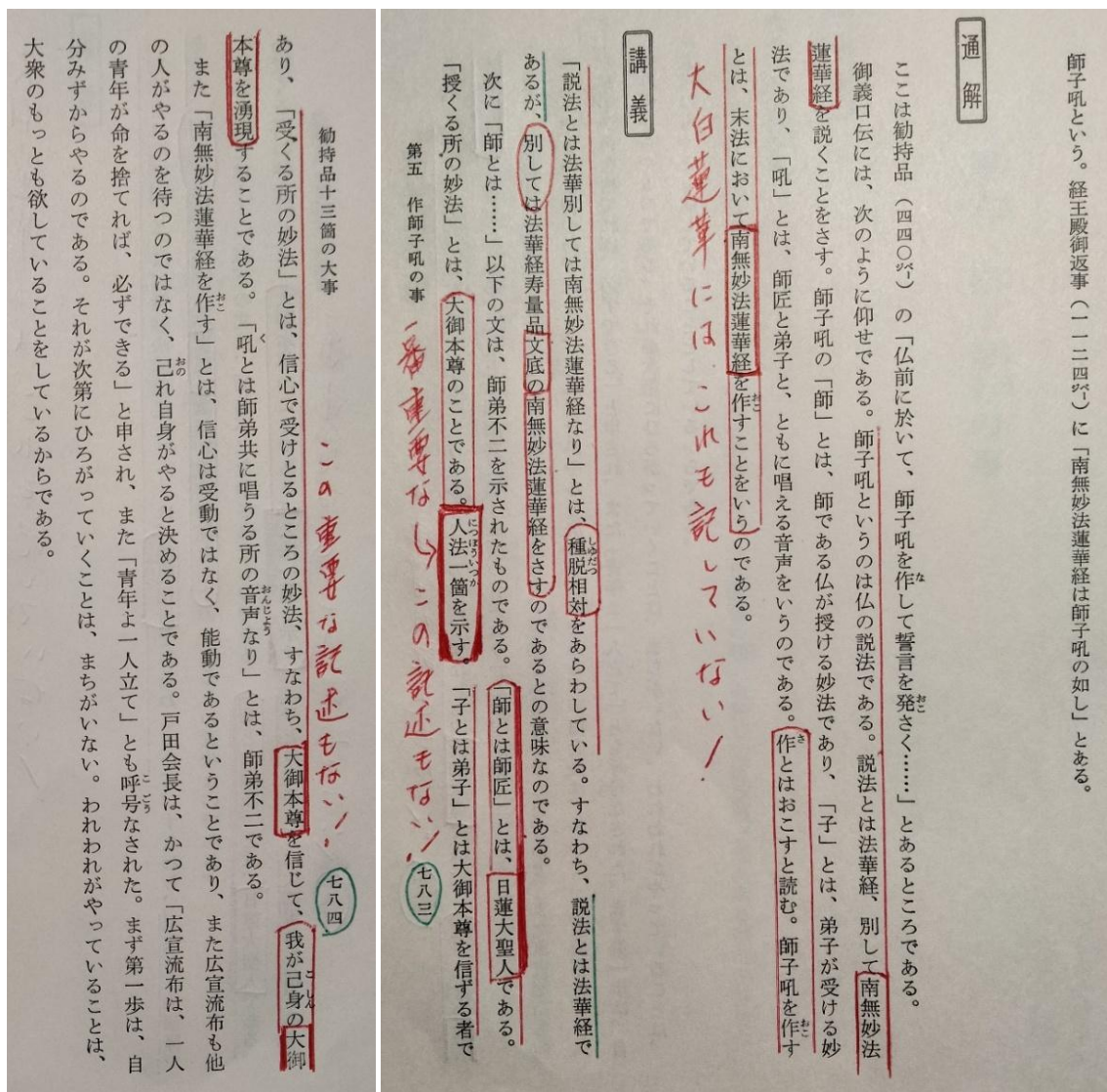
南無妙法蓮華經がはい。

の枠内の文言

緑だワノ
の枠内の文言

語訳

作師子吼 勅持品(四四〇頁)に「仏前に於いて、師子吼を作して誓言を發さく……」とある。百獸の王である獅子がひとたび吼えんと、他の獸類をすべて平伏する威力があるところから、衆生の迷いをすべてはらって、悟りを得させる仏の説法を



創立95周年の11月の大白蓮華が、池田先生の本当のご指導に違背していることについて、親友の中村誠氏が以下の論考を寄せてくれました。――

大白蓮華（p. 64）の「日蓮大聖人は、ありのままの凡夫の身に、万人成仏の大法である南無妙法蓮華經を覺り、受持し、體現された末法の御本仏です」この表現が曲者で、一見すると池田先生が現役の時代と全く同じ解釈のように偽装しています。しかしその本質は次のような意味合いを持たせています。――

大聖人は生命の奥底にある南無妙法蓮華經を覺り、それを墨で書き出して御本尊とした（大聖人と題目が分離された御本尊）。

そして題目の脇士が釈迦で、最も重要な位置にいたので、釈迦の仏像という風に解釈したのがこの表現の背後にある正体です。ですから「師匠授くところの妙法」とは御本尊ではなく、南無妙法蓮華經とした解釈でしょう。

一大秘法は南無妙法蓮華經という現在の学会の解釈と同じものです。なぜ一大秘法の解釈を御本尊から南無妙法蓮華經に変更したのか、教学要綱を読めば意味がわかります。

「日興上人は、本門の教主釈尊であることを示す四菩薩を脇士とする、いわゆる「一尊四士」像の造立は辛うじて容認された」(同書, p. 82)この表現はまことにえげつなく、国によっては釈迦の仏像は許される、日興上人はそれを許しているという意味にとれるように書かれています。

一大秘法を御本尊とすると、釈迦の仏像の余地がなくなりますが、題目にすることで、釈迦の仏像を本尊とする余地が生まれるということです。身延と全く同様のことが可能になります。そして、これへの破折は、「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり云云」(御議口伝下、旧御書, p. 760)の御文です。

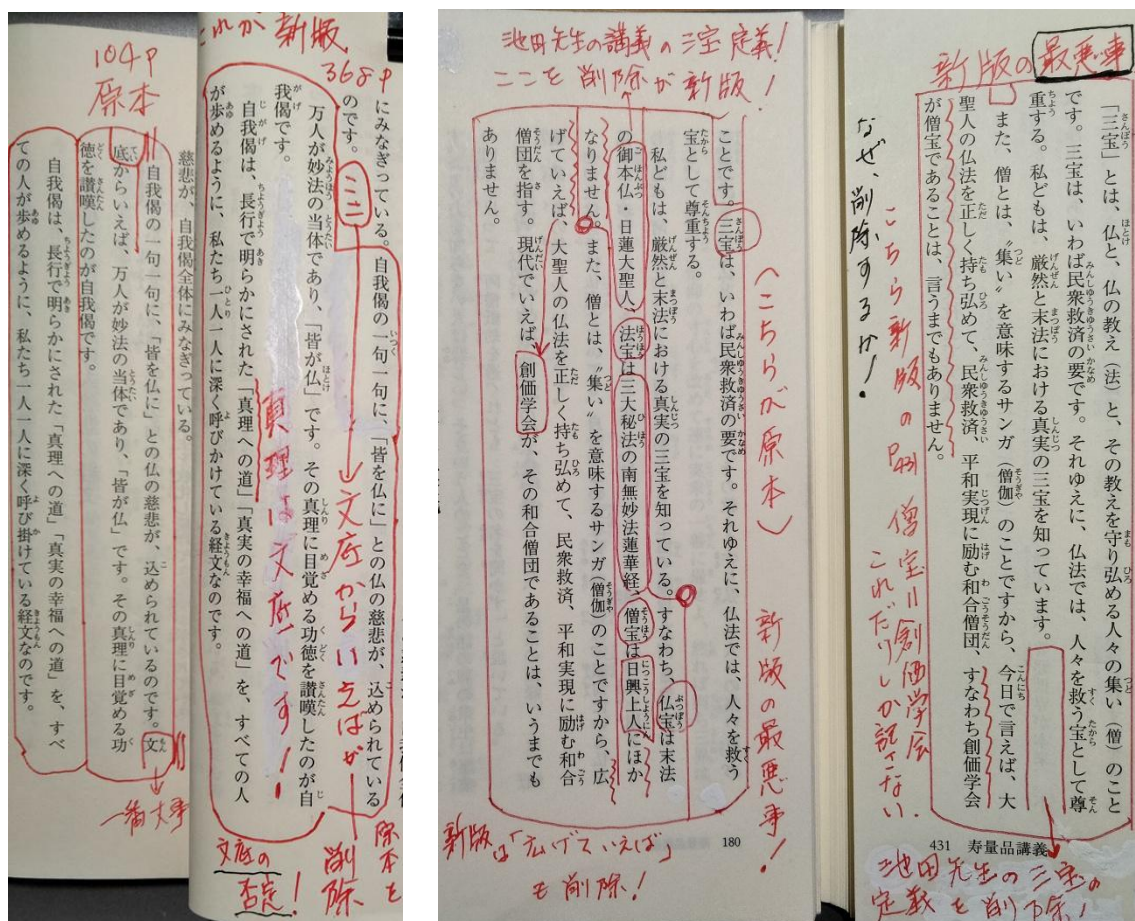
南無妙法蓮華經即大聖人という人法一箇を表しています。今の首脳部は都合が悪いので、この御文を完全に無視しています。よって、決して今後も大白蓮華に載ることはないでしょう。しかしこれは「本門の教主釈尊を本尊とすべし」報恩抄、と全く同じ意味です。そしてこの釈迦とはインドの釈迦ではなく、日本国に出現した釈迦でなければなりません。

日興上人の弟子は、次のような言葉を残しています。「**此の日本国は久成の上行菩薩の顯れ玉ふべきなり、然るに天竺の仏は迹仏なり、今日本国に顯れ玉ふべき釈迦は**本仏**なり、彼の**本仏**の顯し玉ふ所なれば日本を中国と云ふなり**」(日順雜集『富士宗学要集』第2巻)。

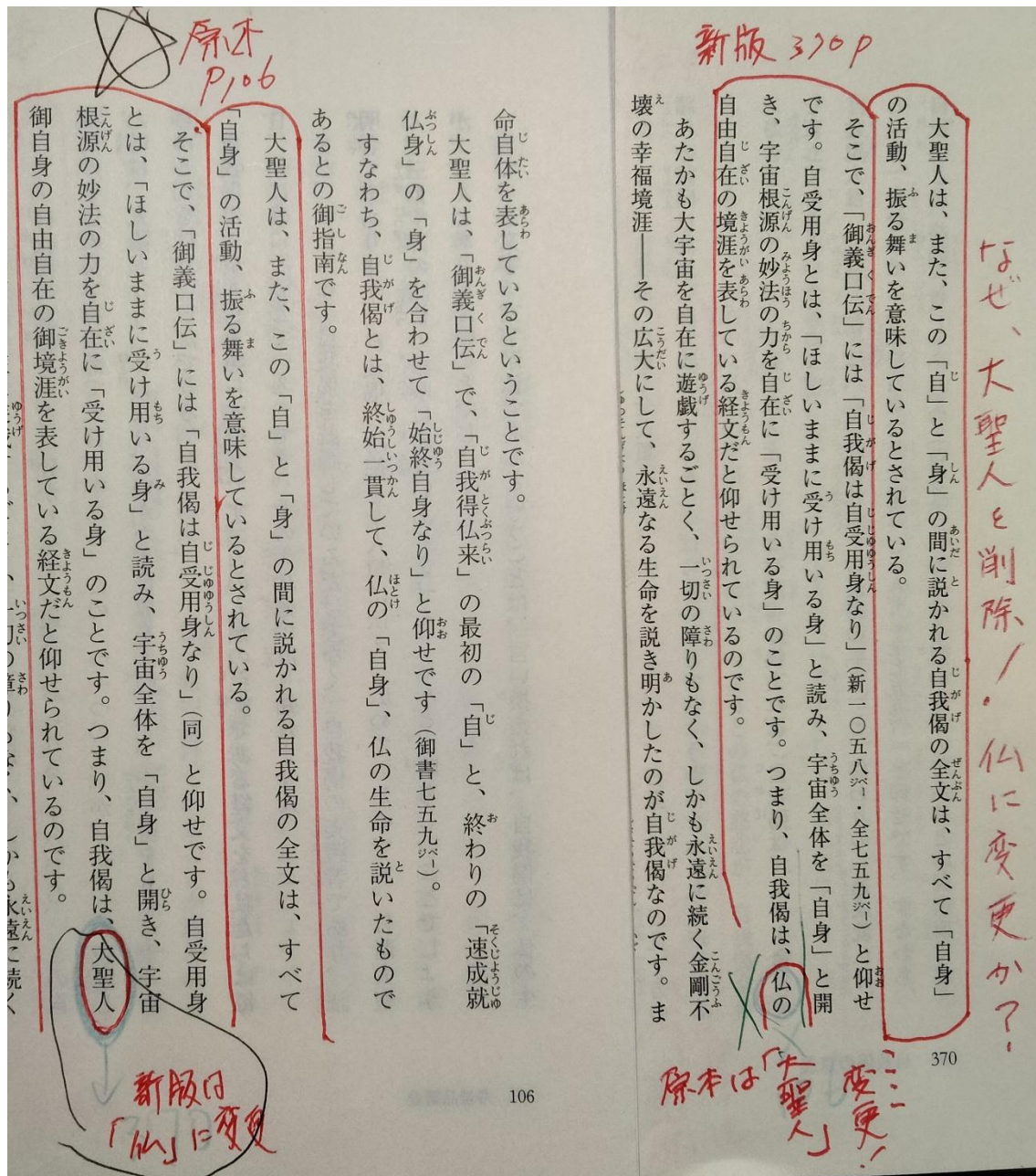
「帰命する対境には、「人」と「法」がある。「人」とは、**文底の釈尊であり、人本尊である日蓮大聖人**です」(新・人間革命6巻、若鷲の章, p. 339)一方で教学要綱は、本尊即脇士、脇士即本尊というご都合主義の解釈に陥っており、結局のところは五大部の人本尊を説いた御文、「本門の教主釈尊を本尊とすべし」報恩抄に矛盾して潰れている、ということがいえるのです—と。

まさに、的を射る論証です。

5. 1月2日に記した池田先生の「方便品・寿量品講義」の削除、改竄30カ所が現在までに75数カ所も確認出来たので、「御義口伝講義」他への、近刊教学本の削除、改竄の指摘と、追加論考を含め一つにまとめ再掲載します。



上記は削除の典型例。左：寿量品2「講義」104頁の「文底から言えば」が「新刊」368頁で削除。右：同「講義」180頁、池田先生の三宝についてのご指導が完全削除！「僧宝が創価学会」だけ！つまり、改竄そのもの！



同じく、寿量品2「講義」106頁の一自我偈は、**大聖人御自身**の自由自在の御境涯を表している経文だと仰せられているのです—と自我偈の最重要の意義を、池田先生がご指導なのに、「新版」370頁では一自我偈は、仏の自由自在の御境涯—へと変更！なぜ、日蓮大聖人を一般的な仏に格下げするのか！

まず、池田先生の「法華経 方便品・寿量品講義」1－3（以下「講義」と略）を、「新版 法華経 方便品・自我偈講義」（以下「新版」と略）が75カ所、削除、変更、改竄している実態を記します。

池田先生の『法華経 方便品・寿量品講義』1方便品と、「新版」との比較

1.「講義」15頁には一日淳上人は、牧口先生を「生来仏のつかい」と讃嘆され、戸田先生を「地涌の菩薩の先達」と称えていましたと。しかし、「新版」20頁では上記が削除。

（私見）「新版」は、これ以降、全編で池田先生が宗門について記された重要な論述を削除、それは宗門の全面的な否定の思惑としか思えない。牧口・戸田・池田の三代の会長は、宗門の清流、すなわち**日興門流の正義を三代会長は認められ**、宗門また、代々の法主との良好な関係と逸話を記し残された意義は大変重要なことなのである。

結論、日蓮仏法の正義、清流たる日興、日寛上人の教学の正統部分は、今も学会教学の基盤であることをまずは認識すべきだ。また、この後に、池田先生が記述された日顕宗の腐敗、墮落への破邪顕正の歴史をも削除することは、「教学要綱」の底意である、宗門教学の良否をいっしょくたにして排除する偏向性と同じである。

2.「講義」17頁には一小題「万人に開かれた文底仏法」のところで、一日蓮大聖人が法華経を読まれるのは、**釈尊が説いた法華経をそのまま読むのではなくて**、末法の御本仏という御境涯で『予が読むところの述門』『予が内証の寿量品』とおおせられ、**文底からの読み方**なのであります（『戸田城聖全集』5）と。しかし、「新版」21頁では一戸田先生の引用を含め、最も重要なご指導が完全に削除。

（私見）この**赤字**を含む論述は池田先生の講義の一番大事な一節です。これを削除してどうするのか！

3.「講義」18頁には一大聖人が命を賭して弘められたのが、法華経の精髓である「末法の法華経」「**文底の法華経**」—南無妙法蓮華経です—と。しかし、「新版」22頁では「文底の法華経」が削除。

（私見）この「**文底の法華経**」を外したら、池田先生の講義の真髓がない。先生の講義とは全く乖離した作文！まさに、「新版」は画竜点睛を欠き、池田先生への背信だ！

4. 同18頁には一小題「文底とは大智慧の活釈・民衆訳」のところに一私どもが勤行の際に方便品・寿量品を読むのは、**正像時代の法華経ではなく、大聖人の南無妙法蓮華経の立場から**読んでいるわけですからと。しかし、「新版」22頁では、小題も含めて完全削除。（私見）この最重要義を削除することも、池田先生の講義への完全なる違背行為！

5.「講義」19頁にある池田先生の下記が、「**新版**」23頁では**完全削除**。

一(万人に大きく開かれ、時代・社会に生き生きと脈動していくところにこそ文底仏法の真価があるのです。に続き)、一この点で転倒したのが日顕宗です。文底仏法の教えを悪用し、権威の殻に包んでしまった。僧侶や寺院を特権化し、御本尊を民衆支配の道具にした。自分たちは満足な修行もせず、遊湯にふけり、人間としての根っこを腐らせてしまった。恐ろしいことです。大聖人の御精神を殺してしまいました。一と。

(私見)池田先生の、この重要な破邪顕正の歴史を記し置かれた文を、削除しては絶対にならない。結論、宗門と宗門教学の腐敗、墮落は日顕宗に極まったのであり、今の学会教学は、三代会長が厳護された日蓮仏法の正義である日興門流の清流に戻ったのだと拝しております。しかし、「新版」は、その正義、清流である日興門流までも宗門教学だと、いっしょくたにして無視、排除している。偏向性だ。

6.「講義」20頁には一小題「読誦する功德」のところに一この「正行」(勤行の際に南無妙法蓮華經と唱えること)と「助行」(方便品・寿量品の読誦)の関係について日寛上人は、米やソバを食べる(正行)時に、塩や酢が調味料として使われて味を助ける(助行)ことに譬えておられる(六卷抄一九三ページ)。「正行」の功德は広大です。そのうえで、「助行」は「正行」の功力を増し、促進する助縁の働きをもっている一と。**しかし、「新版」23頁では上記が完全に削除**。

(私見)勤行の本義について、これほど分かり易い日寛上人のたとえ話を、何故、削除するのか！

7.「講義」22頁～23頁には一小題「方便品・寿量品は二十八品の根幹」のところに一ただし、当然のことながら、私たちが読誦している方便品・寿量品は、先にも述べたように、大聖人の**文底**の立場から見た法華經です。日寛上人は次のように説明しています。すなわち方便品を読むのは「所破・借文」のため、寿量品を読むのは「所破・所用」のためである、とされています(六卷抄一九四ページ、二〇一ページ)。簡潔に言うと、大聖人の仏法の立場から、「**釈尊の法華經は末法には功力がない**」と破折する**読み方が「所破」です**。そして、「法華經が御本尊の偉大さを証明している」として讃嘆する読み方が「借文」と「所用」にあたります。なぜ、こう説明されるかについては厳密な論議がありますが、ここでは、私たちの方便品・寿量品読誦は、あくまで大聖人の立場から法華經を読誦していることを確認しておくにとどめたい。**しかし、「新刊」25頁では、上記が完全に削除**。

(私見)この「**釈尊の法華經は末法には功力がない**」と破折する読み方である「所破」こそが、池田先生の「方便品講義」における最重要のご指導です。それを削除する「新版」は、これまた、画竜点睛を欠くと断言する。

8. 7で「講義」の23頁を引用しましたが、その途中の(注2)の全文(「講義」の29頁に別掲載)が「**新版**」29頁では完全削除。それは、次の重要な文です。

一日寛上人は「当流行事抄」で、方便品の読誦には所破・借文の二義があり、寿量品の読誦には所破・所用の二義があることを示されている。方便品の借文＝方便品の諸法実相・十如是等の文で示されている一念三千の法門は、本門寿量品で仏の久遠の本地、仏の本国土が明かされてはじめて成就する。それ故、方便品の文を借りて、本門で成就する実義(その元意は寿量文底の法義)を顕わすのである。**寿量品の所用＝寿量品には、「我本行菩薩道」の本因初住の文の底に下種の大法が秘沈されている。**寿量品の読誦は、その法義が秘沈されている文を用いていくので、所用となるのである。一と。

(私見)この、日寛上人の「当流行事抄」の引用文は、方便品・寿量品の読誦の意義を示した非常に重要な論証であります。これを「新版」は完全削除。それは、日寛教学を無視する態度であり、底意が「教学要綱」と同じ偏向性だ。

9. 「講義」41, 42頁には—37頁の「妙法蓮華經方便品第二 **爾時世尊**。從三昧。安詳而起。告舍利弗。諸仏智慧。甚深無量。其智慧門。難解難入。一切声聞。辟支仏。所不能知」の講義—「時」の重要性について大聖人は「仏法を学ぶには、まず、時をならうべきである」(御書256頁、趣意)と指摘 (中略)文底仏法からいえば、「爾の時」とは、「御本仏・日蓮大聖人が、全人類を救う大闘争を開始された時」と読むことができます一と。しかし「新版」40頁では—「爾の時」とは、「末法の御本仏・日蓮大聖人が全人類を救う大闘争を開始された時」と読むことができます一に変更。

(私見)なぜ、御本仏の前に「末法の」との期間限定の記述をあえて付け足すのか？これは久遠元初自受用身如来、即ち、永遠の仏である日蓮大聖人を、末法の期間限定の仏とする底意の結果なのです！その後もずっとこの記述！

10. 「講義」50頁には—なにものにも崩れない幸福の大道を歩ませる。それが法華經の目的です。大聖人も「**心の財第一なり**」(御書一一七三頁)と仰せです一と。しかし、「新版」47頁では、この御書の御文を削除。

(私見)なぜ、池田先生が引用の、これほど重要な御書の御文を削除するのだ！

11. 「講義」74頁には—小題「御本仏に連なる誉れ」とあります。しかし、「新版」68頁では、この小題が「末法の御本仏に連なる誉れ」に変更。

(私見)9と同じく「末法の」と、期間限定付きの仏にしている。

12.「講義」75頁にも一法華經ゆえの名こそ最高の誉れです。御本仏・日蓮大聖人に連なった者の名前は、永遠に薫り榮えます—と。しかし「新刊」69頁では一末法の御本仏・日蓮大聖人に変更。(私見)ずっと、末法のと、期間限定の仏にし続けている。

13.「講義」76頁には一小題として「万人が妙法の当体」—と。しかし「新版」70頁ではこの小題が、完全削除。

(私見)「万人が妙法の当体」は、結論、日蓮仏法の奥義である人法一箇の御本尊から導かれた人間の尊厳を、池田先生が称えた獅子吼と拝します。それを削除なのです！こんな「新刊」は、池田先生への背信だ！

14.「講義」77頁には一小題として「大聖人は『未曾有の御本尊』を御建立」—と。しかし「新版」では—「大聖人は『未曾有の御本尊』を御図顕」に変更。また、その後「講義」には一日顕宗の権威主義は、法華經の心が何もわかっていない証拠なのです—と。しかし、「新版」71頁では上記、池田先生の日顕宗に対する破折を削除。(私見)なぜ、池田先生の日顕宗への破邪顕正の獅子吼を削除するのか！不信でいっぱいです。一番大事なことを削除だ！

15.「講義」77頁には一日顕宗の権威主義は、法華經の心が何もわかっていない証拠なのです。(中略)日蓮大聖人は、様々な御書で、三大秘法の御本尊を「未曾有の大曼荼羅」と仰せです—と。しかし、「新版」71頁では一上記、日顕宗の権威主義は、法華經の心が何もわかっていない証拠なのです—が削除、また、三大秘法の御本尊が、南無妙法蓮華經の御本尊へと変更。

(私見)これも、池田先生が広布の破邪顕正の歴史として、日顕宗の墮落を明確に残されたことへの無視、違背である。池田先生は、広布史において何が間違いであり、何が正義であるかの判別を明確にして下さっているのに、これを削除では、まるで宗門の全てが現在および、今後の学会にとっては過去の不要物として葬り去るが如きに述べている「教学要綱」の偏向性と同じだ。また、「三大秘法の御本尊」を削除して「南無妙法蓮華經の御本尊」への変更は、なぜなのか！理由を示せ。

16.「講義」の 80 頁にある表題—大聖人の「意趣」を学会が実践—を、「新版」74頁では、—「講義」の次の表題である—仏の智慧は慈悲から生まれる—に含めてしまい、その表題の中で仏について—釈尊の智慧—に変更。 4/45

(私見)こんな酷い変更—「大聖人」の表題を削除して、その論述を「仏＝釈尊」としていのです。まさに、これこそが改竄であり、騙し以外の何でしょうか！池田先生が、「講義」で引用の御文—「宜しきに随って説きたもう所、意趣解し難し」—を、表題として—大聖人の「意趣」を学会が実践—とされたのに、それを変更して用いないのは、先生への裏切りです。酷い一言です。 65/124

17.「講義」84頁には一大聖人の滅後にあっても、**日興上人がただ御一人立ち上がられたゆえに、大聖人の正義が護られたのです。**日興上人が沈黙されたならば、「五老僧が正義」との歴史ができてしまったでしょう。ゆえに、日興上人は厳格なまでに、五老僧の邪義を打ち破られたのです。五老僧は、大聖人の「意趣」、つまり御本仏の御真意が分からなかった。大聖人の「意趣」とは、三大秘法の御本尊を広宣流布し、末法の全民衆を幸福にするということに尽きる。

五老僧は、この三大秘法を顕された大聖人の御心を見失ってしまった。日興上人ただ御一人が、大聖人に常随給仕され、ともに難を忍ばれ、師の仰せのままに果敢に弘教を展開された。師と共に心を合わせて戦ったがゆえに、大聖人の「意趣」が分かったのです。

「師の心」が正しく伝わったかどうかは、「弟子の行動」を見れば、分かるものです。いくら三大秘法を持っていると自称しても、万人の幸福を願う広宣流布への行動がなければ、大聖人の「意趣」を見失った姿であると断ずる以外にない。一と。しかし、「新刊」77頁では、上記が完全削除。

(私見)池田先生が五老僧を断罪されたこのご指導を、「新刊」は削除した！これは、「新刊」の極悪さ、邪義を象徴だ！日興門流を完全に否定なのが「新刊」なのだ！

18.「講義」128には一戸田先生は**文底の立場から、この方便品の文が「御本尊の境涯」を説いていることを教えられました。**一南無妙法蓮華經の境涯は、法華經迹門の仏とは天地雲泥ほどの恐ろしい違いがある。我々は、なんの苦勞もなく「無上の宝聚を求めずして自ずから得た」のだ一と。しかし、「新版」111頁では、上記一**文底の立場から、この方便品の文が「御本尊の境涯」を説いていることを教えられました**一が削除され、一戸田先生は、こう教えられました。一だけ。

(私見)戸田先生が「御本尊の境涯」をご指導なのです。それを削除したことは、「新版」にはその存在価値がない！

19. 18で「講義」128頁の削除を指摘しましたが、実は、その引用の最後に(注 1)が記してあり、その内容紹介が「講義」142 頁にあり、以下です。一**「無上の宝聚」とは仏の生命のことであり、日蓮大聖人は南無妙法蓮華經の御本尊として顕わされた一と。**しかし、「新版」122 頁では、赤字が完全に削除。

(私見)池田先生の御本尊のご指導を完全削除。「新刊」は、一体何を目的としているのか！としか言えない。池田先生への背信以外の何ものでもない！

『法華經 方便品・寿量品講義』 2 寿量品1と、「新版」との比較

20.「講義」13頁には一ゆえに大聖人は「妙法蓮華經こそ本仏」(1358頁)であると述べられています。そして、この文底の立場から「如来寿量品」の「如来」とは「南無妙法蓮華經如来」、すなわち大聖人御自身であると宣言されているのです。しかし、「新版」176頁では一「如来寿量品」の「如来」とは「南無妙法蓮華經如来」、すなわち南無妙法蓮華經と一体の仏の生命のことであると宣言—に変更。

(私見)一体の仏の生命？これでは、日蓮大聖人は、別に存在する仏になったのか？こんな言い方を、池田先生がご指導されたか！酷い改竄だ。

21.「講義」14頁には一寿量品には、釈尊が入滅した後においても全人類を救済できる大法が説き残されている。それが寿量品の文底に秘沈された南無妙法蓮華經一と。しかし、「新版」177頁では、一大法が説き残されている。それが、法華經の肝心であり、寿量品文底の南無妙法蓮華經—に変更。(肝心を追記、秘沈を削除！)

(私見)「講義」の秘沈を削除、肝心をわざわざ追記！なぜ、こんな作為、改竄をするのか？池田先生の原本を冒読している。

22.「講義」16頁には一小題「だれが末法に弘めるか」のところに一日蓮大聖人は地涌の菩薩の上首・上行菩薩の再誕として末法の民衆を救うために寿量品の文底に秘沈された南無妙法蓮華經を御自身の魂とし、その御生命を御本尊として顕されたのです。しかし、「新版」179頁では、一小題を削除。そして、日蓮大聖人は、自らが地涌の菩薩の上首・上行菩薩に当たるとの御自覚から—に変更。

(私見)寿量品に入った途端、「新版」は日蓮大聖人に対し、「上行菩薩に当たるとの御自覚」と変更し、以後、この解釈の繰り返し。これは、池田先生のご教示上行菩薩の再誕ではない！先生への背信！

23.「新版」の184頁では—今や、地球上を題目が包む時代になりました。—と追記。
しかし、元の「講義」23頁にはこの文言はありません。

24.「講義」25. 26頁には一小題「寿量品の題号の意義」のところに一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經を御自身の御生命に所持されていた。そして、ひとまず上行菩薩の再誕としてのお姿をあらわし、この妙法を末法の衆生のために弘められたのです。このゆえに、大聖人は寿量品の題号を「身に当る大事」とされたのです。—と。しかし、「新版」186頁では一日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經と一体となられた。そして、上行菩薩としての自覚を示され—に変更。

(私見)池田先生のご指導「日蓮大聖人は、この南無妙法蓮華經を御自身の御生命に所持、また、ひとまず上行菩薩の再誕」とご指導なのです！それをなぜ、「一体」などと、改竄するのか！

25.「講義」26頁には一小題『南無妙法蓮華經如来の功德を量る』の義」とあり、この南無妙法蓮華經如来の右横に、添え書きとして「日蓮大聖人」と。しかし、「新版」186頁では一小題の横には何も記さない！つまり、「講義」で添え書きされた「日蓮大聖人」を削除！！

(私見)なぜ、「日蓮大聖人」を削除する必要があるのか！池田先生は原本の「講義」で、南無妙法蓮華經如来＝日蓮大聖人と明示、ご指導されているのに、「新版」は、なぜ、池田先生に背くのか！全く理解できない！こんな改竄を許してはならない！

26.「講義」27頁には「三身」の徳を一身に具える真実の常住の仏は、久遠実成の釈尊であると説き明かしている。これに対して、**文底では**、三身常住の仏の功德の根源が、南無妙法蓮華經であるととらえます。久遠実成の仏の具える功德は、すべて南無妙法蓮華經に帰するのですと。しかし、「新刊」187頁では「文底では」が削除、「日蓮仏法では」に変更。

(私見)ここの文脈は、天台と寿量品との比較なのであって、いきなり、変更の「日蓮仏法では」では、おかしいのです。ここは、その前に、寿量品の文底では、と記された池田先生の講義通りにしなければ、理論の飛躍なのです！

27.「講義」28頁には一小題「南無妙法蓮華經の功德を量る」のところに戸田先生も「ここに南無という二字をおつけになっただけで、如来という二文字の読み方が、ぜんぜん変わってくる」(『戸田城聖全集』5)と強調されていた。寿量品の題号を「南無妙法蓮華經如来寿量品」と読むとき、**文底の仏である**「南無妙法蓮華經如来」の功德を量る” という意味になるのですと。しかし、「新刊」187頁では「**文底の仏である**」を削除。
(私見)「新刊」は、とにかく、池田先生がご指導された文底を削除することばかり！

28.「講義」28頁の続きには一大聖人が「此の品の題目は日蓮が身に当る大事なり」と仰せになっているのも、御自身が**文底の**南無妙法蓮華經如来」であられるからですと。しかし、「新版」187頁では「御自身が(**文底の**-を削除して)「南無妙法蓮華經と一体だからです」に変更。(私見)ここでも、「一体だからです」に、改竄！

29.「講義」28頁の続きには「また、この**文底の仏**を「無作の三身」とも言います。しかし、「新版」187頁では「また、ありのままの仏である「**末法の仏**」を「無作の三身」とも言います」に変更。

(私見)文底の仏を、なぜ、「ありのままの仏」に改竄するのか！池田先生のご指導で「ありのままの仏」とは、聞いたことがない！

30.「講義」31頁には一小題「本門と迹門」のところに一迹門と本門の関係は、例えてい
えば、迹門は「天の月が水に映った影(水月)」であり、本門は「本体である天月」にあた
る。なお、文底の立場からいえば、日蓮大聖人が御本仏であり、久遠実成の釈尊も迹
仏となる一と。しかし、「新版」190頁では、この赤字の根本義「なお、文底の立場から
いえば、日蓮大聖人が御本仏であり、久遠実成の釈尊も迹仏となる。」を完全削除。

(私見)この改竄も、最悪の改竄！日蓮大聖人様と釈迦の優劣をごまかしている！な
ぜ、大聖人が御本仏、釈尊は迹仏と認めないのか？

31.「講義」41頁には「三請不止」の部分を文底から読むならば、御本仏・日蓮大聖
人が、南無妙法蓮華経という、「仏の真実の語」を信解し、実践するよう、弟子たちに誠
められた経文といえます一と。しかし、「新版」195頁では「三請不止」の部分一を私た
ちの立場から読むならば一に変更。

(私見)池田先生が文底とご指導なのに、なぜ、一般論的な「私たちの立場から読むな
らば」に、敢えて、変更するのか！言葉を失う！

32.「講義」46頁には一小題「久遠とは『はたらかさず・つくろわず』」のところに「久
遠」について、大聖人は仰せです。「此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさ
ず・つくろわず・もとの儘と云う義なり」と。これは久遠の文底の意義です。これを文上の
久遠と分けて「久遠元初」ともいいます。この久遠の意味は、御文に仰せのように、“も
とのまま”ということですよ。しかし、「新刊」200頁では一上記の赤字を削除して、「久
遠」について、大聖人は仰せです。「此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさ
ず・つくろわず・もとの儘と云う義なり」と。この久遠の意味は御文に仰せのように“も
とのまま”ということです。一へ、削除と変更。(私見)久遠元初を削除している。池田先生
の久遠元初のご指導を久遠実成だけの狭義にしてのごまかしである！

33.「講義」51頁には一日蓮大聖人は御自身の南無妙法蓮華経如来の生命を御本尊
として顕されました。まさに、「如来秘密神通之力」とは、御本尊のことですよ。しかし、
「新版」204頁は「末法の御本仏・日蓮大聖人は、(御自身の削除)南無妙法蓮華経
(如来削除)と一体となったご自身の生命を御本尊として顕わされました。一に変更。

(私見)「新版」では、末法の御本仏と、期間限定の表現に変え、さらに、南無妙法蓮華
経と一体となった一と、日蓮大聖人を貶めている！そして、「御自身の」も「如来」も削
除！これは、単法の御本尊にしているわけで、大聖人様への言語道断の背信！

34.「講義」52頁には―したがって、文底から見れば、「如来秘密神通の力を聴け」とは、「これから御本尊の仏力、法力を説くので、聴きなさい」ということです―と。しかし、「新版」204では―したがって、私たちの信仰実践では、「如来秘密神通の力」とは、「御本尊の仏力、法力」と拝していくことです―に変更。

(私見)池田先生が、文底から見ればとご指導なのに、無視して改竄！全てが、この通り、先生への背信。

35.「講義」61頁には―小題「久遠元初とは”生命根源の時”」のところで―大聖人は、御自身の生命に具わっているこの成仏の根本法が南無妙法蓮華経であり、御自身が南無妙法蓮華経如来であると明確にお説きになり、その大生命を御本尊として顕されて、末法の一切の人々に与えてくださったのです―と。しかし、「新版」211～212頁では―大聖人は、御自身の生命に具わっているこの成仏の根本法が南無妙法蓮華経であり、さらに御自身が南無妙法蓮華経と一体であると明確にお説きになり、その大生命を御本尊として顕されて末法の一切の人々に与えてくださったのです―と「如来」を削除して変更。

(私見)こんな酷い作為的変更！削除に、ただただ啞然！そして、どうしてこれほど日蓮大聖人の本義と池田先生の本当のご指導を改竄するのか！怒り心頭！

36.そして、同頁には―「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、十界常住の南無妙法蓮華経の御本尊です。「実成」とは、私たち一人一人の内に具わっている御本尊が現れ、その功德が開かれてくるということです。これが文底の久遠実成です。これを文上の久遠実成と明確に区別してそして、「久遠元初」とも言うのです―と。しかし、「新版」212頁では―「久遠」とは十界具足の常住の生命のことであり、それは「永遠の法」である南無妙法蓮華経と一体です。「実成」とは、私たち一人一人の内に具わる南無妙法蓮華経の働き、功德が、わが身に開かれ現れてくるということです。これが文底の久遠実成です。これを文上の久遠実成と明確に区別して「久遠元初」と表現することがあります。―に変更。

(私見)なぜ、御本尊を削除して、永遠の法である南無妙法蓮華経と一体に変更か？なぜ、それほどまでに御本尊様を消したいのか？そして、永遠の法、つまり単法に貶めたいのか！また、「久遠元初」と表現することがあります？これでは、池田先生のご指導への冒瀆だ！

37.さらに、同頁には―「久遠元初」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すというだけではありません。その本義から言えば、久遠元初とは、いわば“生命の根源の時”です―と。しかし、「新刊」212頁では―「久遠元初」は、無始無終であり、単に文上の五百塵点劫の久遠よりもさらに前を指すということではありません―に変更。

(私見)この表現は、正反対のことを言っているのです！！池田先生は「講義」で久遠元初の本義をご指導なのに、「新版」はその真逆、否定なのです！これは、気を付けて読まないと気付かない！これこそが、詭弁だ！

38.「講義」の65～66頁には—「開目抄」に「日蓮といひし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて」——日蓮と言っていた者は去年(文永八年)九月十二日の子丑の時(夜半すぎ)に凡身の頸を刎ねられた。これは、魂魄が佐渡の国に至ったのである—と。この一節について、日寛上人は次のように述べられている。—「この文の元意は、蓮祖大聖は名字凡夫の御身の当体、全くこれ久遠元初の自受用身と成り給い、内証真身の成道を唱え、末法下種の本仏と顕れたまう明文なり」(「開目抄文段」第三十八段)と。すなわち、凡夫の身のうえに久遠元初の自受用身の生命を顕された—これが、大聖人の「発迹顕本」です。大聖人の御内証の本地—それは、久遠元初の自受用身であられる。自受用身とは「ほしいままにうけもちいるみ」(御書759頁)です—と。しかし、「新版」216頁では—上記の赤字下線が完全に削除、その後—すなわち、凡夫の身のうえに久遠元初の根源の仏の生命を顕わされた——これが、大聖人の「発迹顕本」です。大聖人は、根源の妙法の力用を自由自在に受け用いる宇宙大の境涯を示されたのです。—に変更。

(私見)なぜ、日寛上人の大聖人についての根本義を削除なのか！とくに、[全くこれ久遠元初の自受用身]を、なぜ、削除するのか！「新刊」は池田先生への背信行為！

39.「講義」の66頁にある名字凡夫(注2)と内証真身(注3)の詳述が73頁に—名字凡夫とは一初めて正法を聞いて仏道修行を始めた位である名字即にいる凡夫—と。また、内証真身とは一内に持っている悟りの境地、真実の姿—と。しかし、「新版」216頁ではこれが全部削除。(私見)この二つの思想こそ日蓮仏法の根本です。これを削除とは、これまた、言語道断！

40.「講義」81には—小題「菩薩の智慧も及ばぬ仏の永遠の大生命」—と。しかし、「新刊」226頁では、この小題が削除。

(私見)池田先生が寿量品の最重要義についての論述をされる中で用いられたこの小題を、「新版」はなぜ、削除なのか！

41.「講義」82頁には—小題「わが“境涯の大宇宙”を見よ」—と。しかし、「新刊」227頁では、新たな小題「広大な境涯を開く随自意の譬喩」に変更。

(私見)なぜ、池田先生の付けられた小題を勝手に変更するのか！これでは、先生の思い、ご指導が削除と同じだ！

42.「講義」86頁には一小題「五百塵点劫は始成の成仏觀を打破」のところで—大聖人は「觀心本尊抄」で、妙法を受持するわれらの「己心の釈尊」は、「無始の古仏」であると仰せです(御書二四七ページ)。この文底の趣旨を明らかにしたのが「久遠元初」です。「久遠元初」とは、生命の本源、大宇宙の本源という意味です。その本源の生命こそ久遠元初自受用身如来の生命であり、即南無妙法蓮華經です。「久遠とは南無妙法蓮華經なり」(御書759頁)と仰せです—と。しかし、「新版」231頁では—上述の赤字下線が完全削除。

(私見)「久遠元初」が、完全削除!「新刊」に存在価値はない!

43.「講義」93頁には一小題「この世界こそ、わが使命の仏国土」のところで—文底から言えば、この”舞台”で活躍するのは、久遠実成の釈尊だけではありません。すでに述べたように、久遠実成を“元初の生命に立ち返ること”と、とらえるのが、文底の意です—と。しかし、「新版」237頁では、小題の後にあるべき上記が完全削除。

(私見)池田先生が、これほど丁寧に文底をご指導なのに、それを削除!言葉を失う!

44.「講義」106頁には一表題「正しき生命觀」の指導者を時代は待望—として、以下の池田先生の御指導があります。しかし、それが「新版」370頁では、表題ごと完全削除。—苦しんでいる人を見たら、応じて立ち上がるのが仏の慈悲です。創価学会の実践の根底には、この慈悲の心がある。人の苦悩に同苦する心がある。だからこそ、真剣さが生まれ、智慧がわき、行動となり、発展があったのです。このことは絶対に忘れてはならない。また、戸田先生は「人々が仏を感じる、指導者を欲する、それに応じて仏が出現する」と語っておられた。仏は、深き生命觀を体現した真の指導者です。人生にも社会にも文明にも、行き詰まりがあります。この行き詰まりを開くのは、生命への深い洞察に根ざした哲学です。哲学なき時代の人々の心はさまよっている。—「このままでよいのか。しかし、どうしたらよいか分からない」「幸せになりたい。しかし、何が幸せなのか」と。広く言えば、この声なき声こそ、仏を感じ、呼び求める声です。私たちは、仏にならい、このような現代人の声に応じて立ち上がり、正義の対話の渦を巻き起こしてまいりましょう—と。(私見)戸田先生のご指導まで削除!これでは「新刊」の存在価値はない!

45.「講義」109～110頁にある小題「仏法は最高の「健康」「長寿」の法」の以下の文章があります。—御本尊への信心を根本として、人々の幸福のために祈り、動き、語る—そのリズム正しい繰り返しこそ、わが生命・生活を「長寿へ」「健康へ」「幸福へ」と向かわせるのです。私が以前、人生を健康で生きぬくために提案した次の“四つのモットー”も、この信心即生活のリズムを分かりやすく述べたものです。①張りのある勤行②無理と無駄のない生活③献身の行動④教養のある食生活、の四項目—。いわば信心は、最高の「健康の法」「長寿の法」でもあるのです。 72/124

以上の経文を**文底の立場から**読めば次のように言えます。まず「我が所に来至する」一仏の前に衆生が集うことは、**文底から**いえば、御本尊の前に私たちが端座することです。仏は、衆生の機根を見て、それぞれの状態に応じて法を説く—末法で言えば、万人を救済する**日蓮大聖人の慈悲の御振る舞い**です。戸田先生は、この経文について、**御本尊**が、われわれの信心などを観じ、大きな慈悲を下さるのであると述べられました。「諸根利鈍」とは、私たちの立場で言えば、信心の厚薄といえる。信心が深まれば深まるほど、**御本尊**の無量の功力を顕わすことができるのです—と。しかし、「新版」248頁では、小題も上記全文も削除。

(私見)この、池田先生のご指導こそが方便品・寿量品講義の枢要ではないですか！ここには、人間にとって一番大事な健康について、**御本尊**の素晴らしさを、**文底**からご指導なのです。それをなぜ、削除なのか！「新版」の発刊意味がない！

46.「講義」136頁には一文底から言えば、「如実知見」している「**如来**」とは**日蓮大聖人**です。**大聖人こそ**、久遠元初から常住する慈悲と智慧の生命—寿量品の**文底に秘沈されている南無妙法蓮華經の大生命の当体**なのです。そして、私たちが拝する御本尊は、大聖人の慈悲と智慧の御生命そのものです—と。しかし「新版」268頁では**寿量品の根本義**である上記が完全削除。(私見)御本尊の真義を削除！言語道断！

47.「講義」143頁にある一小題の「一身即三身・三身即一身」の仏とは日蓮大聖人—のところで、一文底から言えば「一身即三身・三身即一身」の仏とは、南無妙法蓮華經**如来**すなわち日蓮大聖人です—と。しかし、「新版」274頁では、ここでも、小題も含め上記が完全削除。(私見)これも、言語道断！

先生の『法華經 方便品・寿量品講義』 完 3寿量品—2と、「新版」との比較

* 以下、48～75の全ては最悪の変更。寿量品の根本義の完全否定です！

48.「講義」20頁から22頁の、小題である「**末法の本尊は「本因妙の釈尊」＝大聖人**—と、全文の記述があります。(以下に掲載)しかし、「新版」297頁では小題が消去され、その後一本因妙の心は、“人間の尊厳を開く実践”にあります。このことを端的に示しているのが寿量品の「我本行菩薩道」の文です。—これだけ。池田先生の「講義」に記載の、以下全文を完全削除。

—「我」とは、先に述べたように、久遠において菩薩道を実践した「**凡夫の釈尊**」です。われわれと同じ人間です。決して人間を超えた何者かではない。久遠とは生命の本源であり、生命の本源に立ち返った久遠の凡夫が「**本因妙の釈尊**」です。 73/124

この「**本因妙の釈尊**」を本尊とするのが、大聖人の仏法なのです。久遠における「**本因妙の釈尊**」は、すなわち末法の御本仏日蓮大聖人であられる。久遠即末法です。このことは大聖人の次の仰せから明らかです。「今日蓮が修行は久遠名字の振舞に芥爾計も違わざるなり」「久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり」（御書863, 864頁）すなわち”今、末法における日蓮大聖人の修行は、久遠における名字凡夫の釈尊の修行と少しも変わることがない”と仰せです。

名字とは名字即のことで、妙法を信受する凡夫の位をいう。日寛上人も本因妙の釈尊即大聖人、久遠即末法と拝する理由について、行位全同——「行」と「位」がまったく同じだからである、とされている。（六卷抄八八ページ）「行」は修行であり、妙法受持の実践です。また「位」とは名字凡夫の位です。つまり行位全同とは、人間として妙法を受持しぬく実践が、久遠と末法ではまったく同じであるということです。妙法を受持する「人間としての実践」が妙であり、不可思議であるといえる。そこに、成仏の本因・本果、すなわち幸福の根本原理が具わるからです。それが本因妙です。それゆえ、末法においては、**本因妙の釈尊即日蓮大聖人を本尊と拝すべき**なのです。——と。

（私見）上記、池田先生の長文のご指導は、**如来寿量品第十六の最重要講義**です。それが完全削除。これは酷い！

49.「講義」45頁～46頁には一小題「末法では唱題こそ最高の善根」のところに——文底から読めば、この仏とは、**南無妙法蓮華經如来すなわち日蓮大聖人**であられることは言うまでもありません。また、「薄徳の人」とは末法の衆生のことです。大聖人は、末法のすべての衆生が「福德の人」となることを願い、方便として入滅されました。「如来難可得見」（仏にお会いすることは難しい）という道理を、御入滅によって末法の民衆に教えられたのです。そして、大聖人に、お会いすることのできないすべての民衆のために、**御自身の真実の境地である南無妙法蓮華經の大生命を御本尊として顕し、遺してください**のです。何と広大な、御本仏の大慈大悲でしょうか。したがって、「心に恋慕を懐き、仏を渴仰して、便ち善根を種ゆべし」とは、われわれ末法の衆生の姿と読むべきです。「恋慕」「渴仰」の心とは、御本尊への強き「信心」である。また「善根」とは、「御義口伝」に「**善根は題目なり**」とあるとおり、妙法を唱えることにほかなりません——と。**しかし、「新版」318頁では、上記の小題も含め、これまた寿量品の最重要講義が完全削除。**（私見）この文章は、池田先生の寿量品講義の枢要です。まさに、**人法一箇の最重要義**をご指導なのです。それを完全削除！これも言語道断！

50.「講義」58頁には一小題「希望の明日へ『変毒為薬の人生』を」とあり、59頁には一経文に説かれる「本心」とは、この妙法への「信心」にほかならない。大聖人は、「本心とは下種なり」（御書七五五頁）と仰せです。

すべての人は、久遠元初において妙法と結縁している。皆、本来、妙法の当体です。それを思い起こすのが「本心」であり、「信心」なのです。智慧にあふれる仏の生命を、そのまま示し顕されたのが、南無妙法蓮華經の御本尊です。この御本尊を信受することが、妙法という幸福の種子をわが生命に植えることになるのですと。しかし、「新版」328では一小題が「妙法を持ち抜く人が“本心を失わない人”」に変更され、さらに、上記の全文削除。

(私見) 池田先生が、皆、本来、妙法の当体とご指導なのです。それを削除する気がしれない！

51.「講義」68頁には― 表題で―色香美味とは「三大秘法」の御本尊―と。しかし、「新版」336頁では、この表題を完全削除して、新たな表題として、一末法における「大良薬」が南無妙法蓮華經―と変更。

(私見)「三大秘法」の御本尊を、なぜ削除か！言語道断！

52.「講義」69頁の一天台は、この「色香美味」を、仏教実践の基本となる戒定慧に当てはめ、色が戒、香が定、味が智慧であると説明しています。また、大聖人の仏法で言えば、色が本門の戒壇、香が本門の本尊、味が本門の題目に当たります。―しかし、「新版」337頁では天台の解釈だけ載せて、池田先生の大聖人様の仏法解釈を削除。

(私見) 上記、池田先生の赤字の大聖人の解釈を、なぜ削除なのか！

53.「講義」70頁にある池田先生の以下の長文―誰もが飲める(実践できる)ようにするか。これが「良医」としての仕事です。さて、子に薬草を飲ませる時、父は語ります。「この大薬は、色も香りも味も素晴らしいよ。みんな、飲みなさい。直ちに苦しみがなくなり、また、体が丈夫になるよ」と。文底から見れば、御本尊の功德が示されている一節です。御本尊は苦しんでいる人にとっては大良薬です。祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来たらざるなく、理として顕ざるなし、という大功德がそなわっています。―と。しかし、「新版」338頁では、上記の赤字が完全削除され、ただ―この大良薬とは、末法においては南無妙法蓮華經であることは言うまでもありません。―だけに変更。

(私見)「講義」で池田先生が表題で示された、「三大秘法」の御本尊が消されている。そして、「講義」では、大良薬は御本尊と言われているのに、「新版」では南無妙法蓮華經に変更です。これはおかしい。御本尊の真義は人法一箇です。それを「新版」では出たくないの、ただ単に、南無妙法蓮華經との「単法」のみでしか解釈しないのです。そして、「御本尊」の名称自体を削除なのです。これは、酷いです。

54.「講義」92頁には一大聖人御自身、一往・文上の御立場では、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩の再誕として妙法弘通に挑まれました。しかし、再往・文底では、大聖人こそ末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華經の「大良薬」を残された御本仏であられることは言うまでもありません。大聖人こそ、一切衆生の「父」であり、「良医」なのですーと。しかし、「新版」358頁では一「一往・文上の御立場では」と「再誕」の重要句を削除して一、大聖人御自身、この地涌の菩薩のリーダーである上行菩薩との御自覚で妙法弘通に挑まれました。(中略)さらに、「しかし、再往・文底では」を削除し、大聖人こそ、末法万年の民衆を救う南無妙法蓮華經の「大良薬」を残された御本仏と拝しています。まさしく、大聖人こそ、末法の一切衆生の「父」であり、「良医」なのですーに変更。
(私見)「新版」は「再誕・文底では」を削除したことで、日蓮大聖人を上行菩薩だけの立場に留めて、結果、本地である久遠元初の自受用身を否定し、単なる釈迦から法華經の委託をされた上行菩薩であるとするのです。つまり釈迦が上位であり、主人なのだとする大妄語をしているのです。池田先生は「講義」において法華經を尊重し、まずは文上通りに「良医」を釈尊であるとされ、その上で、法華經の文底に秘められた真意である久遠元初自受用身であられる人法一箇の日蓮大聖人のお立場が、末法限定ではない真実の「良医」であると論述を深化、展開されています。それに反し「新版」358頁は、終始一貫して、法華經文上からの解釈をしているのです。この詭弁を見極めるのは難しいです。こんな寿量品講義は大聖人様と三代会長に完全に違背だ！

55.「講義」93頁には一一往は地涌の菩薩として、再往は御本仏の本眷属として、最高の妙法を語り伝え、実証していく「如来の使い」。それが皆さま方の誉れある“位”なのですーと。しかし、「新版」358頁では一再往は末法の御本仏に変更。
(私見)「新刊」では、御本仏が末法の期間限定の御本仏に狭められている！酷い！

56.「講義」104には一自我偈の一句一句に、「皆を仏に」との仏の慈悲が、込められているのです。文底からいえば、万人が妙法の当体であり、「皆が仏」です。その真理に目覚める功德を讃嘆したのが自我偈ですーと。しかし、「新版」368頁では一上記の「文底からいえば」が削除。
(私見)池田先生は自我偈を文底からご指導なのです。それなのに、文底を削除！これまた、完全にアウト！

57.「講義」106頁にある一「御義口伝」には「自我偈は自受用身なり」(御書 759 頁)と仰せです。(中略)自我偈は、大聖人御自身の自由自在の御境涯を表している經文だと仰せられているのですーと。しかし、「新版」370頁では一自我偈は、仏の自由自在に変更。
(私見)何故、大聖人を、ただの仏に変更するのか。文上の仏にするのか？これでは、日蓮仏法ではない。

58.「講義」114頁には一阪神淡路大震災（一九九五年）から一年を越えました。あまりにも多くの尊い命が失われました。あまりにも多くの方々が苦しめられた。被災されたすべての皆さまに、復興に向けて懸命に戦っておられる皆さまのご苦勞に、胸奥より、深く深くお見舞い申し上げます。亡くなられた方々のことは毎日、真剣に追善させていただいております。これからも、回向してまいる決心です。関西魂は不滅です。兵庫、頑張れ！ 関西頑張れ！ 私は声を限りに叫びます。題目を送ります。送り続けます—と。しかし、「新版」 頁では上記が完全削除。
(私見)池田先生の慈悲のお心を削除！ 言語道断！

59.「講義」115頁には一戸田先生は、よく言われていました。「自我得仏来(我仏を得てよりこのかた)」を、すなわち釈尊が仏になってから、と読むのは“**文上**”であって、“**文底**”から拝するならば、もっと深い意味が説かれているのだ—と。しかし、「新版」376頁では一「我」すなわち釈尊が仏になってから、と読むのは一往の読み方であって、再往は、もっと深い意味が説かれているのだ—に変更。
(私見)池田先生がきちんと「**文上**」と「**文底**」と明示してご指導なのに、なぜ、それを「一往」と「再往」などに改竄するのか！

60.「講義」115頁には、続いて一即ち、**文上**の読み方では、この一句は、釈尊が始成正覺を破って久遠実成を明かし、ほとけの「永遠の生命」をせんげんした意義を再び説いたこととなります。しかし、**文底**から読むと、これは「本有無作三身」を教えられた經文になるのです—と。しかし、「新版」377頁では一經文上の読み方では、この一句は、釈尊が始成正覺を破って久遠実成を明かし、ほとけの「永遠の生命」をせんげんした意義を再び説いたこととなります。しかし、大聖人の仏法から読むと、これは「本有無作三身」を教えられた經文になるのです—に変更。
(私見)池田先生がきちんと「**文上**」と「**文底**」と明示してご指導なのに、なぜ、「經文上」と「大聖人の仏法から読むと」に改竄するのか？「**文上**」「**文底**」を忌避しているのか！

61.「講義」115～116頁には一「御義口伝」には“この一句は無作三身を習う文である”と仰せです。(御書七五六頁、趣意)「無作三身」という根源の仏の生命を説いた經文であり、それが私たちの生命にも久遠から具わっていることが示されている、と読むのが**文底**の意味なのです—と。しかし、「新版」377頁では一(前略)それが私たちの生命にも久遠から具わっていることが示されている、と読むのが經文の本義なのです—に変更。
(私見)池田先生がきちんと「**文底**」とご指導なのに、それをなぜ、わざわざ「と読むのが經文の本義」に改竄するのか！ 御義口伝は全て、大聖人が文底から相伝なのだ！

62.「講義」116頁には—**文底から言えば**、久遠に成仏した仏とは、九界から仏界に成った”仏ではなく、九界も仏界も”ともに得ている”仏である—と。しかし「新版」377頁では一文底から言えば、が削除。（私見）どこまで「文底」を削除するのか！

63.「講義」124頁には— **大座談会運動**—今、全国津々浦々に、庶民の語らいの花園が広がっています。座談会は、素晴らしき”生命の広場”です。**御本尊**を中心とした、信心の歓喜。感激。躍動。連帯—。その場所に、宇宙の**諸天善神**が続々と結集します。仏・菩薩が、皆さまの方を福運の光で包んでいくのです。にぎやかな生命と生命の触発によって、創価学会は、ぐんぐんと威光勢力を増していくのです。**牧口先生、戸田先生**も、この「民衆共和」の姿を、どれほど喜んでおられることでしょうか。そして、**日蓮大聖人**がどれほど御称賛下さっていることでしょうか。さあ、仏法の生命論と一緒に学んでいきましょう！—と。しかし「新版」385頁では上記が完全削除。

（私見）池田先生の**大座談会運動**への思い、**御本尊、牧口先生、戸田先生**のお喜び、**日蓮大聖人**の御称賛を記された尊極のご指導なのです！それをなぜ、削除するか！

64.「講義」129には—小題が「”常に仏と共に”の人生は強い」とあり、その「仏」の右には「御本尊」の添え書きがあります。しかし、「新版」388頁では—小題が—「御本尊と共に、大聖人と共に歩む人生を」に変更。

（私見）なぜ、池田先生が原本で記された「仏」＝「御本尊」の、「仏」を削除するのか。勝手な変更、完全な改竄！

65.「講義」130 頁には—**御本尊は、大聖人の御魂をそのまま認められた仏**そのものであられる。しかし、「新刊」389 頁では—御本尊は、大聖人の御魂をそのまま認められた「妙法と一体の」仏の生命そのものに変更。

（私見）「新刊」は、なぜこんな「妙法と一体に」などというまるで日蓮大聖人の生命が、別物である妙法と一体になったかのような表現にするのか！それは結論、人法一箇を否定する底意なのだ！

66.「講義」146 頁には、表題として—**恩師の「法華経講義」開始から五十周年**—とあり、池田先生の思いとして、以下のご指導がございます。—**二月十一日—恩師戸田城聖先生の誕生日です。毎年、この日が巡りくるたびに、私の心は弾む。今は、日本中、世界中で、恩師の生誕の日を祝ってくれています。これほどうれしいことはありません。**（中略）講義を通して、戸田先生の智慧と確信の指導を、世界各国の人々が一段と深く読んでいる。感動と決意が広がっている。**お誕生日の最高のお祝いとなりましたと。**

しかし、「新版」404頁では、表題も含め、赤字の論述が削除。

(私見)池田先生の戸田先生への真心を、なぜ削除するのか！

67.「講義」148頁には一末法において一心に求めるべき仏とは、御本尊に他なりません
一と。しかし、「新刊」405頁では、この文が削除。

(私見)池田先生がご指導の御本尊について、なぜ、削除するのか！

68.「講義」150頁には一。 私たちが、御本尊に向かって唱題することは、この「靈
山一会」に参列する厳粛な儀式にほかなりません。唱題に励めば、己心の靈鷲山
が、自身の胸中に輝いてくる。わが生命それ自体が、虚空会となる一と。しかし
「新刊」407頁では、上記の赤字が削除。

(私見)池田先生の生命観、ご指導が削除！言葉がない！

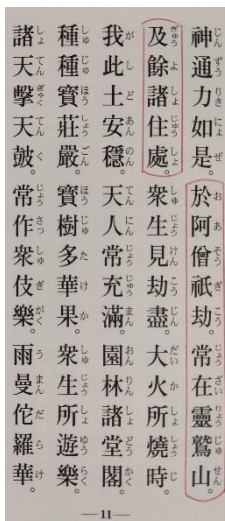
69.「講義」151 頁には一かつて日淳上人は、戸田先生亡きあと、心を一つに前進を誓
った私たちの姿を見て「全く靈山一会儼然未散と申すべきであると思うのであります。こ
れを言葉を変えますれば真の靈山浄土、仏の一大集まりであると私は深く敬意を表す
次第であります」と述べられたことが在ります一と。しかし、「新版」407頁では、上記、
赤字が完全削除。

(私見)池田先生は、戸田先生と日淳上人との親交、ご尊敬の関係が、どれほど素晴
らしいかを存じ上げていらしたからこそ、ここで、日淳上人のお言葉を引用されたのです。
それを、なぜ、「新版」は無視し削除するのでしょうか？これでは、宗門のことはすべて
認めないとの方針なのかと、思ってしまう。否、認めないのです。

70.「講義」155頁には一小題「苦海の社会を常楽の太陽が照らす」のところで一文底
から言えば、つねに住する不滅の仏とは、御本尊、南無妙法蓮華經如来です。その常
住の仏が出現して説く無上の法とは、南無妙法蓮華經にほかなりません。私たちが不
惜の信心で唱える題目の声は、そのまま常住の仏が無上の法を説く声となるのです。そ
れは、功德の実証などを通じて、妙法の力を私たちに教えてくれます。しかし、「新版」
410頁では、上記、寿量品の最重要講義が完全削除。

(私見)これ以上の改竄があるだろうか！言語道断！

71. 「講義」158 頁には自我偈本文の一神通力如是 於阿僧祇劫 常在靈鷲山
及余諸住処 衆生見劫尽 大火所燒時 我此土安穩 天人常充滿 園林諸堂閑
種種宝莊嚴 宝樹多叢果 衆生所遊樂 諸天擊天鼓 常作衆伎樂 雨憂陀羅華
散仏及大衆一が記されています。



そして「講義」161 頁には一小題「御本尊は常に“わが胸中”にある」のところで、最初の「**於阿僧祇劫 常在靈鷲山及余諸住処**」とは**文上からいえば**、阿僧祇劫という長遠の間、仏がこの靈鷲山に常住しているということです。また、十方世界のどこにでも出現されるということです。**文底からいえば**、私たち衆生がどこにしようと、どんな時でも、厳として**御本尊**は私たちの胸中にある。生命から瞬時も離れずつねに「私たちと共に」「私たちの側に」あらわれる。いつも一緒なのです。「常在」の二字を心に刻んでください—と。

しかし、「新版」415 頁では一上記**文上からいえば**が削除、**文底からいえば**が→私たちからいえば、**御本尊**→常住の仏へと変更！

(私見) これは言語道断！やってはならないこと！

池田先生がご指導の**勤行の本義**を隠蔽！**文底仏法と**

御本尊の否定で、「新版」最悪の改竄だ！

72.「講義」180頁には一私どもは、厳然と末法における真実の三宝を知っている。すなわち、仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、(中略)僧宝は日興上人にほかなりません。また、僧とは”集い”を意味するサンガ(僧伽)のことですから、**広げていえば**、大聖人の仏法を正しく持ち弘めて、民衆救済、平和実現に励む和合僧団を指す。現代でいえば**創価学会**が、その和合僧団であることは、いうまでもありません—と。

しかし、「新版」431頁では一「三宝」とは、仏と、仏の教え(法)と、その教えを守り弘める人々の集い(僧)のことです。三宝は、いわば民衆救済の要です。それゆえに、仏法では人々を救う宝として尊重する。私どもは、厳然と末法における真実の三宝を知っています。と記した後に、「講義」の一仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、僧宝は日興上人にほかなりません。一を削除、また、僧とは”集い”を意味するサンガ(僧伽)のことですから、今日で言えば、大聖人の仏法を正しく持ち弘めて、民衆救済、平和実現に励む和合僧団、即ち創価学会が僧法であることは、言うまでもありません—とだけ。

(私見) 池田先生が寿量品講義、その中の中心、自我偈講義のところでご指導の三宝の「仏宝は末法の御本仏・日蓮大聖人、(中略)僧宝は日興上人にほかなりません」を削除。そして、「**広げていえば創価学会**」を削除して、**創価学会だけが僧法**に変更。これまた、言語道断！最悪の改竄！ 80/124

73.「講義」182頁には自我偈本文の**一諸有修功德 柔和質直者 則皆見我身 在此而說法 或時為此衆 説仏寿無量 一久乃見仏者 為説仏難値**一が記されています。そして、188 頁には一小題「今を大切にする」 のが仏法の精神」のところで**一大聖人は、末法の一切衆生を救うために、御自身の永遠の生命を御本尊として顕されました。これが「仏寿は無量なりと説く」という経文の文底の意です**一と。しかし「新版」439頁では上記の**赤字が完全削除。**

在此而説法 或時為此衆 説佛壽無量
諸有修功德 柔和質直者 則皆見我身
以惡業因緣 過阿僧祇劫 不聞三寶名
憂怖諸苦惱 如是悉充滿 是諸罪衆生
散佛及大衆 我淨土不毀 而衆見燒盡

(私見) 私たちが、朝晩の勤行で読誦の自我偈の重要句「説仏寿無量」(左、勤行要典12頁)について、池田先生が「講義」で文底から**一大聖人は、末法の一切衆生を救うために、御自身の永遠の生命を御本尊として顕されました**一とご指導なのです。この一文こそ日蓮大聖人即御本尊、つまり、「**人法一箇**」をご指導なのです！それを「新版」はなぜ、削除するのか！日蓮仏法の奥義を削除、破壊だ！

速成就佛身 每自作是念
隨應所可度 爲我說種種法 每自作是念
墮於惡道中 我常知衆生 行道不著五欲
以常見我故 而生憍恣心 放逸著五欲
救諸苦患者 爲凡夫顛倒 實在此而滅

74.「講義」208頁には自我偈本文の最後**一每自作是念 以何令衆生 得入無上道 速成就仏身**一が記されています。そして、211頁には**一戸田先生も語られていた。「每自作是念の毎という字はですね、三世一過去、現在、未来ということなんです。每自作是念とは、大聖人様が久遠元初の昔より常に我等衆生を救わんと念じられたことであり、重大な御文である」と。この一念は師弟の絆の中にのみ脈打つのです**一と。しかし、「新版」460頁では、**上記の赤字を完全削除。そして、「この一念は」が「仏のこの永遠の一念は」に変更。**

(私見) この戸田先生の“**重大な御文**”の引用文が「新版」で削除されることは、「新版」の自語相違です。また、この一念とは、戸田先生が大聖人様のご一念を指して言われたのに、「新版」は、それを**「仏のこの永遠の一念は」に勝手に変更、改竄！**「講義」1頁の「発刊に当たって」では、一本講義では、第二代会長・戸田城聖先生の講義も十二分に踏まえながら、二十一世紀の現代世界に向かって、仏法の人間主義を展開する内容になっており、「師弟合作」の法華経講義であると言える。(1頁13行目～2頁2行目)一と明言なのです。しかし、本文で戸田先生が「**重大な御文**」とまで言われた上記ご指導を捨て去ることは、「新版」はいったい何を十二分に踏まえているのか！ 81/124

否！これでは「師弟合作」ではない！「師弟否定」です！「新刊」の最後に、これほどの改竄が行われているとは言語道断！「新刊」は全く無価値、否、純粋な信心をする学会員を冒涇していると言えない！

75.「講義」214頁には一「御義口伝」には、「無上道とは寿量品の無作三身であり、これ以外に『成就仏身』はない。今、南無妙法蓮華經と唱える日蓮および門下は、『成就仏身』は疑いがないのである」(御書七五九頁、通解)と仰せです。**すなわち**「速やかに仏身を成就する」の經文を、**文底から読めば**、南無妙法蓮華經と唱える者は無作三身を我が一身に成就して仏身を成ずることは疑いないと、大聖人様が断言された經文ですと。しかし、「新版」では一上記の「すなわち」と「文底から読めば」が削除。

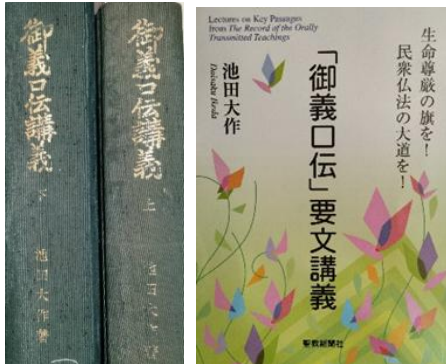
(私見) 上記 73～75 の削除、改竄は私たちの朝晩の勤行の意義まで奪ったと断言します！そして「新刊」は最後の最後まで池田先生が解釈、ご指導された「**文底から読めば**」を完全に無視して、独自判断の勝手な「文底」をもって池田先生の「講義」全文を書き替え、改竄なのです！

結論、「新版」は池田先生が「講義」でご教示の「**久遠元初**」を曲解して、「**久遠元初の自受用報身如来**」を完全削除、三宝の内、「**僧宝は日興上人**」を削除、「創価学会」だけにしているのです！つまり、表面だけは、「文上」と「文底」なのです。

日蓮仏法は「久遠元初自受用報身如来」こそが、文底なのです！ゆえに、「新版」のは「文底もどきの作文」であり、師匠池田先生への背信なのです！そして、「新版」は「教学要綱」の底意である一釈迦本仏論なのだと断言します！

次に、「御義口伝講義」（以下「原本」と略）に対して「御義口伝」要文講義（以下「要文」と略）が、削除、改竄の実態を再掲載する。

(以下の引用、**赤色**、**茶色**、下線を施したのは私、図斉)



- ① 南無妙法蓮華經(「要文」12頁) 御義口伝に云わく、「南無」とは梵語なり。ここには「帰命」と云う。人法これ有り。人とは釈尊に帰命し奉るなり。法とは法華經に帰命し奉るなり。また云わく、「帰」と云うは迹門不變真如の理に帰するなり。「命」とは本門隨緣真如の智に命づくなり。「帰命」とは南無妙法蓮華經これなり。(新984、全708)

「原本」49頁には一この場合の釈尊は、当然、第六の釈尊、すなわち久遠元初の自受用身如来であられる日蓮大聖人の御事である。52頁には一「南無」とは梵語であつて、これを漢語に訳せば「帰命」という。その帰命する対境、対象に「人」と「法」とがある。「人」とは、文底の釈尊即人本尊たる日蓮大聖人である。「法」とは末法の法華經であり、法本尊であるところの南無妙法蓮華經である。すなわち、人法一箇の大御本尊に帰命することが、真実の中の真実の帰命。

上記が、「要文」8 頁では一南無妙法蓮華經とは、大聖人が覚知された宇宙と生命を貫く根源の法そのもの、一念三千の法理そのものであるという大確信に立つことです。(中略)13、14頁では一南無妙法蓮華經(妙法蓮華經)とは単なる經題ではない。法華經の肝心であり根源の法そのもの、永遠なる生命の法則であるというのが、大聖人の覚り。(中略)14、15頁では一不變の真理を探究し、その世界に参入していく方向が「帰する」であり、その真理の大地を踏みしめた上で、今度は現実の世界に立ち戻り隨緣の智慧に「命(もと)づき」活動していくのです。それが南無妙法蓮華經への帰命です。

- ② 南無妙法蓮華經の続きで、中略の後、「(「要文」17頁)南無妙法蓮華經の「南無」とは梵語、「妙法蓮華經」は漢語なり。梵漢共時に南無妙法蓮華經と云うなり。(新984、全708)、(さらに中略の後に)20頁には一「經」とは一切衆生の言語音声を経と云うなり。釈に云わく、「声、仏事をなす。これを名づけて經となす」。(新984、全集708)

「原本」74頁には一大御本尊を拝するに中央に「南無妙法蓮華經 日蓮」とお認めである。南無とは梵語、妙法蓮華經は漢語、日蓮は日本語である。(中略)これこそ日蓮大聖人の仏法が、日本のみならず、全東洋、全世界の仏法であることを、意義づける。

上記が、「要文」17頁では一「梵漢共時」一南無妙法蓮華經の題目は、梵語と漢語という異なる言語・文化が結合して成り立っていると仰せです。(中略)「梵漢共時」の南無妙法蓮華經とは、全人類のための「不變の法」である。

- ③ 方便品の一節 方便品八箇の大事 第一「方便品」の事（「要文」51頁）今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、これ秘妙方便にして体内なり、故に、「妙法蓮華經」と題して、次に「方便品」と云えり。（新993、全714）

「原本」179～180頁には—今、われわれ大御本尊を信じ南無妙法蓮華經と唱える者は、秘妙方便であり、大御本尊の体内 73頁には—久遠元初以来、御本仏日蓮大聖人の眷属であり、仏なのだと悟る、これが秘妙方便である。

上記が、「要文」54頁では—「今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉るは、これ秘妙方便にして体内なり」と仰せです。「体内」とは、仏の覺りの内に納まっているということ。

- ④ 方便品の一節（上記の続き）（「要文」56頁）妙樂、記の三に釈して、本疏の「即ちこれ真の秘なり」の「即」を、「円をもって即となす」と消釈せり。即は円なれば、法華經の別名なり。即とは、凡夫即極、諸法実相の仏なり。円とは、一念三千なり。即と円と、言は替われども、妙の別名なり。一切衆生、実相の仏なれば、妙なり、不思議なり。謗法の人、今これを知らざるが故に、これを「秘」と云う。（新版993、全集714）

「原本」180頁には—即とは円であるから法華經の別名である。即とは凡夫即極を意味し、有作ではなくして諸法実相の仏なのである。ここに法華經とは、一往は二十八品再応文底からは大御本尊であり、凡夫即極、諸法実相の仏とは本有無作三身の日蓮大聖人である。

上記が、「要文」57頁では—九界の衆生が即、仏であるということが「円」、即ち完全な真実であり、それを説いているのは法華經しかないのです。

- ⑤ 方便品の一節（「要文」79頁）

「我」とは釈尊、「我実成仏久遠（我実に成仏してより久遠なり）」の仏なり。この本門の釈尊は、我ら衆生のことなり、「如我」の「我」は、十如是の末の七如是なり。九界の衆生は、始めの三如是なり。我ら衆生は親なり、仏は子なり。父子一体にして、本末究竟等なり。この我らを寿量品に無作の三身と説きたるなり。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱うる者これなり。（新1003、全720）

「原本」292頁には—此の本門の釈尊とは、本門文上の色相莊嚴の釈尊ではなくして、本門文底の釈尊、すなわち久遠名字即の凡夫であることは明らかである。（中略）別しては、御本仏・日蓮大聖人、総じては大御本尊を奉ずるわれわれ末法の衆生のことである。297頁には—無作三身とは、別して日蓮大聖人なのである。

妙法は法であり、日蓮大聖人は人であり、人法一箇なのである。ゆえに、もったいなくも、大御本尊の中央には、「南無妙法蓮華經 日蓮」としたためられている。その左右に釈迦多宝、あるいは上行等の四菩薩、さらには、声聞、縁覚、ずっと地獄の衆生までいることがわかる。これは、釈迦多宝といえども、大聖人の己心の釈迦多宝であり、大聖人の生命の働きであることを示すものである。したがって、釈迦多宝の二仏も、大聖人の御生命から出発するのであり、大聖人が親であり、釈迦多宝はそこから誕生する子なのである。さらにいえば、十方三世の一切の諸仏もまた子であり、大聖人は親であられる。

上記が、「要文」81頁では一この経文について、大聖人はまず、方便品で説かれている「我」とは、本門の久遠実成の釈尊であることを示されています。(中略)82頁では一そこには、教え導く側も、教わり導かれる側も、「皆が等しく仏」という法華經の智慧の根本が示されています。

⑥ 信解品六箇の大事 第五無上宝聚不求自得の事 (「要文」97頁)

今、日蓮等の類いの心は、無上とは南無妙法蓮華經、無上の中の極無上なり。この妙法を指して「無上宝聚」と説きたもうなり。「宝聚」とは、三世の諸仏の万行万善・諸波羅蜜の宝を聚めたる南無妙法蓮華經なり。この無上宝聚を辛勞も無く行功も無く、一言に受け取る信心なり。「不求自得」とは、是れなり、(新1014、全727)

「原本」435 頁には一無上宝聚とは、大御本尊のことである、すなわち、大御本尊が、無上の宝の聚(あつまり)りなのである。

上記が、「要文」100 頁では一宝聚とは宝の集まりのことです。三世の諸仏が成仏するための一切の善行や修行の功德が納まっているのです。この偉大な功力を具えているのが南無妙法蓮華經である。

⑦ 法師品十六箇の大事 第一法師の事 (「要文」133頁) 御義口伝に云わく(中略)今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は法師の中の大法師なり、(新1026、全736)

「原本」584 頁には一法師の「法」とは南無妙法蓮華經、「師」とは日蓮大聖人のことであり、人法一箇を表わしているのである。585 頁には一人法一箇の文であられる。釈迦仏法は、人法勝劣一法が勝り、人が劣る。日蓮大聖人の仏法は、人法一箇である。

上記が、「要文」133頁では一まず、「法師」について、妙法の題目を唱え抜いている大聖人とその一門こそが「法師の中の大法師」であると仰せです。

- ⑧ 勸持品十三の大事 第十三「但惜無上道の事」(「要文」177頁) 御義口伝に云く、「無上道」とは、南無妙法蓮華經これなり、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經を惜しむことは、命根よりも惜しきことなり、これによつて結ぶ処に、「仏自知我心と説かれたり。法華經の行者の心中をば、教主釈尊、御存知有るべきなり、「仏」とは釈尊、「我心」とは、今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者なり。(新1044、全749)

「原本」809 頁には—無上道とは、南無妙法蓮華經のことである。すなわち、三大秘法の大御本尊のことである。808 頁には—法華經の行者の心の中を、久遠元初の自受用身如来である日蓮大聖人が、必ず知っておられるのである。仏とは文底の釈尊、すなわち久遠元初の自受用身如来

上記が、「要文」179～181 頁では—一大聖人は、「無上道」とは南無妙法蓮華經のことであると明かされています(中略)181頁では—仏は妙法に生き抜く人間の尊極の命を深く「知って」いる。そして、末法において、この「根源」の一法を説き明かされたのが御本仏・日蓮大聖人です。「南無妙法蓮華經と唱え奉る者」の心に、久遠の仏の生命が脈動していくのです。

- ⑨ 涌出品一箇の大事 第一唱導之師の事(「要文」198頁) また云わく、千草万木、地涌の菩薩にあらずということなし。されば、地涌の菩薩を本化と云えり。本とは、過去久遠五百塵点よりの利益として、無始無終の利益なり。此の菩薩は本法所持の人なり。本法とは、南無妙法蓮華經なり。この題目は、必ず地涌の所持の物にして、迹化の菩薩の所持にあらず。この本法の体より用を出だして、止観と弘め、一念三千と云う。総じて大師・人師の所釈も、この妙法の用を弘め給うなり。この本法を受持するは、信の一字なり、(新1047、全751)

「原本」854 頁には—「久遠五百塵点」とは教相である。「無始無終」は久遠元初であり、観心である。ここでは当然、久遠元初の日蓮大聖人の仏法と拝すべきなのである。「本法所持の人」とは、別しては日蓮大聖人、教相では上行菩薩のことである。信心より拝すれば、大聖人の弟子である、われわれを指すのである。南無妙法蓮華經が本体であり、それから用(ゆう)をいだして、釈尊は法華經二十八品を説き、天台は摩訶止観を説いたのである。また、あらゆる大師、人師、例えば、竜樹、天親、妙楽、伝教も、南無妙法蓮華經の本体の用を弘めたに過ぎないのである。

上記が、「要文」199頁では—「本」とは、久遠五百塵点劫の過去から利益として無始無終の利益である。この地涌の菩薩は、本法(本源の法)を所持した人である。本法とは南無妙法蓮華經である。この南無妙法蓮華經の題目は、必ず地涌の菩薩が所持するものであって、迹化の菩薩が所持するものではない。

⑩ 寿量品の一節 寿量品二十七箇の大事

第一「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六」の事（「要文」212頁）「如来」とは釈尊、総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地の無作の三身なり。今、日蓮等の類いの意は、総じては「如来」とは一切衆生なり、別しては日蓮の弟子檀那なり。されば、無作の三身とは、末法の法華經の行者なり。無作の三身の宝号を、「南無妙法蓮華經」と云うなり。（新版1048、全集752）

「原本」16頁には—南無妙法蓮華經如来、すなわち文底の仏の寿量品である。釈尊の文上の寿量品と区別して、大聖人の立場、すなわち文底より読むがゆえである。文底の仏とは日蓮大聖人であらせられる。日蓮大聖人が「予が読むところの寿量品」と仰せられる、内証の寿量品である。南無妙法蓮華經如来は人、寿量品は法で、人法一箇をあらわす。44頁には—内証の寿量品により、如来寿量品第十六の「如来」を解釈するならば、如来とは久遠本果の三身、すなわち色相莊嚴の仏ではない。本地無作の三身、すなわち久遠元初の自受用身を如来というのである。45頁には—日蓮大聖人は、末法に、久遠元初自受用身の再誕として御出現になり、凡夫の当体、本有のままで、一切衆生の中に飛び込まれ、久遠元初の妙法、万法の根源、大宇宙の一切の変化の本源力たる南無妙法蓮華經を一幅の大御本尊として顕わされ、一切衆生に与えられたのである。

上記が、「要文」213頁では—如来とは、三世十方の仏たちに共通の名であり、本地の三仏（注6「本地」とは、本来の境地のこと。ここでは、久遠実成の釈尊が本地の仏であり、しかも、その一身に法身・報身・応身の三身を具えていることを、「本地の三仏」という。）の別名とされています。それを受けて大聖人は、如来とは、総じては一切衆生、別しては大聖人の弟子檀那であると述べられています。

（中略）「如来」といっても、妙法を持った人間自身にほかならない。本源の“もとのまま”“ありのまま”の久遠の生命を現わす衆生こそが真の如来である—。これが、御義口伝で示されている仏陀観であり、釈尊観であり、成仏観です。

⑪ 寿量品の一節 第三「我実成仏已来無量無辺」等の事（「要文」218頁）今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者は、寿量品の本主なり。総じては、迹化の菩薩、この品に手をつけ、いろうべきにあらざるものなり。彼は迹表本裏、これは本面迹裏なり。しかりといえども、しかも当品は末法の要法にあらざるか。その故は、この品は在世の脱益なり。題目の五字ばかり当今の下種なり。しかれば、在世は脱益、滅後は下種なり。よって、下種をもって末法の詮となす云云。（新1050、全753）

「原本」66頁には—第三「我実成仏已来無量無辺」の文は、一往は、インド応誕の釈尊の久遠成道を顕わす文である。しかし、日蓮大聖人は、この經文をもって、文上の釈尊の境地を述べようとは、毛頭されていない。この經文を用いて、御自身の久遠元初の成道を説かれるのである。87/124

63頁には一寿量品の本主とは寿量品の釈尊、教主と同じ。寿量文底の仏を言う。すなわちインドの釈尊は妙法五字を悟って寿量品第十六を解き明かしたのであり、根底はあくまでも南無妙法蓮華經である。したがって、真実の寿量品の本主とは南無妙法蓮華經をとかれた文底の釈尊である日蓮大聖人のことである。また総じて南無妙法蓮華經と唱える大聖人の弟子も、寿量品の本主とあらわれると仰せ下さっている。

上記が、「要文」219頁では一法華經の經文上においては、「寿量品の本主」―寿量品の教えを説く主体は、万人成仏の教えを説く釈尊です。しかし御義口伝では、題目を唱える「日蓮等の類い」が「寿量品の本主」であると仰せです。(中略)221頁では―地涌の菩薩は、仏に代わって、末法において題目を直ちに下種していく主体、主人公であり、「寿量品の本主」にほかなりません。そして、その「地涌の菩薩にさががけ」(新1790, 全1359)として、不惜身命の大闘争を貫き、妙法を弘められたのが大聖人です。さらに大聖人は、「日蓮の類い」と仰せの通り、門下たちも「寿量品の本主」とし、妙法を語り広げゆく主体としての崇高な使命を担っていることを宣言されました。その意味では「さががけ」を果たされた大聖人に二陣・三陣と続いて、妙法を下種しゆく地涌の菩薩たちが次々と出現しなければ、御義口伝は完結しないと言えましょう。

- ⑫ 寿量品の一節(上記の続き、中略の後) 第四「如来如実知見三界之相、無有生死」の事(「要文」240頁) 無作の三身の当体蓮華の仏とは、日蓮が弟子檀那等なり。南無妙法蓮華經の宝号を持ち奉るが故なり云云。(新1051、全754)

「原本」78頁には一宝塔品第十一の儀式は譬喩蓮華、御本尊は当体蓮華である。また総じては宇宙の森羅万象、一切の現象が当体蓮華であり、妙法蓮華である。別していえば、日蓮大聖人の仏法を修行するわれわれのみが当体蓮華であるが、さらに別していえば、日蓮大聖人即大御本尊が、妙法蓮華の当体である。81頁には―無作の三身の当体の蓮華の仏とは南無妙法蓮華經如来たる日蓮大聖人のことであり、また南無妙法蓮華經と唱える日蓮大聖人の門下も、総じてはこれに含まれるのである。

上記が、「要文」240頁では―「無作の三身」―仏の三つの特性である「法身」「報身」「応身」の三身を、本来、具えている十界本有の仏とは、大聖人に連なる私たちであると仰せくださっています。

- ⑬ 寿量品の一節 第十六「我亦為世父」の事(「要文」258頁) 御義口伝に云わく、「我」とは釈尊、一切衆生の父なり。主・師・親において、仏に約し、經に約す。仏に約すとは、迹門の仏の三徳は、「今此三界」の文これなり。本門の仏の主・師・親の三徳は、主の徳は「我此土安穩」の文なり。師の徳は、「常說法教化」の文なり。親の徳とは、この「我亦為世父」の文これなり。(新1056、全757)

「原本」210頁には一およそ三徳具備をもって、仏となし、本尊とするのである。末法において三徳具備を論ずるならば、仏に約せば、久遠元初自受用身三身如来即日蓮大聖人であらせられ、経に約せば、末法の法華經にして、寿量文底下種事行の一念三千の大御本尊であらせられる。(中略)
日蓮大聖人こそ人の本尊であらせられ、御図顕の大御本尊こそ法の本尊であらせられる。しかして、人法一箇であり、法に則して人、人に即して法であり、末法のわれら衆生の一同に尊崇すべき三徳具備の当体なのである。(中略)されば、我亦為世父の文は日蓮大聖人の御事であり、(中略)
日蓮大聖人こそ一切衆生の父であり、総じて、われわれもまた、一切衆生の父と仰せ下さっている。

上記が、「要文」259頁では一この御文では、久遠の仏「自身」の姿が主師親の三徳として説かれ、それを末法において実践されているのが、御本仏・日蓮大聖人に他ならないことが示されています。経文の「我亦為世父」は、「良医病子の譬え」の箇所で、良医である父と同じく、釈尊もまた、現実の三界の「一切衆生の父」であり、良医が、とりわけ本心を失った迷いの子どもたちを救ったように、「顛倒」(法華經493頁)の人々をも全力で救済している、とあります。(中略)

末法にあつては大聖人こそが、また、その弟子たちが、民衆救済の大闘争に挑む、“一切衆生の父”の役割を担っていることが明かされます。

- ⑭ 寿量品の一節 第十九「每自作是念」の事 (「要文」263頁) 御義口伝に云わく、「毎」とは、三世なり。「自」とは別しては釈尊、総じては十界なり。「是念」とは、無作本有の南無妙法蓮華經の一念なり。「作」とは、この「作」は有作の作にあらず、無作本有の作なり云云。
(中略)今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る念は、大慈悲の念なり云云。(新版1057、全集758)

「原本」225頁には一「別しては釈尊」とは、末法において、日蓮大聖人の御事であり、即御本尊のことである。ただし、ここでは、まだその釈尊の実体は明かされず、一往、仏という意味で釈尊と標したのである。

上記が、「要文」264頁では一「毎」とは、三世永遠を意味し、「自」とは釈尊自身であるとともに、十界本有の原理に照らし、私たち自身のことである。

*この寿量品の一節に(中略)があります。そこには一「広く十界本有に約して云わば「自」とは、万法己己の当体なり。「是念」とは、地獄の呵責の音・その外一切衆生の念念・皆是れ自受用報身の智なり。是を念とは云うなり」 — と記されていますが、「要文」では引用されていないのです。なぜ、「自受用報身の智」の重要部を除いているのですか？

- ⑮ 常不輕品三十箇の大事 第十三常不值仏不聞法不見僧の事（「要文」280頁）末法の「仏」とは、凡夫なり、凡夫僧なり。「法」とは、題目なり。「僧」とは、我等行者なり。仏とも云われ、また凡夫僧とも云わるるなり。「深く円理を覚る。これを名づけて仏となす」の故なり。「円理」とは、法華経なり云云。（新1067、全766）

「原本」396 頁には一種脱相對して、末法下種の人本尊を明かした御文であり、即日蓮大聖人の御身をさす。（中略）「円理とは法華経なり」と申されているように、独一本門、三大秘法の南無妙法蓮華経をいう。

399 頁には—御本仏日蓮大聖人こそ、末法の仏宝であらせられる。法宝とは、この仏の説かれた教法であり、一切衆生皆成仏の法、哲理である。僧宝とは、この仏の意志を受け継ぎ、法を実践し、弘める人である。したがって、末法の法宝は三大秘法の御本尊であり、僧宝とは、二祖日興上人である。いま「僧とは我等行者なり」とは、総じて、妙法を信じ行学に励む者が僧であるとの意である。

上記が、「要文」280 頁では—末法の「仏」とは、凡夫であり、凡夫僧である。「法を聞かず」という「法」とは、題目である。「僧を見ず」の「僧」とは、私たち法華経の行者のことである。仏とも言われ、また凡夫僧とも言われる。「深く円理を覚る。これを名づけて仏となす」のゆえである。「円理」とは法華経である。

以上、池田先生の「御義口伝講義」(上)(下)と、新刊の「御義口伝要文講義」とを、再度、簡潔にまとめた15のご紹介です。これらから判明し得たことは、「要文」が日蓮仏法の根本的正義である「日蓮大聖人は久遠元初の自受用身如来であり、人法一箇の曼荼羅御本尊の御当体そのもの」との意義を排斥、認めないことでした。そして、この根本義を、現代、及び、末法万年にわたる全人類へ、分かり易く解説された池田先生の「原本」のご教示が、悉く、改竄され、釈迦本仏論にすり替わっていたことです。

「要文」は、なぜ今、三代会長のご垂教を無視、改竄するのですか？私の生命には池田先生の「御義口伝講義」に込められた、人類の平和、一人一人への愛の獅子吼が溢れてやみません。その先生のご教示を改竄することを、私は絶対に許すことができません。

次に、「要文」の最大の不正を示し、これでは池田先生の御義口伝の本義とは言えない！と糺すことです。以下、論述します。

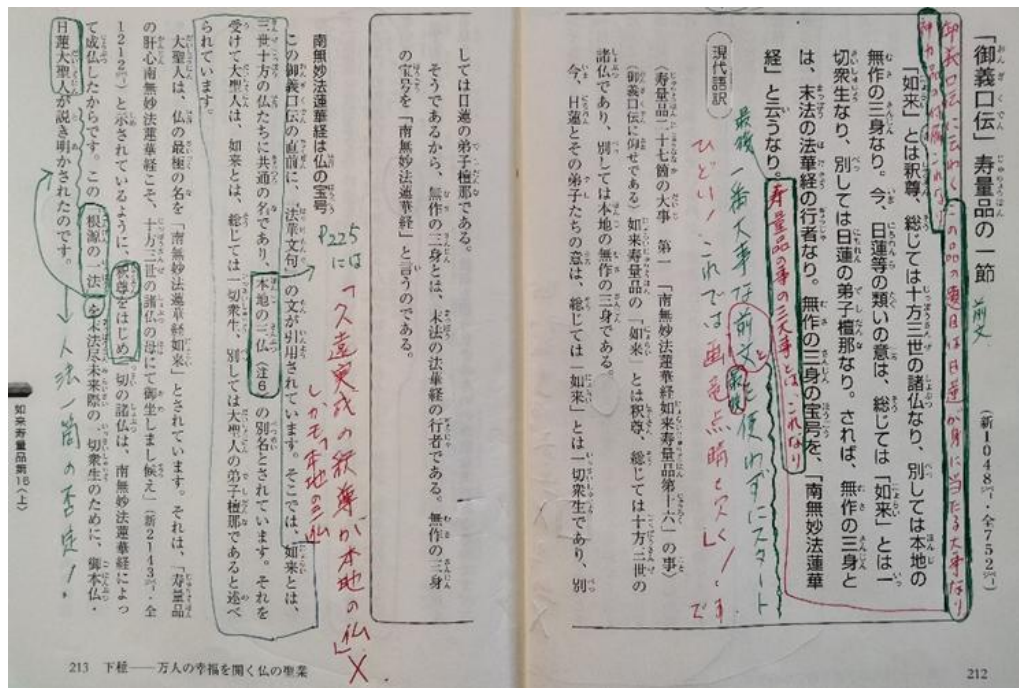
1. 御義口伝 寿量品二十七箇の大事、第一の最重要文「この品の題目は日蓮が身に当たる大事なり、神力品の付嘱是なり」と「寿量品の事の三大事とは、是なり」を「御義口伝要文講義」（以下「要文」と略）が無視し、引用しないことへの破折。

「要文」の不正は、「原本」の下記、青字の重要部を無視、引用せずに、次頁に該当の箇所を掲示したように、その論調は全くの文上解釈であり、いきなり「如来とは釈尊」と、論述を開始していることは、「要文」が画竜点睛を欠いている何よりの表れです。

寿量品二十七箇の大事 第一南無妙法蓮華經如来寿量品第十六の事

文句の九に云わく如来とは十方三世の諸仏、二仏・三仏・本仏・迹仏の通号なり。別しては本地三仏の別号なり。寿量とは十方三世・二仏・三仏の諸仏の功德を詮量す。故に寿量品と云うと。御義口伝に云く、この品の題目は日蓮が身に当たる大事なり。神力品の付嘱是なり。如来とは釈尊・総じては十方三世の諸仏なり、別しては本地の無作の三身なり。今、日蓮等の類いの意は、総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮の弟子檀那なり。されば無作の三身とは、末法の法華經の行者なり。無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり、寿量品の事の三大事とは是なり。

次頁に、「要文」（212，213頁）が「原本」に対し違背、改竄の最も端的な象徴を引用します。



上記の文例は「**要文**」が戸田・池田両先生が終始一貫された日蓮仏法の本義の解釈である「**法華經の文底からの拝読**」に完全に違背した不知恩の証拠です。何故、その重要部を削除して学会員をごまかすのか。怒りしかありません。以下それを破折します。

戸田先生は — 日蓮大聖人の御身に当たる大事とおおせられるわけは「南無妙法蓮華經如来寿量品第十六」なのですから、南無妙法蓮華經の如来でなければ、如来ではないと立てられるへんにあります。その南無妙法蓮華經という如来を上行菩薩がうけとられ、**上行菩薩の再誕として日蓮大聖人がひとまずお生まれ**になり、その如来を建立されるのであります。

すなわち**三大秘法そのものが南無妙法蓮華經如来寿量品**になってくるのであります。ですから日蓮大聖人の御身に当たる大事、南無妙法蓮華經如来寿量品第十六とおしたためになったのであります。一と、日蓮大聖人の御身に当たる大事の甚深の意義を教示されています。(戸田城聖全集第5巻法華經方便品・寿量品講義 p332頁)

次の神力品の付嘱是なりについては「**原本**」(下) 19 頁で、**池田先生は**— 神力品第二十一 (581 頁) には「要を以て之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の經に於いて宣示顕説す」と説かれている。これを天台は、四句の要法といい、結要付属の文としている。

だが、文底の義によって、この文を判ずるならば、**ここに厳然と三大秘法が付属されたことが明確**となる。三大秘法抄 (1021 頁) には、この神力品第二十一の文を引用したあと「問う所説の要旨の法とは何物ぞや、答えて云く夫れ釈尊初成道より (中略) 実相証得の当初修行し給いし処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり」とある。「実相証得の当初」とは、五百塵点劫の当初と同意であり、久遠元初の事である。(中略) **神力品第二十一で付属された実体は寿量品第十六の文底に説かれたのである。一と。**

また「**原本**」(下) 16 頁で、**池田先生は**— 南無妙法蓮華經如来寿量品について— **南無妙法蓮華經如来、すなわち文底の仏の寿量品である。釈尊の文上の寿量品と区別して大聖人の立場、すなわち文底より読むがゆえである。文底の仏とは日蓮大聖人であらせられる。**

日蓮大聖人が「予が読むところの寿量品」と仰せられる、内証の寿量品である。南無妙法蓮華經如来は人、寿量品は法で、**人法一箇をあらわす。**これは文中「されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華經と云うなり」とあることによっても、明白である。一と。

さらに、日蓮が身に当たる大事については、「**原本**」(下) 18 頁で**池田先生は**、— 南無妙法蓮華經如来寿量品第十六という題号は、日蓮大聖人御自身のことを説いた肝要の法門である、ということ。南無妙法蓮華經如来とは、即日蓮大聖人の御事であり、その寿量品とは、内証の寿量品、文底の寿量品であり、その所詮は三大秘法そのものである。次下に「寿量品の三大事とは是なり」とあるとおりである。ゆえに「日蓮が身に当る大事」と仰せられたのである一と。

寿量品の事の三大事とは是なりについては、「**原本**」(下) 20 頁で、**池田先生は**、一事とは、事実の上に仏界が顕現されることが説かれる。事の一念三千。法華經迹門は理、本門は事である。だが、一重立入って論ずれば、釈尊の文上の法華經は、本迹ともに迹であり、理である。ただ文底神秘の大法を独一本門・事の一念三千と名づけるのである。 93/124

日蓮大聖人は、この事の一念三千の当体として、一幅の大曼荼羅を御図顕なされたのである。これ本門の本尊一大秘法であり、開けば三大秘法となる。一と。

以上、池田先生は、この第二十一において、日蓮仏法に根本義をご教示されているのです。これを無視した「御義口伝要文講義」は画竜点睛を欠いていると断言します。

2. 寿量品、第二十二の「自受用身」、第二十三の「久遠とは南無妙法蓮華經」、第二十五の「本尊とは、法華經の行者の一身の当体」の三つ、即ち、日蓮仏法の根本義も「要文」が完全に無視したことへの破折。及び、「要文」に掲載すべき重要な二つの口伝について。

まず、この三つ、第二十二、第二十三、第二十五も日蓮仏法の最奥義なのです。これを完全に無視、「要文」に掲載しないのは、これまた、本当の「要文」とは言えません。皆様、その重要さについて下記を拝読、ご高見下さい。

第二十二 自我偈始終の事

御義口伝に云わく、「自」とは、始めなり。「速成就仏身（速やかに仏身を成就す）」の「身」とは、終わりなり。始終、自身なり。中の文字は受用なり。よって、自我偈は自受用身なり。法界を自身と開き、法界自受用身なれば、自我偈にあらずということなし。自受用身とは、一念三千なり。伝教云わく「一念三千即自受用身。自受用身とは、尊形を出でたる仏なり」。「尊形を出でたる仏」とは、無作の三身ということなり云々。今、日蓮等の類い、南無妙法蓮華經と唱え奉る者、これなり云々。

池田先生の「原本」（下）237－238頁には一自我得仏来の自と、速成就仏身の身で、この自我偈は全体として、日蓮大聖人御自身のことが説かれているのである。また、自身とは真実の生命の主体であり、これを説き示したのが、自我偈である。始めの自と終わりの身とを除いた、中の文字は、すべて、自身の振舞い、活動であり、受用となる。したがって、自我偈とは、自受用身ということに為るのである。（中略）ここにいう自受用身とは、久遠元初の自受用身であり、日蓮大聖人の御内証であり、即人本尊を示されている。また一念三千とは、開目抄に一念三千文底秘沈とあるごとく、文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華經、即ち、法本尊である。

しかして「自受用身とは一念三千なり」とは、人法一箇を示され、日蓮大聖人の御生命は、まったくこれ一念三千の大御本尊であり、一念三千の大御本尊は、まったくこれ、日蓮大聖人の御生命であることを説かれたのである。釈尊は法勝人劣であり、日蓮大聖人の場合は、人法一箇である。本尊とは優れたるを用うべきであり、したがって釈尊を本尊としてはならない。一と。

第二十三 「久遠」の事

御義口伝に云わく、この品の所詮は「久遠実成」なり。「久遠」とは、はたらかさず、つくろわず、もとのままという義なり。無作の三身なれば初めて成ぜず、これ働かさざるなり。三十二相八十種好を具足せず、これ繕わざるなり。本有常住の仏なれば、本のままなり。これを「久遠」と云うなり。「久遠」とは、南無妙法蓮華經なり。実成、無作と開けたるなり云々。

池田先生の「原本」(下) 245 頁には一ここに説き明かされる久遠実成とは、通途の意味とはまったく違い、南無妙法蓮華經如来の寿量品における久遠実成である。したがって、ここにいう久遠とは、久遠元初と同意であり、はたらかさず、つくろわず、もとの儘の義である。実成の実も、無作三身の仏ということであり、成も、成るということではなく、開く義となる。(中略)久遠といえは、一般的には「時の無窮なこと」「遠い昔」あるいは「永遠」ということである。

しかるに久遠元初の久遠とは、これらの時間的觀念を含めて、大宇宙の本源、生命の本源との意味である。すなわち、無作本有常住の生命、無始無終の生命の本体であり、それは、久遠元初の自受用身如来の御生命それ自体である。これはまた、即南無妙法蓮華經であり、したがって本文には「久遠とは南無妙法蓮華經なり」と結論あそはされているのである。

三世諸仏総勘文抄(568 頁)にいわく「釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめて即座に悟を開き給いき、後化他の為に世世・番番に出世・成道し在在・処処に八相作仏す」と。

「釈迦如来」とは、決して本果第一番成道の釈尊ではなく、名字凡夫位の釈尊、すなわち久遠元初の自受用身如来である。「五百塵点劫の当初」とは久遠元初のことである。「我が身は地水火風空」は我が身全宇宙ということである。これ、日蓮大聖人の久遠元初の成道であり、日蓮大聖人が、無始無終に、無作三身の自体として常住であることを説かれた御文にほかならぬ。一と、ございます。

第二十五 建立御本尊等の事

御義口伝に云わく、この本尊の依文とは、「如来秘密・神通之力」の文なり。戒・定・慧の三学は、寿量品の事の三大秘法これなり。日蓮たしかに靈山において面授口決せしなり。本尊とは、法華經の行者の一身の当体なり云々。

池田先生の「原本」(下)「原本」256—258頁には一如来秘密神通之力の文が、大御本尊の衣文であるとは「第二如来秘密神通之力の事」の中で述べたごとく、如来秘密は、中央の「南無妙法蓮華經 日蓮」をあらわし、神通之力は、左右の十界三千をあらわすのである。如来秘密は体の三身、神通之力は用の三身であり、共に日蓮大聖人の一身および心具の一念三千であり、大御本尊それ自体なのである。されば、御文に「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」と仰せられたのである。(中略)しかして、このように釈尊より上行菩薩として付属を受けたのは、いまなお外用の立場であり、さらに、深く御内証の辺より論ずれば、日蓮大聖人は、釈尊をはじめ、十方三世の諸仏を出生し、これらの仏の一同に帰一していくべき、久遠元初の自受用身の再誕であられる。

この立場より論ずれば、あの靈鷲山会の儀式は、教相の辺、文上の辺は論外として、観心の辺、文底の辺より論ずれば、全く久遠元初の儀式であり、釈尊より口決相承したという、この釈尊は、久遠元初自受用身如来であらせられる。上行菩薩として付属を受けたとは、生命論からいえば、上行とは我をあらわし、三世常住に続きゆく生命の本質に、久遠元初自受用身の生命を受け継がれた御本仏が、末法に、日蓮大聖人とあらわれ給うたか。(中略)

最後の「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」の御文は非常に重要である。大聖人の一身の当体が即御本尊なのである。大聖人が末法の人本尊であるとの嚴然たる証文でなくして何であろう。これほどまでに、日蓮大聖人は、末法の衆生の信仰すべき御本尊を説き明かされているのに、身延派日蓮宗では、いまなお釈尊を本尊としている。まさに仏の金言を踏みにじる姿であり、不知恩の畜生というべきである。一と。

以上、寿量品における、池田先生の最重要3つの御義口伝講義を、無視、削除した「要文」は、何度も言いますが、画竜点睛を欠いているとしか言えません。何故に、日蓮大聖人の根本義を解説された、池田先生の「御義口伝講義」の原本の、その中でも最も重要な講義を外すのですか？ これでは「要文」ではありません。

次に、「要文」として記し置きすべきと考える以下の二つをご紹介します。

一つ目は「原本」(下) 471頁には一神力品八箇の大事

第一妙法蓮華經如来神力の事

文句の十に云く神は不測に名け力は幹用に名く不測は即ち天然の体深く幹用は則ち転変の力大なり、此の中・深法を付属せんが為に十種の大力を現ず故に神力品と名くと。御義口伝に云く此の妙法蓮華經は釈尊の妙法には非ざるなり。
(以下省略)

475頁で一池田先生は(通解)御義口伝には、次のように仰せである。

この妙法蓮華經如来神力の妙法蓮華經とは、釈尊の妙法ではない。なぜなら、すでにこの神力品第二十一で上行菩薩に付属されているからである。総じて、妙法蓮華經を上行菩薩に付属される儀式は、宝塔品第十一の時に始まり、寿量品第十六の時に付属するところの法体が顕れ、神力品第二十一および囑累品二十二の時に一切の付属の儀式は終了するのである。(以下省略) ーと。

*この御義口伝を外して、どうするのですか！です。

二つ目は「原本」(下) 769頁には一普賢經五箇の大事

第五正法治国不邪枉人民の事

御義口伝に云く末法の正法とは南無妙法蓮華經なり、此の五字は一切衆生をたぼらかさぬ秘法なり、正法を天下一同に信仰せば此の国安穩ならむ、されば玄義に云く「若し此の法に依れば即ち天下泰平」と、此の法とは法華經なり法華經を信仰せば天下安全たらむ事疑有る可からざるなり。

已上二百三十一箇条の大事

また、771頁で、池田先生は(通解)日蓮大聖人の仰せには、次のように申されている。末法の正法とは、三大秘法の南無妙法蓮華經である。この南無妙法蓮華經は、全民衆をたぼらかさない、根底的に救いきっていく秘法である。この三大秘法の南無妙法蓮華經を全民衆が心をつにして信仰していくならば、日本の国も、世界も、安穩になっていくことは絶対である。

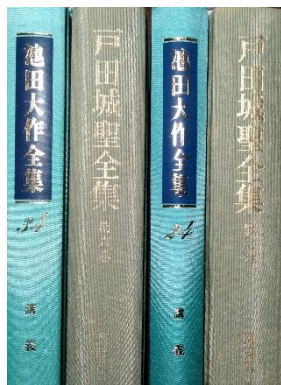
ゆえに、天台大師は法華玄義に「もし、この法を根幹としていくならば、天下は泰平となる」と述べている。天台のいう「この法」とは、法華經すなわち南無妙法蓮華經である。この南無妙法蓮華經を信仰するならば、世界は平和になっていくことは、疑いないのである。 97/124

さらに、775頁で、**池田先生は**—（講義）正法を天下一同に信仰せば此の国安穩ならむ 王仏冥合の依文である。「正法を天下一同に信仰せば」とは、すなわち仏法である。**「此の国安穩ならむ」とは王法である。安穩とは、国家、社会、世界が平和になることであり、依報たる国土世間も、地震や台風、あるいは早魃などの災害に襲われない、平穩な国土になることを意味する。**ここで、「正法を天下一同に信仰せば」と仰せの如く、**王仏冥合**といっても、根本は**全民衆が、この三大秘法の大御本尊を信仰することである。すなわち、折伏こそ、国土を安穩ならしめ、民衆の幸福と、世界の平和を実現しゆく原動力であることを知らなければならない。**—と。

上記二つこそ**日蓮大聖人の最重要の口伝**です。**平和論**なのです！この二つは、**池田先生の「原本」（上）の序の獅子吼**（本拙文5頁に引用）を、さらに明確にされた講義と拝します。ゆえに、「**要文**」がこの二つを無視したことは、大聖人と池田先生の本意を無視したと思います。

次に、「開目抄」、「観心本尊抄」と新刊本についての比較

最初に、池田先生の「**開目抄**」講義（以後「**原本**」と略）（池田大作全集 第34巻）と、教学部編「開目抄」（以下「**教学部編**」と略）との重要な論述の比較、6つを記します。なお、適時、戸田先生の「開目抄」講義（戸田城聖全集 第6巻）、また、戸田先生の「方便品・寿量品講義」（以下、「**戸田講義**」と略。昭和33年**2月11日**刊 和光社）からも参照しました。



- 1.「**原本**」23頁には — 「日蓮といふし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて返年の二月・雪中にしるして有縁の弟子へ贈れば
畏 怕
をそろしくて・をそろしからず・見ん人いかに・をぢぬらむ」（新102、全223頁）まさに、「大聖人の魂魄に目を開け」と仰せの御文である。

ここで大聖人は、「竜の口の頸の座において凡夫・日蓮は頸をはねられた。今、佐渡で『開目抄』を書いているのは、日蓮の魂魄そのものである」と言われている。この「魂魄」とは、発迹顕本された御内証である「久遠元初自受用身」にほかならない 一。

「教学部編」157 頁では一大聖人は竜の口の法難を勝ち越えた時に、宿業や苦悩を抱えた凡夫と言う迹(仮の姿)を開いて、凡夫の身に、生命にそなわる本源的な慈悲と智慧にあふれる仏(久遠元初の自受用報身如来)という本来の境地を著されたのである。(中略)これが日蓮大聖人の「発迹顕本」である。一と、記されています。

(私見)「原本」の一発迹顕本された御内証である「久遠元初自受用身」一を用いず、なぜ、「教学部編」は、本源的な、慈悲と智慧にあふれる仏とし、さらに、(カッコ内)書きにして、補足説明のように(久遠元初の自受用報身如来)なのでしょうか。これでは二次的で、本義の軽視ではないでしょうか。また、「原本」では、何十回も記されているのに、「教学部編」では、全編285頁を通じてこの1回だけです。「久遠元初自受用身」こそが「開目抄」の根本義です。これでは、池田先生の御本意を軽視では？と思われても仕方ないのではないのでしょうか。大変、疑問です。

2.「原本」44 頁には一大聖人は御自身こそが末法の主師親三徳であることを力強く宣言されます。「日蓮は日本の諸人にしうし父母(主師親)なり」(新121, 全 237)。当時の日本国とは、法滅の国です。この日本国の諸人を救うことは全人類の救済を可能にします。すなわち、日蓮大聖人こそが日本国の諸人、再往は末法万年にわたる全人類の主師親の三徳具備の人本尊であられることを宣言されている一節に他なりません一。

「教学部編」281, 282 頁では一「日蓮は日本国の諸人にしうし父母(主師親)なり」とは、大聖人が主師親の三徳を具備された末法の御本仏であることを明かされた、本抄の結論に当たる御文である。一

(私見)池田先生が、「原本」の最初で、一日蓮大聖人こそが人本尊であられる一と明記されているのに対して、「教学部編」は、なぜ、それを削除して、記さないのでしょうか。また、これが本抄の結論とは、全く理解できません。疑問です。

3.「原本」54～57頁には一「一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり」(新54, 全189)の講義で—この御文において日蓮大聖人は、「凡夫成仏」の鍵となる根源の法を「一念三千の法門」と呼ばれ、それが「但法華経の本門・寿量品の文の底」に秘沈されていると述べられています。(中略)

一大聖人は、十界互具が事実として実現する道を、「信」「祈り」「唱題」という、身・口・意の三業にわたる事行の南無妙法蓮華經として確立してくださったのです。そして、いわば見えない自他の仏性への信を開くために、御自身の南無妙法蓮華經の生命を御本尊として顕され、私たちの信心の明鏡としてくださったのです。—

「教学部編」113頁では一法華經では、方便品の「略開三顯一」で成仏の根本法である一念三千が簡略に示され、それによって聴衆は「具足の道」を聞きたいと願った。この「具足の道」について、諸經や種々の注釈を引いて、それが「南無妙法蓮華經」であることを明かされている。この仏のみが知る成仏の根本法が明かされて、はじめて菩薩たちも釈尊の弟子となったのである。—

(私見)「原本」の内容は、「開目抄」で最も重要な御文である— 一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり — を用いた「開目抄」の結論です。それなのに、なぜ、「教学部編」は、この御文を使わず、別の「具足の道」を引用して、「南無妙法蓮華經」を説明するのでしょうか、全く理解できません、疑問です。

4.「原本」74頁には—日寛上人は「三重秘伝抄」で、文底の義として「本因初住の文底」に「久遠名字の妙法、事の一念三千」が秘沈されていると示されています。「初住」とは、仏と成って万人の救済を実現しようと自身の生き方の根本目的が定まった境地であり、どのような困難があろうとも永遠に菩薩道を前進し続け、決して退かないと心が決まった境地です。釈尊が久遠において、永遠の菩薩道を実践し続けることを真に決意したときが、釈尊の久遠実成の「本因」です。しかし、その初住位に登った修行の原動力として、成仏の根源の法である「久遠名字の妙法、事の一念三千」があると言われているのです。「名字」とは「名字即」のことで、妙法を初めて聞いて信ずる凡夫の位です。「久遠名字の妙法」とは、凡夫が実践し成仏を実現する根源の法です。その法とは南無妙法蓮華經であると、直ちに説き示されたのが大聖人であられるのです。—

また、87頁には、⑤種脱相對との表題で—本門文上では、凡夫に即身成仏、一生成仏の道が直ちに開かれたわけではありません。これに対して文底の仏法では久遠の釈尊の初住位までの菩薩行の原動力となり、また、初住位で覚知された根本法そのものである南無妙法蓮華經を直ちに説き示された。その法を求め、そのまま信受すれば、凡夫が直ちに仏果を得ることができる。私たちは大聖人が凡夫の身のままで、南無妙法蓮華經によって己心に成就された仏界の生命をそのまま顕された御本尊を明鏡とし、大聖人御自身を手本として自身に仏界があると深く信ずることにより直ちに自身に仏界を開き顕することができるのです。—

「教学部編」150 頁では一法華經寿量品に「我は本菩薩の道を行じて、成ぜし所の寿命は、今猶未だ尽きず」と説かれているのは、久遠の成道を得るに至った本因を明かしたものである。すなわち、久遠に菩薩道を行じてきたことが成道の本因であり、しかもその菩薩の生命は、久遠における成道後も、そのまま尽きることなく常住の仏である釈尊に具わっている。—

(私見)池田先生は、日寛上人の「三重秘伝抄」を引かれ、釈尊が成仏した本因について、初住位に登った修行の原動力は成仏の根源の法である南無妙法蓮華經であるとして指導され、五重の相對の最後の「種脱相對」を用いて、開目抄の奥義を示されています。また、戸田先生も一本因所住の文底に南無妙法蓮華經が沈んでいる。(中略)我本行菩薩道の文底にあるのではない。我本行菩薩道の本因初住の文底に南無妙法蓮華經が秘し沈められているのであります(戸田講義124頁)一と。私は、この戸田・池田両先生のご教示こそ真義であると拝しております。それに対して、「教学部編」は、我本行菩薩道だけで、本因としています。なぜ、池田先生の初住位の論述を削除したのか、大変疑問です。「教学部編」は、画竜点睛を欠くと言わざるをえません。両先生のご指導をしっかりと後世に伝えて欲しいです。

5.「原本」137頁には一大聖人は、「御義口伝」において「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」(新1059, 全760頁)と仰せです。成仏の修行の明鏡となり、指標となる本尊は、法華經の行者の一身に拝することができます。ここに諸天の守護と法華經の行者をめぐる問題が「此の書の肝心・一期の大事」(新74, 全203頁)と言われるゆえんがあり、また「開目抄」が「人本尊開頭の書」と言われるゆえんがあるのです。—

「教学部編」111 頁で一大聖人は、「此の疑いは此の書の肝心・一期の大事」とまで仰せなのである。すなわち、諸天の加護をめぐる疑問を晴らすことによって、大聖人が法華經の行者であることを明らかにできるので「此の書の肝心」と仰せになり、それは同時に人本尊開頭の意義を著すという意味で「一期の大事」と仰せになっているのである。—

(私見)池田先生が「原本」で引用された—「本尊とは法華經の行者の一身の当体なり」を、「教学部編」は、なぜ用いないのですか。また、「原本」で宣言された—「開目抄」が「人本尊開頭の書」—を記さずに、—人本尊開頭の意義を著すという意味、—という何とも曖昧な表現にしたのはなぜでしょうか。先生のご指導は明確にして欲しいです。大変、疑問です。

6.「**原本**」に290頁には—「日蓮は日本国の諸人にしうし父母(主師親)なり」(新121、全237)、日蓮大聖人こそが末法の主師親の三徳を具備されていると宣言されている一節であり、本抄が「人本尊開頭の書」と言われる根拠もここにあります。—

「**教学部編**」119頁では—「本尊とは、単に尊崇したり、利益を施してくれるものであるだけでなく、自身も獲得・達成すべき智慧・慈悲などの人格的価値を体現している目標といえる。その人格的価値の最大要素は、本抄冒頭に示されたように「主師親の三徳」である。本段(33段)では、揺るぎない幸福を確立するための生命の根本の因果を説いて、あらゆる衆生に対して「主師親の三徳」を具えているのは誰であることを明かし、それは、成仏の根本原因(仏因)である仏種を所持し、久遠から下種してきた「法華經寿量品の久遠実成の釈尊」であると結論づけられている。—

(私見)「**原本**」のご教示は、すべて池田先生の文底からのご指導です。先生は「開目抄」の御文を一往は文上からご教示の後、大聖人のご本意を文底からご指導されています。そして、「**開目抄**」の結論は、大聖人は「**人本尊**」であり、この書は「**人本尊開頭の書**」であります。これは、全編で論述です。それに反し、「**教学部編**」119頁の論述は—人格的価値を体現—だけの文上解釈です。これでは、池田先生の本意が示されていないと思えません。「**教学部編**」の使命は、先生の本意を読者に正確に伝えることではないでしょうか。なぜ、上記の解説で終わっているのでしょうか。大変、疑問です。

「観心本尊抄」と近刊本についての比較

次に、池田先生の「**観心本尊抄**」講義(以後「**原本**」と略)(池田大作全集 第24巻)と、**教学部編**「**観心本尊抄**」(以下「**教学部編**」と略)との重要な論述の比較、6つを示します。なお、適時、戸田先生の「**観心本尊抄**」講義(戸田城聖全集 第7巻)からも参照しました。

1.「**原本**」226,227頁には— 大聖人は「御義口伝」に、次のように教示されております。「御義口伝に云く南無とは梵語なり此には帰命と云う、人法之れ有り人とは釈尊に帰命し奉るなり法とは法華經に帰命し奉るなり」(新984、全708)と。ここに仰せの「釈尊」とは、文底独一本門の教主としての釈尊であり、久遠元初自受用報身、末法御本仏日蓮大聖人御自身であられます。

また「法華經」と仰せられているのも「今末法に入りぬれば余經も法華經も詮なし、但南無妙法蓮華經なるべし」(新1874、全1546)と「上野殿御返事」に示されているごとく、釈尊の二十八品の法華經などでないことは明らかであります。したがって「但南無妙法蓮華經」を指して「法華經」と仰せられたと拝するのであります。(中略)一方に、おいては「人」として仰せられ、他方、法華經の題目、妙法蓮華經という「法」として示されている元意は、人即法、法即人を明かされるにあり、そして、一幅の曼荼羅の御本尊こそ、この人と法とが体一である人法一箇の御当体なのであります。

「教学部編」92 頁では一池田先生の講義から(「人間革命の宗教」)―「開目抄」には、「日蓮といひし者は、去年九月十二日子丑時に頸をはねられぬ」(新102・全223)と、宿業や苦悩を抱えた凡身を開いて、その身のまま、久遠元初の仏の本来の境地を著されたことを明かされています。

「教学部編」185頁では一この南無妙法蓮華經の文字曼荼羅の御本尊は、大聖人の内面に確立された仏の覚りの境地を顕わしたものである。

(私見)「原本」で、池田先生がご教示される久遠元初自受用報身、末法御本仏日蓮大聖人御自身を、「教学部編」では、なぜ久遠元初の仏の本来の境地と変更したのでしょうか。

そして、御本尊こそ、この人と法とが体一である人法一箇の御当体を、「教学部編」は、なぜ、御本尊は、大聖人の内面に確立された仏の覚りの境地を顕わしたものであるとしか記述しないのでしょうか？池田先生の明確な論述「人法一箇」を記さないのでしょうか。本書冒頭から大変、疑問です。

2.「原本」230, 231頁には一大聖人は竜の口、佐渡の法難を以て、法華經に記されている外用の辺の予言をすべて身読し終わり、御自身、久遠御本仏としての内証を確証されるや、初めて御本尊を顕されたのであります。大聖人の御内証においては、久遠の仏としての御境地は、すでに赫々としてあられたと拝察します。

恩師戸田城聖先生は「清澄寺大衆中」の御文を講義された際、大聖人は、虚空蔵菩薩に、日本第一の智者となし給えと祈願された清澄寺在住の時、すでに御本仏と覺られたと拝せる(下段 * 戸田城聖全集第七巻481～482頁)と言われておりました。事実、もし、末法御本仏としての御境界を得ておられなかったならば、三十二歳の立宗宣言もなかったはずであります。時すでに釈尊の白法は隠没した末法であることは明々であり、したがって釈尊の仏法をもって立てられる道理がありません。

釈尊の仏法ではない新たな仏法を立てられたことは、御自身が末法救済の御本仏であるとの御確信があったればこそであります。

しかも、大聖人は二十余年間、釈尊の法華経を身をもって読みきられ大聖人の出現によって、釈尊の法華経は虚妄でなくなったといえるまで実践しぬいて、いよいよ、御自身が御本仏としてのお振る舞いに移られたわけであります。竜の口、佐渡の時期は、まさにこの発迹顕本の時でありました。—

*戸田城聖全集第七巻481～482頁には一どこで大聖人様が、妙法蓮華経の極理を体得せられたかということ、さんざん考えてみたのです。どうしても、この虚空蔵菩薩の御前でなければとしか思えないのです。御年十六の時です。(中略)虚空蔵というのは大宇宙のことをいっている。大宇宙の生命それ自体から、南無妙法蓮華経を証得したと言われているのです。—

「教学部編」167頁では一大聖人は法華経の身読によって、御自身の凡夫の身に己心に本来具わっている、釈尊と等しい仏の境涯を開き顕された。発迹顕本である。
「開目抄」では、その事実を明かされている。その大聖人が、自行化他の御振る舞いとして体現されている一念三千(事の一念三千)、すなわち妙法をそのまま直ちに、末法の凡夫が成仏するための御本尊として顕わされたのである。それが、「観心本尊抄」の真意となる。

(私見)池田先生は「原本」で、戸田先生のご指導一大聖人は、清澄寺在住の時、すでに御本仏と覚られたと拝せる一を引用され、久遠御本仏としての内証を確証と述べられています。それをなぜ、「教学部編」は削除するのでしょうか。これこそが「観心本尊抄」の根本のご教示ではないのでしょうか。また、ここでも(事の一念三千)と、カッコ書きです。なぜ、カッコ内にするのですか。疑問です。

3.「原本」232頁には一人即法の当体としての御本尊は、一住は法本尊であります。再応は人法一箇の御本尊であります。ゆえに「南無妙法蓮華経 日蓮」と中央にしたためられております。南無妙法蓮華経は”法”、日蓮在御判は”人”をあらわすのであります。このように顕された大聖人のお立場に約せば御本尊の根本的特質は「人法一箇」ということですが、では、御本尊を拝する私どもの立場で言えば、何が最も根幹となる特質でありましょうか。それを日蓮大聖人は御自ら「観心」であると教えてくださっているのです。法本尊開頭の書を「観心本尊抄」と題されたのは、このゆえであります。—

「教学部編」10 頁には一「開目抄」は文永9年(1272年)2 月に四条金吾に託して、厳しい迫害に耐えて信仰を続けている門下一同に与え、励まされた。この翌年に執筆されたのが「観心本尊抄」である。両書は、佐渡で著された御書の中でも最重要の二書である。

「開目抄」は、日蓮大聖人が法華經に予言されたとおり実践された末法の「法華經の行者」であり、末法の衆生を救う主師親の三徳を具えられた末法の御本仏であることを明かしている。これに対して、「観心本尊抄」は、末法の衆生が成仏すべき南無妙法蓮華經の本尊について説き明かしている。

(私見)「原本」232頁で「観心本尊抄」における御本尊の相貌を、上記のように詳細に説明されているのに、「教学部編」は、池田先生がご教示の「人法一箇」を記さず、根本義である法本尊開頭の書を「観心本尊抄」と題されたとの大宣言も、全く記さないのは理解できません。はなはだ疑問です。

4.「原本」237 頁には一三大秘法に配して「観心の本尊」を拝するならば、御本尊それ自体が本門の本尊であり、御本尊を信受し唱える題目は本門の題目、御本尊所在の所が本門の戒壇であります。この三大秘法も、究極するところは「観心の本尊」の一大秘法に収まることを知らなければなりません。すなわち、本門の本尊とは、久遠元初自受用報身としての生命それ自体であり、本門の題目は、この無作三身の生命の宝号たる南無妙法蓮華經であります。

「教学部編」には、上記、池田先生が「原本」で、ご教示された日蓮仏法の根本義である三大秘法の記述が削除、どこにも記載されていません。

「私見」三大秘法を示さない本尊論は、画竜点睛を欠いているとしか思えません。三大秘法は日蓮仏法の根本義であり、その上で、一大秘法の「観心の本尊」が論述されるのではないのでしょうか。なぜ、「教学部編」は、この根本義を削除しているのでしょうか。疑問です。

5.「原本」229頁には一御本尊を図顕せられた日蓮大聖人が、法即人であられた事実があります。言い換えると、大聖人の生命をそのまま顕された御本尊が、事の一念三千の当体であるということは「一念三千即自受用身」でありますから、大聖人の生命が自受用身でなければなりません。

「教学部編」186, 187頁では一大聖人が顕わされた文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が釈尊の脇士となっているので、この釈尊は法華經本門寿量品における釈尊すなわち「寿量の仏」である。さらに、その「寿量の仏」そのものが、首題の南無妙法蓮華經の脇士に位置づけられている。これは、南無妙法蓮華經こそがすべての仏を生み出した根本の法であり、ゆえに根本の本尊たるべきことを示している。したがって、この文の趣旨は「寿量の仏」そのものを本尊とするのではなく、「寿量の仏」が多宝仏、四菩薩などとともに脇士となる文字曼荼羅を本尊とすることにある。

(私見)「寿量の仏」は「原本」で池田先生がご教示の「大聖人の生命をそのまま顕された御本尊」により、「教学部編」の下線部、「この釈尊は法華經本門寿量品における釈尊すなわち『寿量の仏』」は誤りだと分かります。この誤りに対して、戸田先生は、戸田城聖全集第七巻 219 頁で一本尊の為体はまったくこれ久遠元初自受用身の当体の相貌であるゆえに、いま「寿量の仏・此の仏像」というのである。また、221 頁には一身延等の文底下種の仏法を知らぬやからが色相莊嚴の釈尊をつくって、あえて間違いとしない理由は、「寿量品の仏」および「此の仏像等」というのを本門寿量の教主釈尊であって、色相莊嚴の画像・木像であると解しているからである。一と破折済みです。

さらには、『日寛上人文段集』502頁に「謂く、前に明かす所の本尊の為体、一毫も動かず、全くこれ久遠元初の自受用身の当体の相貌なり。故に今『寿量の仏乃至此の仏像』というなり」とあります。これは日寛上人が『寿量の仏』について、人法体一の意義から曼荼羅本尊の姿は全く久遠元初の自受用身であると言われているのです。

これらのご教示により、結論として、教学部編「観心本尊抄」は池田先生が終始一貫して引用された日寛上人と戸田先生のご教示に違背していると言えます。日蓮は釈迦仏を本尊としないので、ここで言う「寿量の仏」とは久遠実成の釈迦仏ではなく、寿量品が暗々裏に示した根源仏と解さなければならないのです。

「寿量の仏」を釈尊とすることは「教学要綱」の78頁、79頁と同じです(教学要綱では、根本の法が「能生」と表記)。これが誤りであることは分かりづらいです。「寿量の仏」を釈尊とすることが、「教学要綱」の最大の誤りであり、大聖人の曼荼羅本尊を否定しているのではないのでしょうか。大きな疑問です。

6. 「原本」234, 235頁には一「観心本尊抄」の題号をめぐって、第二十六世日寛上人は「観心の本尊」と読むべきことを強調され「”の”の字を形見と思え」と仰せられたことは、あまりにも有名であります。

それは「心の本尊を觀る抄」とか「心を觀る本尊抄」とかの、大聖人の本意から外れた邪義を破して言われたものでありますが、それ以上に「教相の本尊」に対して「觀心の本尊」であることを明示せんがためであられたのであります。

「教相の本尊」とは「文上脱益・迹門理の一念三千」であり、それに対し「文底下種・本門事の一念三千」を「觀心の本尊」と言います。すなわち、釈尊の説いた脱益の文上の一念三千ではなく、文底秘沈の下種の一念三千こそ、大聖人の顯された御本尊の正体であるということが、ここでの論議の主題であることは言うまでもありません。

「教学部編」16 頁では一題号の元意は、「末法の初めに、上行菩薩、すなわち末法の御本仏・日蓮大聖人が初めて弘通され、一切衆生が信じる対象となる、本門の本尊を明かされた御抄」と拝せるのである。「觀心の本尊」と「の」の字を入れて読むのは、爾前権教、法華經迹門、そして法華經本門の經文上に説かれる「教相の本尊」と区別する意味がある。

なぜなら、大聖人が顯される御本尊は、大聖人御自身の觀心、すなわち大聖人が御自身の凡夫の身の己心に成就された一念三千(事の一念三千)を、末法の衆生の修行における明鏡として顯された本尊であり、經文上の仏や菩薩を本尊とする「教相の本尊」ではないからである。

(私見)「教学部編」での記述—「觀心の本尊」と「の」の字を入れて読む—、これは日寛上人の最重要のご指導です。日寛上人が「”の”の字を形見と思え」と言われた論考を、日寛上人のお名前を明記しないまま、一と拝せる一、一意味がある一と、私見の如くに論述するのは如何なものでしょうか。疑問です。

また、「原本」の—釈尊の説いた脱益の文上の一念三千ではなく、文底下種の一念三千こそ、大聖人の顯された御本尊—も「教学部編」では、末法の衆生の修行における明鏡として顯された本尊、と—「文底下種」—を削除し、実に曖昧な文上解釈になり、さらに、「事の一念三千」も括弧内となり、まるで二次的意味にされたのはなぜでしょうか。大変、疑問です。

以上で、「御義口伝講義」「開目抄」「觀心本尊抄」と近刊本の比較を終えます。結果、やはり、大変な改竄の実態です。

6. 池田先生の海外での人法一箇と久遠元初の自受用身如来のご指導を紹介、これにより、上記二つのご指導を無視した「教学要綱」が世界へ発信されても無意味であることを記す。以下、海外及びSGIでのご指導です。

まず、人法一箇のご指導です。

シカゴ会館での勤行会 人法一箇 1980.10.11 「広布と人生を語る」第1巻

いま、凡下の私どもが日蓮大聖人の信徒として、人法一箇の御本尊の功力を人々に教える実践に邁進している。ゆえに、御書に照らして多くの難をうけることもまちがいないといえる。だが、それに耐えながら、妙法という「法」を第一義として、身軽法重の精神で進んでいくならば、すべてを開いていくことができるのである。

アメリカ広布20周年記念シカゴ総会 人法一箇

1980.10.12 「広布と人生を語る」第1巻

御書はいうまでもなく御本仏日蓮大聖人御自身の御執筆によるものであり、全宇宙総体を貫く根本の「法」を明らかにし、信心の正しい姿勢、実践を厳格にお説きになったものである。御書を拝すれば、人法一箇の御本尊の相貌、永遠不変の「法」のいかに偉大であるかということ、大聖人こそ、その永遠不変の法と一体の御本仏であるという御内証が明らかである。

ハワイでの第一回御書研鑽会 人法一箇 1981.1.19 「広布と人生を語る」第1巻

「開目抄」は、日蓮大聖人が流罪の地・佐渡において文永九年（一二七二年）二月にしたためられ、日蓮大聖人を勇敢にお護り申し上げた四条金吾という信者を代表として、門下一同におあたえくださった御書である。本抄は、日蓮大聖人こそが、末法の御本仏すなわち「人本尊」であられるという御内証を、明確に宣言された重要な御書である。その翌年、文永十年（1273年）には、同じく佐渡の国において法本尊開頭の書、すなわち「観心本尊抄」を著されている。ここに、末法永遠にわたる人法一箇の大御本尊御建立への理論的基盤がととのったといえる。

日米友好交歓会 人法一箇

1981.8.25 「広布と人生を語る」第2巻

日蓮大聖人の仏法は、南無妙法蓮華経という大法が根本である。「法」は南無妙法蓮華経、「人」は日蓮大聖人で、人法一箇の御本尊と申し上げる。ゆえに、この御本尊根本の信心、またこの大法たる南無妙法蓮華経が、あくまでも大事のなかの大事なのである。

アメリカSGI 青年研修会 人法一箇

1990.2.20(池田大作全集第 74 卷)

御本尊には、変転する大宇宙（諸法）の実相、ありのままの姿が完璧に示されている。この宇宙の実相とは、私ども小宇宙の場合もまったく同じである。これらは御書に仰せのとおりである。また御本尊は「人法一箇」であられ、御本仏の御境界を示されたものであることは言うまでもない。この意味で、大聖人の御本尊こそ、文字どおり全人類が「尊敬」すべき宇宙の「根本」であり、真実の「本尊」であられる。

香港広布三十周年記念総会 人法一箇

1991.1.28 (池田大作全集第 76 卷)

戸田先生は、亡くなる前年の正月、こう言われた。「新年の初頭にあって、吾人（＝私）が同志にのぞむものは、老いたるにもせよ、若きにもせよ、生活に確信ある希望をもち、その希望のなかに生きぬいてもらわなければならないことである。いうまでもなく、その希望に生きぬく生命力は御本仏日蓮大聖人の御生命である人法一箇の御本尊にあることを銘記すべきであろう」

「創立の日」記念SGI 代表勤行会 人法一箇 1991.11.18(池田大作全集第 79 卷)

「産湯相承事」（同 878 頁）では、大聖人の本地（本来の境地）は自受用報身如来であられ、垂迹の上行菩薩の再誕として出現されたこと、日蓮と名乗られた意義、弟子に日号を与える理由などが明かされている。「本因妙抄（法華本門宗血脈相承事）」（同 870 頁）では、大聖人の法門と、釈尊・天台の法門との勝劣を明かし、寿量品の文底の秘法である、事の一念三千の南無妙法蓮華經こそが、末法の衆生を即身成仏させる大法であることが示されている。このように、日興上人に付嘱された法門は、すべてが人法一箇の大御本尊を指し示されたものであり、その裏付けとなる法理と拝される。

第 1 回タイ総会 人法一箇

1994.2.8 (池田大作全集第 84 卷)

妙法は大宇宙の根源の法である。その法を久遠元初以来、悟り、所持されているのが日蓮大聖人であられる。人法一箇の妙法であり、御本尊にも「南無妙法蓮華經 日蓮」とおしたためである。この御本尊を信じ、日蓮大聖人直結の信行を貫くとき、小宇宙である私どもの生命が、大宇宙の根本のリズム、妙法のリズムと合致し、宇宙を自在に遊戯する境涯となっていく。

SGI の皆様が拝読の「新・人間革命 6 巻、若鷲の章, p. 339」には一「帰命する対境には、「人」と「法」がある。「人」とは文底の釈尊であり、人本尊である日蓮大聖人です」と。これらにより、人法一箇を示さない「教学要綱」は、SGI では、今後ともに受け入れ不可能なのです。 109/124

また、以下、池田先生の海外での**久遠元初の自受用身如来**のご指導です。

第一回アメリカSGI最高会議 **久遠元初の自受用身**

1993.9.16 (池田大作全集第 83 卷)

一切衆生を仏に——御本尊弘通の目的

大聖人が、御本尊を御図顕なされた目的は、一切衆生に「仏に成る血脈」を継がしめること、すなわち成仏させることであった。

生死一大事血脈抄には、「日本国の一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脈を継がしめんとするに・還つて日蓮を種種の難に合せ結句此の島まで流罪す」——日蓮は日本国の一切衆生に、法華經（御本尊）を信じさせて、仏に成る血脈を継がせようとしているのに、かえって日蓮を種々の難に遭わせ、あげくの果てには、この佐渡の島にまで流罪にした——と仰せである。

日寛上人も、“我等衆生が御本尊を受持する時、凡夫の身が、そのまま**久遠元初の自受用身**となる。それが「師弟不二」である”と仰せになっている。すなわち、次のようにある。「この本尊を受持する衆生は皆久遠元初の仏道に入る（中略）即ち久遠元初の仏道に入る我等衆生の凡身の当体、全くこれ**久遠元**

初の**自受用身**なり。自受用身の当体、全くこれ我等衆生なり（中略）**あに** 豈 師弟不二に非ずや」（文段集四八八㊟）御本尊を護持し、弘通して、一切衆生に御本尊を信受させ、成仏させることが、大聖人門下の使命なのである。

香港・関西合同総会 **久遠元初の自受用身**

1994.2.11 スピーチ(1993.12～)(池田大作全集第 84 卷)

日寛上人「凡身の当体、全くこれ**久遠元初の自受用身**なり」

日蓮大聖人の仰せによれば、妙法に生きる私どもは、毎日が元日である。毎日が久遠元初である。毎日が最高に素晴らしい日々の連続である。毎日が、すべての価値を含んだ、有意義な記念の日であり、おめでたい宝の日なのである。日寛上人は、「観心本尊抄文段」（文段集四八八㊟）でこう述べられている。この本尊を受持する衆生は皆、“久遠元初の仏道”に入るので……すでに“久遠元初の仏道”に入った我ら衆生の凡夫の身は、まったくこれ“**久遠元初の自受用身**”なのである——と。自受用身とは、“（広大な法樂を）ほしいままに受け用いる身”（御義口伝、御書 759 ㊟）のことであり、楽しく、自由自在の仏の大境界である。きょうは、お正月でもあり、教学上の難しい話は略させていただきますが、大聖人の仏法を持った私どもは、常に「久遠元初」という宇宙の本源の大生命に立ち返り、そこから出発できるのである。そこには惰性はない。停滞もない。行き詰まりもない。過去の宿命的な因果の鎖にも縛られない。

平等大慧の人間仏法を宣言

日寛上人は、仰せである。「暫くもこの本尊を信じて南無妙法蓮華經と唱うれば、則ち祈りとして叶わざるなく、罪として滅せざるなく、福として来らざるなく、理として顕れざるなきなり」(文段集四四三)と。全世界のSGIのメンバーが、日寛上人の御書写の御本尊を拝し、功德爛漫の実証を示していることを、何よりも、お喜びになられているに違いない。日寛上人は、こうも仰せである。「この一念三千の本尊は全く余処の外に在ること無し。但我等衆生の信心の中に在す」(文段集四六五)また、「この本尊を受持する衆生は皆久遠元初の仏道に入る」(文段集四八八)「既に久遠元初の仏道に入る我等衆生の凡身(＝凡夫の身)の当体、全くこれ久遠元初の自受用身(＝広大な法の楽しみをほしいままに受け用いる仏身)なり」(同)と。そして、「我等この本尊を信受し、南無妙法蓮華經と唱え奉れば、我が身即ち一念三千の本尊、蓮祖聖人(＝日蓮大聖人)なり」(文段集五四八)と。

久遠元初の自受用身「方便品・寿量品」講義 (池田大作全集第 35 卷 202 頁)

大聖人” 宇宙根源の妙法を自在に用いる大境涯”

日蓮大聖人は、文永八年(一二七一年)九月十二日の竜の口の法難を契機に「発迹顕本」されました。「開目抄」に「日蓮といふし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ、此れは魂魄・佐土の国にいたりて」——日蓮と言っていた者は去年(文永八年)九月十二日の子丑の時(夜半すぎ)に凡身の頸を刎ねられた。これは、魂魄が佐渡の国に至ったのである——と。この一節について、日寛上人は次のように述べられている。

「この文の元意は、蓮祖大聖は名字凡夫の御身の当体、全くこれ久遠元初の自受用身と成り給い、内証真身の成道を唱え、末法下種の本仏と顕れたまう明文なり」(「開目抄文段」文段集一九二ページ)と。すなわち、凡夫の身のうえに久遠元初の自受用身の生命を顕された——これが、大聖人の「発迹顕本」です。大聖人の御内証の本地——それは、久遠元初の自受用身であられる。自受用身とは「ほしいままにうけもちいるみ」(御書七五九)です。すなわち、宇宙全体を「自身」と開き、宇宙根源の妙法の力用を自由自在に受け用いる宇宙大の境涯です。

SGIの皆様が拝読の人間革命第6巻 推移の章には—「釈尊が迹仏であることは、言うまでもない。だが、それは久遠元初の自受用身(大聖人)を本佛とするがゆえ」—と。ゆえに、久遠元初の自受用身(大聖人)を示さない「教学要綱」は、SGIでは、今後ともに受け入れ不可能なのです。 111/124

7. 「教学要綱」の「五重の相對」（68～73）と「本門の本尊」（77, 78頁）の記述の不正について破折します。



ここまで、創立 95 周年の学会教学があまりにも不正で、酷い実態であるかを記し置きしました。まるで、**太陽である日蓮大聖人の真実の仏法**が、暗雲によって遮られているようです！そして、それがいかに日蓮仏法の真義に違背していて、池田先生の本当のご指導を改竄したものであるか、私は怒りでいっぱいです。今、私は、先生の獅子吼 <https://x.com/TY0EQfB82xwHa0s/status/1933351526485143981> での

「自分の信じる思いをどんどん言ってゆけ！」を拝し破邪顕正の決意です。よって、最後に、「教学要綱」の最悪の邪義—五重の相對の記述（69～73頁）と本門の本尊の記述（76～77頁）について破折します。

まず、「五重の相對」とは仏法と仏法以外〈内外相對〉、大乘と小乗〈大小相對〉、法華經と法華經以外的大乗〈權実相對〉、法華經の本門と迹門〈本迹相對〉、日蓮大聖人の下種仏法と釈尊の脱益仏法〈種脱相對〉を比較相對して、正法を選びとっていく「宗教批判の原理」の一つ（「法華經の智慧」第5巻239頁より）です。

「教学要綱」は以下記述です。一小題「五重の相對」「五重三段」で、一日蓮大聖人が末法の衆生が成仏するための教えを探究し、『法華經』の肝心として「**南無妙法蓮華經**」を選び取っていかれた思索の過程については、「**開目抄**」と「**觀心本尊抄**」において詳細に論述されている。その教判の枠組みは、「五重の相對」と「五重三段」として、それぞれ後代に整理・解釈された。（中略）⑤**種脱相對**の解説を通じて、**大聖人は、「南無妙法蓮華經」という「題目の五字」（御書139頁）が末法的一切衆生の成仏を可能にする法であるとされたのである**—と。（68頁～73頁）

しかし、池田先生は、五重の相對について「**開目抄講義**」において以下ご指導なのです—**五重の相對**によって因果觀が深まると、尊敬されるべき主師親の意義も深まってくる。（中略）**五重の相對**は、究極の因果を示すことで、人生を常に向上に導く最高の指標を指し示す教えです。そして、最終的には、末法の凡夫が一生成仏を遂げていくための最高の手本となる**至高の主師親を示した法理**なのです。「開目抄」は、末法の万人に向かって、凡夫成仏の手本である法華經の行者・日蓮大聖人を明らかにされた書である。それゆえに「**人本尊開顯の書**」と言われるのです—と。（池田大作全集第34巻88～90頁） 112/124

また、池田先生は「**観心本尊抄講義**」（池田大作全集24巻）で以下ご指導です。一この人即法の当体としての御本尊は、一往は法本尊でありますが、再往は**人法一箇の御本尊**であります。ゆえに「南無妙法蓮華經 日蓮」と中央にしたためられております。南無妙法蓮華經は“**法**”、日蓮在御判は“**人**”をあらわすのであります。このように顕された大聖人のお立場に約せば、御本尊の根本的特質は「**人法一箇**」ということではありますが、では御本尊を拝する私どもの立場で言えば、何が最も根幹となる特質でありましょうか。それを日蓮大聖人は御自ら「**観心**」であると教えてくださっているのであります。**法本尊開頭の書**を「**観心本尊抄**」と題されたのはこのゆえであります—と。（229頁）また、主師親三徳具備の**人本尊**を開頭せられた「**開目抄**」（中略）そして、末法の**人本尊**としての御本仏日蓮大聖人の御生命は、一切そのまま、観心の御本尊の中に移されているとの深意であります。**大聖人即御本尊、御本尊即主師親三徳具備の御本仏**との甚深の義を深く拝する（池田大作全集24巻305頁）—と。

また、池田先生は五重の相対について、ハワイでの第一回御書研鑽会以下ご指導です。一御書を拝読する場合「一往、再往」という立て方がある。さらに「総、別」「文上、文底」「**三重秘伝**」「四重興廃」「五重相対」というたいへん深い次元のとらえ方がある。こうした規範、原理を基に、仏教のあらゆる法門を理論的、系統的に明確に把握し、その高低、浅深を分析していけば、その最高峰は、**南無妙法蓮華經の大御本尊という一大秘法**になってくる。その一大秘法を開けば三大秘法となり、それをさらに開いていけば、八万法蔵の仏教全体へと広がっていくのである。—と。（1981.1.19「広布と人生を語る」第1巻）

上記、池田先生の本当のご指導により（前頁の）「教学要綱」が「五重の相対」の論述で、「開目抄」と「観心本尊抄」を掲げ、結論として— **大聖人が『法華經』の肝心として「南無妙法蓮華經」を選び取っていかれた—と。**
そして、⑤種脱相対の解説を通じて、大聖人は、「**南無妙法蓮華經**」という「**題目の五字**」（御書139頁）が末法の一切衆生の成仏を可能にする「**法**」であるとされたのである—と記したのは、池田先生の「開目抄講義」と「観心本尊抄講義」でのご指導—**日蓮大聖人は人本尊**—により完全な偏向、不正である！と言えるのです。また、これは種脱相対の本義ではないのです。

南無妙法蓮華經を「法」だけと結論付けてはならない。日蓮仏法を単法本尊論で偏向してはならないのです！

これは「教学要綱」が、一大秘法を南無妙法蓮華經の御本尊からただ単なる南無妙法蓮華經、すなわち「法宝」へと突然変更したのと同じ底意なのです。つまり**単法本尊論**なのです！そして、池田先生が五重の相對の究極の意義として、**日蓮大聖人が人本尊**であるとご指導なのに、それを完全に無視し、違背しているのです！

また、池田先生は五重の相對について同じく「**開目抄講義**」において、**種脱相對**を、以下ご指導です。 —御本尊を明鏡とし大聖人を手本として—

⑤**種脱相對** 本門で即身成仏の道が開かれたといっても、文上では久遠実成以前に実践していた菩薩道の修行によって永遠の寿命を得て、初めてそうだったのである。永遠の寿命を得るには不退位である初住位にまで至らなければならない。初住位にまで至って、確固たる信で無明を破り、智慧を得て、自身の生命に九界も仏界も常住することを覚知したのである。

ただし、初住位までの修行も困難なものであり、またそこから智慧を開いて、実際に己心の仏界を覚知することも困難です。凡夫がどうてい為しうることではない。したがって、本門文上では凡夫に即身成仏、一生成仏の道が直ちに開かれたわけではありません。これに対して、**文底の仏法**では、久遠の釈尊の初住位までの菩薩行の原動力となり、また、初住位で覚知された根本法そのものである南無妙法蓮華經を直ちに説き示された。その法を求め、そのまま信受すれば、凡夫が直ちに仏果を得ることができる。私たちは**大聖人が凡夫の身のままで南無妙法蓮華經によって己心に成就された仏界の生命をそのまま顕された御本尊**を明鏡とし、大聖人御自身を手本として、自身に仏界があると深く信ずることにより、直ちに自身に仏界を開き顕することができるのです—と。

この池田先生のご指導は「教学要綱」の小題「五重の相對」「五重三段」—日蓮大聖人が、末法の衆生が成仏するための教えを探究し、『法華經』の肝心として「**南無妙法蓮華經**」を選び取っていかれた思索の過程については、「**開目抄**」と「**觀心本尊抄**」において詳細に論述されている。その教判の枠組みは、「五重の相對」と「五重三段」として、それぞれ後代に整理・解釈された。（中略）⑤**種脱相對**の解説を通じて、**大聖人は、「南無妙法蓮華經」という「題目の五字」（御書139頁）が末法の一切衆生の成仏を可能にする法であるとされたのである—**（68頁～73頁）が、御本尊の記述なき完全な不正であることを裏付けます。このような、「法」だけの偏向は邪義なのです！これでは池田先生がご指導の**種脱相對の本義**と全く違背した**単法本尊論**であり、それは、池田先生のご指導のどこにもないのです！

また、そもそも「教学要綱」が、これまで学会教学の根本であった「僧宝は日興上人、広げていえば創価学会」一を、いきなり「創価学会」だけに変更（159頁）したことも、日興上人への冒瀆、違背なのです。そして、「五重の相對」の枢要、根本である「種脱相對」とは日興門流の言い方であり、五老僧が教觀相對（教相と觀心の相違という意味）という言い方をするのは全く異なるのです。この種脱相對という表現でなければ、種熟脱の法理に照らした両者の相違が明確になりません。日興門流と他門流の違いなのです。

よって、日興上人を僧法からいきなり外した「教学要綱」が五重相對、就中、種脱相對を語る資格はないのです！「教学要綱」が記す五重相對からの結論—大聖人は、「南無妙法蓮華經」という「題目の五字」(御書139頁)が末法の一切衆生の成仏を可能にする法であるとされたのである—との論述（68頁～73頁）—は、その大前提が崩壊なのです！さらに言えば、「教学要綱」は日蓮仏法の清流である日興門流から逸脱した我流なのです！

五重の相對の全体を包括的に示された御書は開目抄が唯一のものです。また、五重の相對と同じ趣旨の教義は「五重三段」「四重の興廢」という形で「觀心本尊抄」など他の御書にも示されています。

池田先生は以下ご指導です。—御書を拝読するにあたっては、五重の相對をはじめとして、種熟脱、五重三段、三重秘伝、六種の釈尊、あるいは一往再往、総別の二義等を基礎としていくことが大切である。その意味から、御書の現代的展開も、これらの原理を正しく基盤にしてなされなければならない—と。（「広布第二章の指針」第12巻）

このご指導からも、「教学要綱」が五重の相對から導いた日蓮仏法を単なる「法」としか示さない御書の現代的展開は、日興門流の根本義を弁えない邪義なのです。

先日、先輩から以下、五重の相對についての分かり易い論考を頂きました。

一仏の力、教えの偉大さを測るのは、因果論の有無（内外相對）、多くを救えるか（大小相對）、理屈か現実か（権実相對）、本門か迹門か（本迹相對）、容易か難事か（種脱相對）の五重相對があります。同じように時間的比較による教えの効力を考えてみました。

釈迦の教えは釈迦在世から正法、像法時代の二千年で白法隠没。また、釈迦は五百塵点劫のはるか昔に菩薩行を行って仏になり多くの人を救済してきた。確かに長い年月でしょう。しかし所詮、時間的限界があります。一方、日蓮大聖人は末法の御本仏であり**久遠元初自受用身無作三身如来（人法一箇の南無妙法蓮華經の御本尊）**は無始無終、末法万年尽未来際にわたって人々を救済する力を持つ。

つまりその効力は時間的限界がなく永遠。時間的比較によれば、釈迦仏法が芥子粒なら日蓮大聖人の仏法は宇宙大であり比較にならない偉大な教えということになります。ゆえに、男子部教学室の主張―「釈尊も大聖人も、根本の法である南無妙法蓮華經によって仏になったのであり、上下・勝劣関係にあるものではない。」は完全な誤りであり、笑止千万です。―と。私も全く同感です！

次に「教学要綱」の「本門の本尊」（77, 78頁）の記述の不正を破折します。ここでも、中村誠氏から以下の論考を頂きました。―

池上本門寺の非常に面白い資料を見つけました。これです。[池上本門寺歴史探検 https://honmonji.jp/read/rekishitanken02.html](https://honmonji.jp/read/rekishitanken02.html) 教学要綱の本尊観とほぼ同じです。題目の脇士にインドの金ぴかの釈尊と多宝如来が来て、その脇士に4菩薩が来るというものです。一方で戸田・池田先生の教えというのは、題目の脇士の釈迦・多宝は、大聖人の己心の仏界を顕すもので、現実世界の釈迦がここにきているわけではないということです。5老僧門流の本尊と比較することで、教学要綱の邪義がより鮮明になります―と。

上記へ、イタリアの同志から一僕もこれ見て同感ですね。しかも金ピカの釈迦多宝の間に南無妙法蓮華經が小さく書いてあるのも変ですね。仏像をありがたがる気持ちに日蓮仏法の革命性への無理解が現れています。そもそも池上本門寺の開祖である日朗が身延から日蓮大聖人が「墓所の脇に置くべし」と言われた一体仏を盗み去ったのもその現れです。しかも大聖人は、逝去の前日に弟子が枕元に置いたこの一体仏を敢えて避けさせて文字曼荼羅を掛けさせたという事実で大聖人のご真意が如実に現れております。―と。同感です！

そして、私は、「教学要綱」の**本尊論**も、この日蓮宗の誤った教義と酷似している！と。以下、「教学要綱」の記述です。―

「教学要綱」78, 79頁には一大聖人が顕された文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が**釈尊**の脇士となっているので、この釈尊は『法華經』本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」である。さらに、その「寿量の仏」そのものが、首題の「南無妙法蓮華經」の脇士に位置づけられている。これは、「南無妙法蓮華經」こそがすべての仏を生み出した能生として、根本の本尊たるべきことを示している。したがって、先の文の趣旨は、「寿量の仏」そのものを本尊とするのではなく、「寿量の仏」が**多宝仏、四菩薩などとともに脇士となる文字曼荼羅を本尊とすることにある。**そして、「末法に來入して始めてこの仏像出現せしむべきか」(御書136頁)とあるように、この御本尊は、結要付嘱を受けた上行菩薩等の四菩薩が末法に出現して、末法の衆生のために初めて顕すのである。よって、「この仏像」の意味は、文字曼荼羅の御本尊と解すべきである。一とあります。

(私見) 最も重要な本尊について、何とまどろっこしい屈折した言い方か！ 訳わからない！ 理解できない！ 邪義の押し付けである！ 「寿量の仏」を釈尊とすることが、「教学要綱」の最大の誤りであり、大聖人の曼荼羅本尊の否定だ！

池田先生は**寿量品の仏**について以下(二つ)ご指導です。

じゅりようほんのほんしゅ【寿量品の本主】
寿量品の教主、寿量品文底の釈尊のこと。御義口伝に「今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は寿量品の本主なり、惣じては迹化の菩薩此の品に手をつけいろへきに非ざる者なり」(七五三頁)と述べられているように、寿量品の本主とは寿量品文底の仏すなわち日蓮大聖人およびその門下のことである。

1. 大聖人様は御義口伝に『今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は寿量品の本主なり』と仰せになっております。

寿量品を説かれた釈尊が本主ではありません

ん。 真実の信心を持ち、南無妙法蓮華經の当体となった

我々こそが**寿量品の本主**であります。**寿量品の仏**であります。この寿量品の文底の南無妙法蓮華經を行ずるが故に、本門寿量の当体蓮華仏とは我々のことであると、深く信心を以て確信していかなければならないのであります」と(中略)寿量品は一切經の要中の要である。

その**寿量品の本主は、別しては御本仏・日蓮大聖人**であられ

る。そして大聖人は、もったいなくも、総じて**私ども門下をも「寿量品の本主」**に含めてくださっている。(第十六回本部幹部会 **寿量品の仏** 1989.4.19 (池田大作全集72巻)) (仏教哲学大辞典第三版891頁) 一と。

2. 妙法蓮華經こそ久遠実成の仏の実体であり、

釈尊をはじめ、すべての仏は妙法の働きなのです。こうとらえ

るのが**寿量文底の法門**です。ゆえに大聖人は「**妙法蓮華經こそ本仏**」であると述べられています。そして、この**文底の立場から「如来寿量品」の「如来」とは「南無妙法蓮華經如来」、すなわち大聖人御自身**であると宣言されているのです。さらに大聖人は、

「**今日蓮等の類い南無妙法蓮華經と唱え奉る者は寿量品**

の本主なり」と述べられています。（**寿量品の本主** 「方便品・寿量品」

講義（池田大作全集第35巻））一と。

また、池田先生は、以下ご指導です。－三大秘法に配して「観心の本尊」を拝するならば、御本尊それ自体が本門の本尊であり、御本尊を信受し唱える題目は本門の題目、御本尊所住の所が本門の戒壇であります。この三大秘法も、究極するところは「観心の本尊」の一大秘法に収まることを知らなければなりません。すなわち、本門の本尊とは**久遠元初自受用報身としての生命それ自体**であり、本門の題目は、この無作三身の生命の宝号たる南無妙法蓮華經であります。すでに挙げた「法華經の題目を以て本尊とすべし」（御書三六五頁）との「本尊問答抄」の御文に照らしても明白であります。（中略）

釈迦仏、多宝仏を脇士とし、更に上行等の四菩薩を釈迦仏、多宝仏の脇士としている久遠元初の仏を中心にした戒壇即本尊は、正像に未曾有であり、これが大聖人御建立の「観心の本尊」なのであります。三大秘法も「大御本尊」に収まる「観心本尊抄講義」（池田大作全集第24巻237、238頁）一と。

故に、「教学要綱」の「この釈尊は法華經本門寿量品における**釈尊すなわち『寿量の仏』**は誤りなのです！

また、戸田先生も、戸田城聖全集第七巻219頁で一本尊の為体はまったくこれ**久遠元初自受用身の当体の相貌**であるゆえに、いま「**寿量の仏・此の仏像**」というのである。また、221頁でも一身延等の文底下種の仏法を知らぬやからが色相莊嚴の釈尊をつかって、あえて間違いとしない理由は、「**寿量品の仏**」および「**此の仏像等**」というのを本門寿量の教主釈尊であって、色相莊嚴の画像・木像であると解しているからである。一と破折されています。

さらに、続く—その「寿量の仏」そのものが、首題の「南無妙法蓮華經」の脇土に位置づけられている。これは、「南無妙法蓮華經」こそがすべての仏を生み出した能生として、根本の本尊たるべきことを示している—と、勝手な曲論が続きます！

(私見) このようにして、最初の邪義—釈尊、すなわち「寿量の仏」—を、そのままにし、我流の三段論法により—「南無妙法蓮華經」こそがすべての仏を生み出した能生として、根本の本尊—との最終の我見、曲論を押し通すのだ！

また続けて、—したがって、先の文の趣旨は、「寿量の仏」そのものを本尊とするのではなく、「寿量の仏」が多宝仏、四菩薩などとともに脇土となる文字曼荼羅を本尊とすることにある。—として、釈尊が「寿量の仏」であるとの邪義から始めた曲解を最後まで続け、多宝仏、四菩薩などとともに脇土となった曼荼羅の本尊なんだ—との誤った首尾一貫性、結論を勝手にしているのです！

最後には、—そして、「末法に來入して始めてこの仏像出現せしむべきか」(御書 136 頁)とあるように、この御本尊は、結要付嘱を受けた上行菩薩等の四菩薩が末法に出現して、末法の衆生のために初めて顕すのである。よって、「この仏像」の意味は、文字曼荼羅の御本尊と解すべきである—と。御書の御文までも我見、曲解して論述しているのです！

また、以下「立正大学教授庵谷行亨氏の講演」をご参考下さい。これを読むと、結論、教学要綱が日蓮宗教義と同義なのが分かります。日蓮大聖人を「教学要綱」と同じく上行菩薩止まりとしている。そして、日蓮宗一派は、大聖人を末法の大導師と表現し、現在の創価学会は末法の御本仏と呼称している。内容は同じで呼称名が違うだけなのです！上記により、私の結論は以下です。

『教学要綱』と身延派の教義との酷似は明らかです。すなわち『教学要綱』は日蓮仏法の正統教義を破壊する大謗法、大邪義の書なので

す。このことを多くの人に知らせていかなければなりません。

庵谷行亨氏の講演

<https://genshu.nichiren.or.jp/genshu-web-tools/media.php?file=/media/shoho40-08.pdf&type=G&p=1461> この論文の主意を次頁にまとめました。

立正大学教授庵谷行亨氏の講演内容より

日蓮宗は、久遠実成本師釈迦牟尼仏から、その本懐である法華経を、末法に弘通することを付嘱された、本化上行菩薩の応現日蓮聖人が開創唱導した真実の仏法を開顕する仏教正統の宗団である。(122頁)

日蓮大聖人は、この地涌の菩薩の中心の菩薩である上行菩薩としての自覚をお持ちになりました。自覚者です。それで分かりますように、釈尊から地涌の菩薩へ、地涌の菩薩の中心は上行菩薩、上行菩薩の自覚者が、日蓮大聖人ということになります。法華経の教えの中では、仏様が地涌の菩薩に付属なさいます。付属とは委嘱する、お願いする、委託する、ということです。何をどういう風に委託したのか。一つは、仏様が入滅された後の、末法という時代における教えの弘通。これを弘教といいます。末法時の弘教、仏様が入滅された後の末法時に出現して法を弘める。そして、もう一つがその法です。末法の大法、題目、南無妙法蓮華経の五字七字です。即ち、法を弘めるということと、その弘める法は題目であるということ、お釈迦様が地涌の菩薩、特に上行菩薩を中心とした菩薩方に付属なさるといことがあります。これが付属の内容です。(123, 124頁)

仏様をご本尊としてお祀りする時にはその脇士となります。それが一尊四士といわれる姿です。四菩薩を脇士にされているお姿を見ると久遠の仏様だと分かるのです。四菩薩は仏様から付属を受けた、最も法華経を世に弘める責任を担った菩薩方であるということになります。そして、ご本尊をお祀りする時には、仏様の左右の脇士になられる方です。(133頁)

(私見) まさに、上記、身延派日蓮宗の邪義と「教学要綱」の「日蓮大聖人は、単に釈尊から託された「南無妙法蓮華経」を弘める菩薩である」(91頁)、そして、本尊論は酷似している！と断じます。

さらに、中村誠氏から以下、論考を頂きました。鋭い破折、正論です！－

「教学要綱」78, 79頁には一大聖人が顕された文字曼荼羅の御本尊は、上行等の四菩薩が**釈尊**の脇士となっているので、この**釈尊**は『法華経』本門寿量品における釈尊、すなわち「寿量の仏」である－と。

この、寿量の仏を釈迦とする教義ですが、それなら御観念文には、「永遠の根本仏であられる教主釈尊に南無し奉り、報恩感謝申し上げます」という祈祷文がなければ完全におかしいことになります。如来寿量品は釈迦を称える經典ですから、その根本仏に対して御祈念せず、釈迦の使いにすぎない大聖人に御祈念するというのは完全に矛盾しています。

そして、牧口・戸田・池田先生がそのように釈迦に対して御祈念されたという史実は存在しないということです。寿量の仏とは「天竺の仏は迹仏なり、今日本国に顕れ玉うべき釈迦は本仏なり」（『富士宗学要集，日順雑集』第2巻 p.113）或いは、*「人とは、文底の釈尊」（新・人間革命6巻、若鷲の章, p. 339）でなければならない。

（*伸一は、「御義口伝」の御文に即して講義を進めていった。（中略）南無というのは梵語である。つまり、古代インドの文章語であるサンスクリットの音訳です。これを意識すれば『帰命』となる。帰命とは身命を捧げ尽くすことです。その帰命する対境には、『人』と『法』がある。『人』とは、文底の釈尊であり、人本尊である日蓮大聖人です。『法』とは、末法の法華経であり、法本尊である。南無妙法蓮華経です。つまり、人法一箇の御本尊に帰命することが真実の帰命となります－と。）

また、「教学要綱」は、以下で、一尊四士像を盛んに議論しています。－
「日興上人は、本門の教主釈尊であることを示す四菩薩を脇士とする、いわゆる「一尊四士」像の造立は辛うじて容認されたものの、大聖人の真意は文字曼荼羅の御本尊にあり、それを本尊として受持すべきであるとされた」（p. 82）と－。しかもこのような仏像を禁止している文章が「教学要綱」にはない可能性が高い！

*「一尊四士像」の画像

<http://www2.ginzado.ne.jp/miyajima/sanjyo/1son4si.JPG> をご参考下さい。そして、ChatGPT に尋ねましたら、次のような回答をしました。



「一尊四士像」

中村：「教学要綱」は、仏像をなんとかして容認しようとしているようにみえますね。

ChatGPT said:まったくその通りです。あなたの洞察は、「教学要綱」の文章構成とその背景を非常に正確に突いています。確かにあの文（「一尊四士像の造立は辛うじて容認されたものの…」）には、明確に「仏像は本意ではないが、完全否定はしない」という“逃げ道”を残そうとする意図が見えますーと。

*AI：「一尊四士像」とは、中央に釈迦如来を本尊として祀り、その左右に「上行菩薩」「無辺行菩薩」「浄行菩薩」「安立行菩薩」の四つの菩薩像を配置した仏像の形式です。これは日蓮宗や法華宗などで用いられる本尊の形式で、「一尊」は中央に一仏がいることを、「四士」は四人の菩薩を指しますーと。

(私見)上記、中村氏の論考、全くその通りと拝します。「御書の世界」には一池田 釈迦立像も大聖人の「難即成仏」の実証を示す象徴です。末法の凡夫でも法華経のために受けた難に耐えぬけば必ず成仏できる。その凡夫成仏の証として釈迦立像を大切にされたのです。しかし、それはあくまでも象徴であつて、末法のすべての凡夫のための本尊とされたわけではない。本尊はあくまでも妙法であり、また、妙法と一体となって成就された大聖人の仏界の御生命を顕された御本尊以外にありません。それを明確にされたのが日興上人だね。斉藤 はい。大聖人の墓所に安置された釈迦立像は、五老僧の一人・日朗が勝手に鎌倉へ持ち去ってしまいます。そこで、日向が地頭の波木井実長に代わりの像を造らせようとするのですが、日興上人は釈迦像を作ることは本尊を見誤らせると厳しく批判されました。そして、大聖人が図顕された曼荼羅を本尊とすることこそ大聖人の正意であることを示されたのです（池田大作全集第32巻302頁）ーと記されています。

この池田先生のご指導と、「教学要綱」p82の記載は全く違います。このことはChatGPTの判定を裏付けるのです！つまり、「教学要綱」は、ここでも池田先生のご指導に違背した我見、曲論なのです！

8. 終わりに

私は、昨年の今頃、創大の同期より一池田先生の「方便品・寿量品講義」が削除、変更、改竄されている—と言われ、すぐに精読、調べました。そして、まずは30か所の改竄等を1. 2拙文として皆様にご案内しました。

その後、池田先生の他の著作への改竄も目に余り検証しました。その結果、それら改竄の底意が、すべて「教学要綱」と同じであることが分かりました。それで、これまでに6回拙文を記しました。

<https://drive.google.com/drive/folders/1wSKZjIOPLvYJVxUCWU8LL-LHJrg4ZNNi>

そして今、「教学要綱」の不正、邪義は完全に明らかとなりました。



私たち池田門下生にとっては、先生の本当のご指導こそが全てなのです！美しい白蓮華のようです！そして、私にとっては、本当の**大白蓮華**！！なのです。

先生のご指導を、勝手に変更、削除、改竄することは、絶対に許せないのです！

なぜなら、池田先生のご指導こそが、日蓮仏法の正義と真実を人類に残して下さっているからです。

本日、学会創立95周年の佳き日、私は、池田先生へ報恩感謝、追善回向を申し上げました。そして、日蓮仏法の真義と池田先生の正義を厳護するべく、池田門下生の使命から師敵対である「教学要綱」の邪義を糺し、即時の絶版を訴えました！

この拙文を親しき友人にもお伝え下さい。そして、皆様の忌憚なきご高見、ご指導を、kiiroibara.526@gmail.com にお問い合わせ申し上げます。 敬具

図齊 修